

人間以外の物を描寫する文藝、又は音樂建築等の氣分藝術と雖も同様なり。勿論此等の文藝は直接に、人生の意義社會の真相を闡明せよと云ふ吾人の要求を容るゝ物にはあらず。されど吾人が此の種の藝術に對する場合には、例へば人間以上の存在物を描くものに對する場合には、間接に人間の運命を描寫して、吾人に何等かの興味を興へん事を要求す。又人間以下の物を對象とする藝術、又は音樂建築等の如き氣分藝術に對する場合には、吾人の意識に氣分又は感情を喚起して、何等かの興味を興へん事を要求す。此等の要求は吾人が觀美態度に於て有する要求なるが故に、苟も此等の文藝にして價值ある物たらんには、吾人の有する此の要求に満足を興へざる可からず。故に吾人は文藝の内容は吾人に對して、意義ある物價值ある物たらざる可からずと斷言するを憚らず。

此の解釋は古來より眞の文藝と認めらるゝ作品と、少しも矛盾し牴觸せず。然るに理想派の説により、美的内容を理想とか善とか神とか絶對とか云ふ神聖なる物のみとせば、文藝の領域は甚しく狭められざるを得ず。又自然派の論に依り、單にありのまゝを寫し、自然の姿を畫きさへすれば美的價值ありとせば、文藝の

十一、意義ある物の程度

範圍は著しく廣げられて、高尚なる物と共に、下らぬ物意味なき物價值なき物をも包含するに至る。此の兩極端の中間に在つて、兩者の長を合せ短を捨て不黨不偏中正を得たる物は吾人の所謂意義あると云ふ規範なりとす。

(十一) 意義ある物の程度。意義深長と云ふ物には程度の差あり。例へば、ハムレットとホレシヨイ又はハムレットの叔父との如く、又は大石良雄と吉良上野介との如く、品性清く人格高く人の儀表たり模範たる人物と、陋劣卑賤にして人格低き徒輩とが描寫の對象となる時、前者は後者に比して著しく意義ある物なり。高潔なる人格の人は個性を現すと同時に、人の模範人の儀表を示す物なれど、賤劣なる人物は之と正反對なり。勿論人性には後者の有する闇黑的方面が固着するが故に、此の方面を描寫せる作品は、人生の闇黒面を曝露して、その真相を明かにする物なるが故に、意義なき物と云ふを得ず。従つて、此の種の文藝を單に破倫不徳を寫すとの理由によりて、排斥するは非なり。されど作者が偉大なる人格の人を描く時には、卓越せる個性を寫すとともに、人の模範を示し、正義に向つて向上し、人道に對して努力する有様を現し、人生の眞正なる意義目的理想等を彷彿せしむ

るを得然るに、陋劣なる徒輩を寫す場合には、此の如き真正なる人生の意義目的理想を示すを得ず。故に光明的方面を寫せる物に比して、闇黒的方面を畫ける物は、内容が人類に對する意義と云ふ點より見れば、劣れりと云はざるを得ず。此外、平凡なる人生の一部、發展の程度低き人間、下らない無意味の人物も、意義あると云ふ要求を充す様描寫せられうるは、勿論なれど、此の種の内容が人類に對して有する意義の程度は、低き物なりと云はざるを得ず。

第八節 第二規範の心理的説明

(一) 心理解釋へ第二規範の轉換。第二規範を心理的説明に轉換するは、簡單にして且容易なり。意義ある物に心理的に對應する物は何かと云ふに、吾人の思想と感情とが個體より範類へ擴張すると云ふ事なり。若しも、吾人の思想感情に個々の物が單に個々の物としてのみ與へられたる時には、其の思想感情は「意義ある」と云ふ位置に高められず、意義深長と云ふ資格を得んには、吾人の思想感情が個體に向けらるゝと共に、一般の物範類的の物に廣められ推し及ぼされざる可

一、心理解釋へ第二規範の轉換

二、概念と範類との相違

からず。故に文藝の内容はコンクリートなると共に、ゼネラルならざる可からず。インデビデュアルを示すと共に、スペシースを表はさざる可からず。然らざれば、内容は意味あると云ふ資格を得ざるなり。即此の第二規範の要求を充さんとするには、内容は特殊の一定せる内容なると共に、範類的の物に關係せざる可からず。

(二) 概念と範類との相違。觀美態度に於ては、吾人の思想感情が個體インデビデュアルより範類ヴァーグへ移り行く物なるが、此の範類と概念とは、似たる所も違ふ所もあり、似たる所とは何かと云ふに、範類も概念も、共に一般的性質を有すと云ふ事なり。異なる所とは何かと云ふに、兩者は二の大なる相違を有す。

(イ) 觀美態度に於ては、思想感情に對應する内容は或特殊の個體を現す。即文藝の内容は一般性を現す個體なり。故に個體が主なり。一般性はたゞ個體の中に認めらるゝに過ぎず。即一般性は第二内容なり。間接内容なり。個體と云ふ第一内容に一般性は附加せられたるに過ぎず。然るに概念に於ては、一般性が主なり。第一の目的なり。個體には重きを置かず。個體の面影は消失するを厭はず。即概念に於ては、此の個體又はあの個體と云はるる特殊の物が想起せらるゝと否とは無頓

着なり之を二者の相異の一とす。

(ロ) 第二の相違は美的態度に於ては、一般の物に推及し擴張する際に、只思想を供ふのみにては非なり。必ず感情を伴ふを要す。即個體中に種族性を認むる際に、單に思想が意識に起るのみにては美的價值なし。美的價值を得んとするには、思想と感想とが渾融して、個體より範類へ擴張するを要す。意識が概念に對する場合は、全く之と異り、感情とは無關係とす。只理性のみが働くに過ぎず。以上の説明により、吾人は下の事を斷言し得。感情を伴ふ思想、思想に伴ふ感情を以つて個體の中に範類を認むる事、即感情的思想が一般の物に擴張し濶大する事、之が意味ある内容と云ふ第二規範に一致する心理的狀態なりと。

(三) 此の範類は價值ある物でなければならぬ。感情を伴へる思想が範類へ擴張して行くこと云ふ文章が第二規範と一致するには、感情的思想が向つて行く所の範類その物が價值ある物ならざる可からず。若し此の範類にして、價值なき物ならんか、その内容は意義なき物とならざるを得ず。文藝の第二内容たる範類が價值ありてこそ、文藝が價值ある物意義深き物となりうるなれ。即範類に價值あ

三、此の範類は價值ある物でなければならぬ

ると云ふ制限が附加せられて、始めて内容が「意義ある」と云ふ資格を得。

今詩人によりて、偉大なる行爲又は事件が描寫せらるるとせよ。賞翫者は先づ其の事件又は行爲に對して、感情的の價值判斷を下すを常とす。曰く「此の事件は、大なる道徳的價值を有すと。此の感情的價值判斷には、此の道徳的行爲は、人生の目的又は意義に對して重大なる物なり」と云ふ第二の判斷が續いて起る。かくその行爲が人生の意義目的に對して、重大なる物ならば、その行爲は吾人に對して、意義と價值とを有す。即觀照するに値すと云ふ第三の感情的判斷が自然に起るは明かなり。

吾人が偉大なる事件を描寫する作品を對觀する際に、自己の意識内に、隱然として冥々の内に起り來る此の感情的價值判斷を分拆せば、殆んど上述の如き經路を取るを見ん。之に反し、詩人が無意味の事件を描寫せんか、必ず反對の結果に到着すべし。即此の如き無意味の事件は何等の價值なき物にして、全く人生の意義や目的に「觸れず。故に觀照するを値せず」と云ふ結果に歸着す。

以上説明し來れる所を綜合せば、第二規範に心理的に相當する物は「感情を伴

四、此の心理的經過の人心に及ぼす結果

五、第一第二規範は共に根本的の物なり

ふ思想が個体を觀照すると共に感情的見地より見て價值ある範類へ擴張す」と云ふ心理的經過に外ならず之を略言すれば、個体より價值ある範類へ感情を伴ふ思想の擴張となる。

(四) 此の心理的經過の人心に及ぼす結果。此の如き意識の經過は稍複雑なる物にして、加ふるに此の意識の經過は獨り美の範圍にのみ固有の物に非ず。美以外の範圍に於ても起り得る物なるが、扱何故に此の如き複雑なる心的經過が美的規範の基礎となるを得るか。吾人は此の心的經過の吾人に及ぼす結果を觀察せざる可からず。此の心的經過は複雑なる要素の結合なりと雖も、吾人の心に與ふる結果は意味深しと云ふ單一なる印象に過ぎず。此の意味深しと云ふ印象は極めて重要な物にして高尚なる精神を有する人知識の開發せられたる人は常に必ず要求する所の物なり。此の心的經過の結合が單に美にのみ固有の物に非ざる上に、頗複雑なるにも係らず、美的規範の根據となる所以は實に茲に存す。

(五) 第一第二規範は共に根本的の物なり。意義ある内容と云ふ要求は實際一の新しき獨立的規範なりや。此の疑を抱く人は第一と第二との規範の意味を明

かにするを必要とす。第一の規範即形式と内容との統一が十分に實現せらるゝとも、尙その内容が無趣味無意義の物たるを得此の事を心理的に云へば、價值ある範類へ感情的思想が擴大すると云ふ心的經過はなくとも、尙觀照と感情との一致と云ふ心的状態が起るを得。幼稚なる讀者が下らない小説を耽讀し、小供が繪本に見惚れ、玩具を喜ぶの類は此の例なり。客觀的に云へば、下らない内容がそれ相應に下らない形式を取れる作品は第一の規範を實現せる物なるにも關らず、その内容は何等の意義を有せず。

知るべし、此の二規範は全く別種の物なるを。故に第一規範を第二規範より轉化し誘引せんとするは不可能なり。此の反對も亦同じ形式と内容との調和はなくとも、即觀照と感情との融合一致は缺くとも、尙人類に對して十分なる意義を有する物あり。科學哲學宗教等は即之なり。此等の物は人生に對し十分なる意義と價值とを有すれども、決して美的感情を喚起する物に非ず。之に依りて見れば、第二規範は第一規範の源泉なりと思惟するは不可能なり。

故に感情的思想の擴張云々の心理的經過は一の獨立せる根本的の物にして

觀照と感情との一致と云ふ心的状態と併立する觀美態度の心的源泉なりと云はざるを得ず。

第九節 意義ある内容と人生觀

一、人世觀世界觀

(一) 人生觀世界觀。一方に於て、意義ある内容と、他方に於て、人生觀又は世界觀とは、密接なる關係を有す。花鳥、風月、山川、河海等は普通吾人に何等の人生觀又は世界觀を語らず。然し人類の努力、奮闘、成功、失敗、勝利、屈從、欲望又は切々たる愛情、激烈なる悲哀、さては、人情の機微に觸るゝ物、人生の秘鑰を穿つ物、社會の真相を發く物、此等の物が吾人に對し意義ある物ならば、必ず人生觀又は世界觀を現す物なり。

茲に予は廣義に人生觀又は世界觀なる語を解釋せんとす。即深遠なる哲學的の解釋のみならず尙感情又は信仰により、或は個人の經驗によりて作れる人生の相世界ソグワの面影をも、人生觀又は世界觀の一と見做す。前節に述べたるが如く、人生又は世界を道德、宗教、科學、藝術、哲學、感情等の方面より觀察し得たる結果は、廣

義の人生觀又は世界觀となる。

吾人が人生觀又は世界觀を此の廣き意義に採用せば、幽玄なる哲學的内容を包含せざる文藝と雖も、猶人生觀又は世界觀を含むと云ふを得べし。茲に世界觀と人生觀とを並稱し來りしと雖も、元來世界觀なる物は、形而上の方面に深く考を潜めたる人生觀に外ならず。若し人生又は人性の解釋を實在ライエンの根柢となれる物、即常住不滅の物、永遠の物、不變化の物、換言せば、絶對とか神とか云ふ物に關係させんとするや、そこに世界觀が成立す。人生觀は全く此の如き關係より分離して、單に人生を地上の事々物々に關係して、解釋せんとする物なり。されど、此の二者は共に相關係する物なるが故に、兩者の區別は吾人に取つては重要な物に非ず。便宜の爲め、以後は單に人生觀と云ふて此の兩者を指す事とせん。

(二) 美學は一定の人生觀を認容すべきか。美的靜觀に於て美の内容が意義ある物なりや否やは或一定の人生觀に依りて、批判せらるべきか？ 美的鑑識者は意義深しと云ふ標準を作品に適用すると同時に、又一定の人生觀に照して、作品を批判せざる可からざるか？ 即鑑識者に對して權威オウケンを有する哲學があるか？

二、美學は一定の人生觀を認容すべきか

若しありと假定せば、吾人は各文藝の内容は此の如き哲學に依りて、創作せられん事を要求するの權利を有し、又それに依りて製作するの義務ある事となる。哲學が完全に理想的發達を遂げたる曉は、此の如き權威ある人生觀を得べしと雖も、現今の有様にては此の如き人生觀は未だ存在せず。

ヘッゲルの唯物論、ニーツェの超人説、マルクスの社會觀等が眞理にして背鑿に當れる物ならば、美學者は次の様に云はざるを得ず。美の内容は必ずヘッゲル、ニーツェ、マルクスの説と一致せざる可からずと。然し吾人が狂的獨斷者にあらざる限り誰か人生觀中の或物を眞なりとし、他の物を偽なりと斷ずるを得んや。元來、人生觀なる物は感情信仰經驗境遇性質等の如何により、又は宗教道德等の差異によりて、大に異なる物なり。故に人生觀なる物は、大に個人的特色を帯び或は厭世となり、樂天となり、又は利他主義を奉じ、自利主義を取り、或は快樂説となり、嚴肅教となり、功利説となり、自我實現説となり、又は個人主義、社會主義、家族主義、國家主義、世界主義となり、千差萬別孰れが是、孰れが非なるかを知らず。畢竟人生觀の正否如何は、人生の目的が決定せられ、理想が闡明せられたる上ならては、知るを得ざるなり。故に文藝はニーツェの超人道德に、血と肉とを與へざる可からずとかトルストイの無抵抗主義を具體化する物ならざる可からずなどと主張する者あらば、その者こそ、實に思想界の獨裁君主にして文藝界の僭越者と云はざるを得ず。

三、人生觀に對する制限

(三) 人生觀に對する制限。人生觀はかく千差萬別なれど、扱此の種々なる人生觀のあらゆる物は、皆美の内容として採用し得らるゝか、非ず。人生觀中には制限ありて、採用し得る物と、得ざる物とあり。然らば其の制限とは何ぞと云ふに、意義あると云ふ規範に外ならず。人生觀が意味深しと云ふ要求を満足さする物ならば、美の内容として採用するを得。若し或人生觀が全く無意義の物、或は少くとも無意味に近き物ならば、美の内容とするは非難すべきなり。然らば、美の内容をして意味深遠ならしむるを得ざる人生觀、換言すれば、無意味なる又は無意味に近き人生觀とは、そも如何なる物か。

云ふ迄もなく、平凡卑俗の域を脱せざる人生觀の取るに足らざるは明かなり。詩歌小説中には住々此の種の安つばい薄つべらな道德觀や社會觀を含む物あり。此の外、假令幽玄なる思想、高尚なる精神に觸るゝとも、其の人生觀が猶不熟生硬

にして、矛盾し撞着せる物ならば、意味深しと云ふ資格を得るに足らず。例へば、獨逸の詩人ケルケルの戯曲は、氏の人生觀が蕪雜なるが爲めに、著しく感興をそぐ。之に反し、シルレルの作は偉大なる且嶄新なる人生觀や世界觀を含む。然し詩聖シルレルの如き天稟の偉才を以つて、尙多少晦澁の分子、朦朧の要素を含むとの非難あり。殊に氏の初期の作例へば、群盜等の戯曲に於て然りとす。されど、兎も角讀者の心に、人生の面影、社會の相、運命の數奇等を深刻に印象するの力あるは否定すべからざる事實なり。此の外、人生觀は歪める物、つむじ曲りの物、狂氣染みたる物、不眞面目の物、奇を衒ふ物なる可からず。此の如き性質が加味せらるれば、益々内容は意義あると云ふ性質を失ひ、作品は價值なき物とならざるを得ず。吾人が賞翫の際、此の如き似而非なる人生觀に遭遇せば、必ず次の如き考を得る物とす。即詩人たる者は不眞面目なる猥りがまじき人生觀を以つて、吾人を煩はす可からずと。此の外、猥褻淫靡なるいかゞわしき作品は多く不眞面目の態度より製作せられたる物にして、排斥すべき物たるは勿論なり。

四、誤解の防禦

(四) 誤解の防禦。茲に吾人は誤解を防ぐ爲めに、一言辯じておく。必要あり。假令

淺薄不熟、輕卒不眞、面目等の惡質を受けたる人生觀は、意義ある内容と云ふ規範と相容れざる物なりと雖も、吾人は勿論絶對的に藝術家が此の如き人生觀を描寫するを否定せんとする者には非ず。實に屢々此の如き不健全なる人生觀を有する人物が、作中に現るゝの必要を認むる場合あり。快活なる滑稽を描寫せんとせば、是非とぼけたる輕はづみのひょうさん者を點出するを要す。而して、此の場合に、此の種の人物が自己の淺薄なる人生觀を云ひ現すが必要なり。然しまた眞面目なる喜劇悲劇に於ても、屢々對象の如何によりて、此の如き人物をして淺薄なる人生觀を述べしむる必要あり。例へば、イブセンの悲劇「ノラ」に於て、平凡なる人生觀を抱ける「ノラ」の夫は必要人物なり。此の外、「ムレット」に於ける「ホレーシヨ」シルレルの「たくみと戀」の中に現るる「カルブ元帥」、「ヘッベル」の「マリアマダグダレナ」の中に出づる「レオナルド」等はみな卑賤なる人生觀を代表すると雖も、吾人は決してそを作の缺點と云ふを得ず。只吾人は此の如き無意味の人生觀が作品の主要なる内容を成して、その文藝の生命たり精神たる場合にのみ、その淺薄なる人生觀を意味深き内容と云ふ第二規範に照して、排斥せんとするに過ぎず。

五、現實界の事物に對する適用

(五) 現實界の事物に對する適用。 雜多の人生觀中の或物を採用せんとするには、意義あると云ふ規範に従ひ、制限を加ふるの必要あるは、獨美術に對して有効なるのみならず、吾人が現實界の事物を批判せんとする時にも、必要なり。偏狹淺薄なる道德的意見を持つて、世界歴史の事件に臨まば、その偏狹なる人生觀の爲めに、世界歴史中の人物事件の眞價は全く打破せらる。頼朝の如き偉人を評價するに、小さき道德の眼を持つて之に對し、兄弟相闘げるを盾として、頼朝を批判すれば、頼朝の價値は否定せられざるを得ず。ナポレオンを品臨するに、共和主義社會主義を持つてせば、ナポレオンの價値は皆無となる。文藝の内容を評價する場合も、之と同じくみだりに狹小なる人生觀を以つて、臨むは非なり。公正なる判断を下さんには、多趣多様なる人生觀中、それに適當なる物を適用せざる可からず。自然界の對象物に對しては、此の要求は殆んど皆無なり。自然物は人生觀又は世界觀と何等の關係を有せず。

第十節 觀美態度の假象性

一、觀美態度の一新方面

(一) 觀美態度の一新方面。 第三規範を研究する準備として、先づ觀美意識の重要なる一方面を研究する必要あり。美的感情には實際感情と大に異なる特性あり。吾人は此の美的感情の特性を研究して、後第三規範を建設せん。

古來より多くの美學者は、美に關して、色々の説明をなせり。曰く、美は假象なり。曰く、形像なり。曰く、遊戲なり。曰く、物質に關係なき純形式なりと。又曰く、美的態度は全く無關心なり。美的冥想なり云々。かく美の説明は種々雜多なりと雖も、此等の説明は皆殆んど同一の或物を解決せんとする物なり。其の同一の或物とは何ぞ吾人は之を次に説明せん。

吾人は先づ其の或物即美的態度の一特性に心理的説明を加へん。此の心理的説明に依りて、吾人は第三規範を得べく、且上述の諸學説が、皆美的態度の一面を説破せる物なる所以をも明かにするを得ん。

(二) 觀美態度は實際感情を含まず。 云ふ迄もなく、觀美態度は所謂實際感情を含まず。勿論吾人が文藝に對するや、實際或感情を受くと雖も、此の感情たるや、現實界の事物に對して起す實際感情とは、大に其の趣を異にす。美感は漱石の所謂

二、觀美態度は實際感情を含まず

非人情的の物にして、實感よりも強度弱き上に、性質を異にす。美感は決して吾人の意識内に、利己的行爲の衝動をも、又は利他的行爲の動機をも惹起せず。即美感は實現せんとする慾望意志行爲又は智識欲、研究心等を刺戟せず。又吾人の運命とか不幸等の心配を以つて、意識を充しもせず。之を美感と實感との著しき差異とす。かく美感には、現實性が殆んど無し、全くなしとは云ふを得ざれど、其の現實性たるや極めて薄弱なり。

美感にはかく現實性無きが爲め、換言せば、觀美態度に於ては吾人は重苦しき現實との關係を脱離するが爲め、吾人は藝術の賞翫に堪え得るなり。美的の恐怖、愛情、渴望、嫉妬、悲哀、忿怒等は之に相當する實感と、あらゆる點に於て類似すと雖も、只此の現實性を缺くといふ一點に於て、相違す。美的感情を普通假象感情シキイメジユルと云ふが、此の語はよくその性質を云現はす。然し假象感情と云ふもの、美的感情は過去に經驗せる實際感情を想起せる物、即感情の表象、感情の再生には非ず。假令實感より強度は弱く、性質は異ると雖も、吾人が現に且實際に感ずる感情なり。

三、第三の美の心理的源泉

(三) 第三の美の心理的源泉。此の假象性は美に固有の心理的特性にして、やが

て美の心理的源泉の一なり、即之より美の第三規範が起る。實際美的態度に於ては、第一感情に充ちたる觀照、第二感情を伴ふ思想が範圍へ擴張すると云ふ心的状態が起ると共に、第三實際感情の屏息、換言すれば、現實的の感情界より解脱せる美的感情が活動するを見る。

かく美的感情には現實性なしと云ふ事は、美的感情の根本的特性にして、他の特性より由來せる化成的の物に非ざるは疑を容れず。觀照と感情との融合一致と云ふ心的状態は、普通の實感に於ても、起るを得。例へば、自己の崇拜する人物の演説を傾聽する際、恍として辯士の身振りや、手眞似や、言語に見惚れ聞惚るる時、又は感覺的情欲を持つて、裸體畫に見惚るる時には、十分恍惚として感情中に没入せる物なり。又人をして恍惚たらしむる内容が意義ある物なりとも、猶實際感情中に自己を沒了すと云ふ心的状態が起るを得。故に第三規範は決して、第一第二の規範より誘引し得る物に非ず。之と同様に、第一第二の規範は第三規範より派生する物に非ず。例へば、怠け者が閑に任せて、無意味の空想に耽ける時には、第三の條件即實感の屏息と云ふ條件が充さるると雖も、之に依り、決して、第二規範

一、觀美態度に於ける無意志性

の要求する如き意義あると云ふ條件も、第一規範の要求する觀照と感情との一致と云ふ條件も、充されざるは明かなり。
以上は美的態度の假象性に關する大體論なれど、次に吾人は此の假象性を引起す條件を三に分ち其の各々に就きて詳論すべし。

其の一 無意志性

(一) 觀美態度に於ける無意志性。觀美態度が殆んど實際感情を交へざる事は上述の通りなるが吾人は茲に先づ欲望と意志とに就いて更に考究せん。
カントは美の享樂は無關心インテレスレスなりとし、美感はあらゆる利害關係より分離せる物なりと説く。ショーペンハウエルに依れば、美的瞑想は意志なき認識なり。シルレルは美術は遊戯なりとの説により、美を生活又は意志より離脱せる物とす。スペンサーもシルレルと説を同じうす。然し觀美態度は果して絶對的に無意志又は無關心なるか、或は只比較的の物なるかが問題となる。フィッシャーは美を不眞面目の眞面目エレンストインテレスセオリーの關心と云ふ警句を以つて説明せるが、正鵠に中れりと云はざるを得ず。何となれば、美的靜觀は或意味に於ては、無意志なれども、他の意味に於て

二、實現せんとする意志なき事

は、意志を含めばなり。吾人は次に美的靜觀に於ける無意志性は、比較的の物なる所以を明かにせん。

(二) 實現せんとする意志なき事。吾人が或事を實現せんとする場合には、固執性を有する目的觀念が意識内に起り、次いで決意となり、實行となり、目的を満足さする物なるが、此の如き實現の意志又は實現せぬと云ふ意志は、美的靜觀と兩立し難し。例へば、田園の景色を對觀する時に、土地を所有せんとか、又はそこにある果物を味ははんとか、云ふ意志が起れば、其の瞬間に於て、美的情緒は滅亡す。婦人の形象に對する時、その形象が書かれたる假象なりとも、將た實物なりとも、感覺的情欲を以つて臨むや否や、又はその書を買はんと、その欲望起るや否や、又は賣買價額に腐心するや否や、その刹那に美的情緒は忽焉として雲散霧消に歸す。

(三) 情緒の美的態度に對する關係。總ての欲望意志計畫決心實行等の意志作用は悉く美的態度と調和し得ざると同様に、情緒エモーション又は感情アフェクトも美的態度と一致せぬ事あり。情緒や感情が直接に實行せんとする意志を要素として包含する場合には、觀美態度と調和するを得ず。恐怖、心配、怨恨、憎惡、嫉妬又は戀愛、高慢、希望、歡喜、

三、情緒の美的態度に對する關係

信仰等の情緒が若し吾人の生活せんとか、權力をえんとか、する意志や、自己保存の衝動や、又は吾人の運命等に關係する物ならば、此等の情緒は美的感情を妨害し、又は打破する物なり。藝術家的天性を有する人は、往々病人病床病室等を美的對象として見る事あり。然し病人の家族や、親戚や、朋友等は病人が死亡する心配や、又は回復する希望を持つて、對せざるを得ざるが故に、全く藝術家の見方とは趣を異にす。如何に輪奐の美を盡せる建築と雖も、自家の眺望を損ぬるを怒る人に取つては、憤怒の情の失せざる間は、その建築の美を感ずるを得じ。之と同じく、信心深き信徒には、莊嚴なる七堂伽羅も、優秀なる佛像も、又は卓越せる神畫も、美的對象となるを得ず。若し信徒にして、此等の物より美的印象を得んとせば、一時信仰の三昧より脱れ出ざる可からず。吾人がハツプトマンの織匠を讀んで、現に社會主義や無政府主義の受くる迫害に對し、恐怖心配の念に充さるゝならば、美的情緒は滅亡す。又讀者が作中の主人公を何故に立派の人格に描寫せざりしか、又は何故に主人公を殺せしか、等云ふて作者を咎むるならば、その瞬間に於て、讀者は美的賞翫者たる資格を失ふ。

四、道徳的情意の排除

(四) 道徳的情意の排除。道徳的意志又は感情之も直接に實現又は非實現と云ふ事に關係する時には、美的態度と兩立し難し。非人や盜賊の畫を見て、彼等の怠惰非行不徳義等を責むる道徳の憤怒が看者の心に起らば、それは藝術靜觀の態度以外に脱出せる物と云はざるを得ず。此の外、詩歌を讀む時に、國家に對する愛國の念、主君に對する忠義の情、自由獨立等に對する激烈なる實際感情を喚起し、次いで、意志を動かし、何等かの行爲に發表せんとせば、同じく美的靜觀の埒外に逸出せる物なり。或は又教師が詩歌文學を講ずる際に、道徳的に利用し、生徒をして或教を實踐猶行せしめんと企つるならば、同様に生徒は美的態度以外に誘ひ出されざるを得ず。

五、宗教的情意の排斥

(五) 宗教的情意の排斥。宗教的情意も同じ見解により排斥せらる。マリアや、クリストや、地獄極樂等の宗教畫に對し、實際の信仰祈念に意識が襲はれんか、美的享樂は打破せらる。佛像神畫等に對する時、祈禱禮拜信仰祈念が起らば、假令感情が如何に高潮に達するとも、純粹の美的感情と云ふを得ず。然し美が宗教や道徳の爲めに利用せらるゝとも、強ちに非難すべき事には非

ざるべし。美は色々の物より利用せらるゝを許す。即美は上は宗教道德國家社會科學哲學等より、下は家具家財の日用品又は身邊の裝飾品に至る迄使用せらるゝを拒まず。美の神の大御心は、天照す日の如く、隈なく照し、普く恵む。されど、斯く宗教や道德等に利用せらるゝ場合には、美は不純の形に現はれたる物にして、吾人が斯の如き物を對觀する心的状態は、酔の酔なる觀美態度に非ざるを知らざる可からず。

(六) 極端なる無意志説の非難。カント、シヨウベンハウエル又は他の學者等は美的態度の無意志又は無關心を極論して、此無意志無關心に制限あるを等閑視せる嫌あり。實際カント、シルレル、シヨウベン、ハウエル、スペンサー等の説に従はば、美觀がその力と強さとを失ふ。宜なりニーツが此の如き見地より大に無關心の快樂説を罵倒せるや、吾人は次に如何なる意志が、美的態度中にあるかを考究せん。美的態度と調和し得る意志を考究せんとするには、美的態度中に起る種々の感情を審査するを好都合とす。

(イ) 状態感情中の意志的の物。吾人は先づ状態感情を捕へて、考察せんに、若し

六、極端なる無意志説の非難

(イ) 状態感情中の意志的の物

美的感情が人心を高め、又は強め、或は惱まし、恐れしむるが如き感情ならば、殊に意志的の物が此等の感情中に現るるを見る。總の高尙なる物偉大なる物神聖なる物などに向つて、向上せんとする努力や、自由幸福を希求する感情や、善や徳を憧憬する情緒や、又は世界人生の恐るべき秘密に對する恐怖、人間の運命に對する危懼又は人生の卑陋醜怪に對する嫌惡等の如き感情が著しく意志的性質を帶ぶる事は、詩歌を賞翫する人々の親しく經驗せる事なるべし。然し美的感情中に包含せらるゝ美的意志は、實際的意志と異なる特性を有す。美的意志は更に實際の心配利害義務等の念に充さるゝ現實の自我とは、何等の關係なきがその特性なり。即直接に實現せんとして、緊張する努力作用は、美的意志と全く没交渉なり。美的意志の目的となる善惡とか自由とか幸福とか又は運命人道偉大なる物神聖なる物等は、全く現實界に屬する物に非ず。加之、美的意志の對象は、一般的の物不定的の物にして、決して特別に指定せられたる物に非ず。故に美的意志は或一定の對象を實現せんとする意志に非ず。一般の善とか漠然たる幸福とか不定の運命等に對する意志なり。かく美的意志の對象は、現實の人生より遠く隔離せる

(ロ) 同情感情中に含まるゝ意志的の物

一般的の物範類的の物なり。此の結果、美的意志は一般的の物を實現せんとする努力なりと雖も、その實現の努力は、不定不確實の特徴を有するに至る。

(ロ) 同情感情中に含まるゝ意志的の物。美的同情感情はかの状態感情よりも、一層明かに意志の要素を含む、然しそれにも係らず、美的同情中にも、亦無意志性と云ふ事が制限せられたる意味に於て存在す。元來作中の人物に對する同情は、直接或事を實現せんと努力する現實の自我とは、全く無關係なり。略言せば、現實の自我は美的同情より抽捨せらる。吾人の美的同情を引く對象は、一定の個體をなせる人間又は人間的の物なりと雖も、此の人間又は人間的の物は、全く現實の存在物には非ず。美的に觀照せらるゝ對象が、現實の物たるや否やは吾人に取つて全く無關係なり。ゲーテのエルテルや、キルヘルム、マイスタア等が吾人の同情を惹く所以は彼の悲哀煩悶又は歡樂が現實の物たるにあらず。只彼等の中に人情の機微を穿ち、人性の秘鑰に觸るゝ所あるが爲めのみ。

美的同情感情はかく個々の人物に關連する物なるが故に、往々觀者の美的同情が實際的性質を帶ぶと云ふ危險を帶ぶ。然し美術に對して、此の如き危險の起

(ハ) 客觀的感情中に含まるゝ意志的の物

るは稀なり。何となれば、觀者は美術的形象、即美術家によりて作られたる假象に對する物なりとの考を有するが故に、假象を現象視して、作中の人物に實際的同情を寄する事は全く無きにし、もあらねど、極めて稀なる事とす。美的同情感情が實際的同情と變化するならば、必ず觀者の美的感情が生硬不熟なるに依るか、然らずんば作家が反美術的手段を弄せるが爲めなり。之に反し、自然美に對する時には、此の危險が著しく増大す。自然美には、美術品と異り、此の如き危險を豫防する手段なし。自然美の對象は假象に非ず。又單に形象にも非ず。實際の物なり。故に自然美より受くる美的同情は實際の感情となり、易き傾向を有す。

例へば、葬式婚禮祭典等の事件は容易に吾人に純粹なる美的印象を與へ得る物なれど、然し對觀者が此等の儀式に直接關係ある者ならば、美的對象として對觀するを得ず。

(ハ) 客觀的感情中に含まるゝ意志的の物。吾人は尙客觀的美感を考察せざる可からず。此の客觀的感情中にも、亦色々の欲望や意志が現る。詩歌小説の賞翫に於ては、特に然りとす。詩人に依りて描寫せらるゝ人物は、唯に氣分情緒を有する

のみならず、猶又欲望意志計畫決心努力實行等を爲す。然るに吾人が詩歌小説等を賞玩して、客觀的感情を受くる場合には、對象的人物と同様なる心的状態を取る者なるが故に、吾人が對象的人物が經驗する欲望意志決心實行等の努力を經驗するは當然なり。故に賞玩者は唯理想的の物に對する不定の努力や、同情中に包含せらるゝ努力を實行する耳ならず、猶又直接に何等かの目的を實現せんとするの努力を經驗せざるを得ざるなり。

かく客觀的感情中には、著しく意志の働が加味せらるゝと雖も、猶それにも係らず、觀美態度の無意志性と云ふ特性を打破するに足らず。

先づ吾人の思考すべき事は、客觀的感情及び其の客觀的感情中に包含せらるゝ意志は、元來觀者が美的對象中に投出せる感情及び意志なりと雖も、此の感情や意志は自分自身の感情及び意志には非ず、全く他人の意志感情なりと意識せらるゝ事なり。勿論、此の意識は明瞭に自覺せられずと雖も、必ず對觀者の心には此の自覺あるべき等なるが故に、觀者は客觀的感情中の欲望や意志を現實の自我の欲望や意志と同一視せざるを得るなり。即客觀的欲望や意志は現實の自我

の希望や心配や運命や又は實現の努力とは全く無關係なり。故に吾人は次のやうに結論し得「客觀的感情は多くの激烈なる努力や意志を包含すると雖も、此等の努力や意志や欲望は、實際現實の私の努力意志欲望とは、全く異なる物なり。故に、茲にも亦、かの無意志性が成立するを得」と。

此の事は美術に對してのみならず、自然美に對しても有効なり。若しも、吾々が勇敢なる決心をなせる人を美的對象として見る時には、吾人の意識に決心と云ふ意志作用が起る。されど、此の決心は、現實の自我に屬する物には非ず、目の前にある人の意志活動なりとの考が吾々の意識に上る。故に吾々が觀照して得たる此の意志活動は、比較的無意志性と云ふ性質を受くる物とす。

此の外美術に於ては、實際意志活動を抑壓する物あり。元來美術は假象にして、非現實的性質を有す。然るに、美術特有の此の假象性なる物が、亦吾人をして、客觀的意志活動は、實際の意志活動と全く異なる物と感ぜしむる力を有す。何となれば、美術の賞玩に際して、吾人は、美術は唯假象を示すに過ぎずとの自覺を有するが故に、客觀的意志は假象的意志にして、現實の我に直接關係を有する實際的意

志とは、全く異なる物なりと自覺せざるを得ざればなり。

故に美術に於ては、二の方面より客觀的の意志や努力が賞翫者の自我より隔離せらる。即客觀的感情は我の感情に非ず、對象の感情なりとの意識が其の一にして、他は美術は只假象を吾人に示すのみと云ふ考なり。

(七) 無意志性の成立する條件。

(イ) 自然物に對して。 美的靜觀に於て無意志性が成立する條件は何ぞ。此の問題は美術品と自然物とによりて、趣を異にす。先づ自然物に關して述べん。吾人が自然物に對して、無意志的靜觀をなさんには、文藝に對するよりも、多大なる天賦の才能と熟練の技倆とを要す。美術品が比較的容易に、對觀者に、無意志的靜觀を許す所以は、美術家が極力賞翫者をして、無關心の享樂を爲し得るやう作品を編成するに勉むる事と、美術その物が假象なる事とが重なる原因なり。自然物は之に反し、現實の物なるが上に、無意志的靜觀に適するやう、人爲的に構成せられたる物に非ず。故に現實の我を忘却して、無意志的靜觀を遂げんには、一に對觀者の力に俟たざる可からず。世間には往々暫時の間すら、現實の自我を没却するに、甚

七、無意志性の成立する條件
(イ) 自然物に對して

困難なる人あり。之を我執の人と云ふ。此の如き我執の人の意識には、欲望意志等が執着するが故に、美的觀照の際にも、此の意志の爲めに、美の無意志的賞翫を實行し得ざる物とす。

然し人に依りては、堅苦しき現實界を脱離せんとする渴仰の念強く、特に、美的靜觀の場合には、容易に現實界を超越しうる能力を有する者多し。此の如き高尚なる人々は、莊嚴なる日没とか、皎々たる月夜とか、明媚なる風景とか、爛漫たる櫻花等に對する時は、勿論、陰鬱なる黄昏、鬱陶しき梅雨、暑苦しき夏、肌寒き冬の景等に對するとも、又は砲彈雨注する戰場に立つとも、尙緯々として、美的靜觀の態度を取るの餘裕を有す。此の種の人は、所謂美的悟道の人、藝術的解脱の人、安住の人は、先天の才あらば、容易なれど、尙熟練の能力によりて、藝術的解脱の域に入るを得べし。文藝によりて、美的靜觀の練磨を重ねたる人は、自然美に對するも同様に、美的態度を維持するの力を得るは疑を容れず。

一般に自然物に對して美的靜觀を得ると否とは、自然物を實物として見ず、唯

形式として見、その形式に注意を容易く然も確實に傾注し得ると否とによる。かく形式その物に注意を凝集し得れば、想像に乏しき未熟なる人と雖も、物質的の我をして、沈黙せしむるを得。莊嚴雄大、優麗婀娜、愛らしい、慕はしい、美しい、花やか、さらびやか等の性質を有する形式は、疑もなく無意志的靜觀をなさしむる力を有す。此の外ローマンチックの風趣を添加すれば、又美的靜觀を喚起するに容易なり。又は山や海や川や谷が巧妙なる配合明媚なる布置を得れば、同じく超現世的の美的情緒を與へ易し。

(ロ) 美術品に對して

(ロ) 美術品に對して。自然物よりも、美術品は遙かに、容易く美的靜觀に耽らしむる性質を備ふ。美術品に對する場合には、吾人は美術の假象界に對すとの明確なる自覺を有するが故に、美術は現實の自我を刺戟して、意志を催起せしむる力なし。之を無意的靜觀の成立に好都合の條件となす。

扱次に如何なる特殊の手段方法によりて、美術家は無意志的情緒が賞翫者の意識中に起るを容易ならしむるか。此の事を研究せんとするならば、吾人は夫々の美術に於ける特殊の關係を、檢覈せざる可からず。之は容易ならぬ事業にして、

夫々の専門家に圖り、種々雑多の手段方法を述べざる可からず。故に吾人は若しも、現實的自我の念が看者の心に浮ばざらしめんには、消極的に、美術家が採用すべからざる事の二三を述ぶるに止めん。殊に現今の文藝界に於ては、比較的無意志と云ふ美の規範を犯して憚らざる者あるが故に、此の問題の大體を瞥見するも無用には非ざるべし。美的靜觀に於ける意志の沈黙と云ふ規定は、甚必要なる物なりと雖も、絶對的に嚴守せざる可からずと主張するは、稍此の法則を過重視せる物の如し。何となれば、或特殊の場合には、必ずしも無意志たるを要せざればなり。純粹なる美的感情に、多少の實際感情の混淆する事は、美術以外の、或理由からは、寧ろ願はしき事あり。例へば詩人が一面に於て、道德的革命家となり、新道德を建設して、暗黒なる現代に一道の光明を與へ、沈淪せる衆生を墮落より救濟せんとするは、或時代に於ては、尊ぶべき事と云はざる可からず。勿論此の如き詩人の作は、美的情意と實際感情との混淆せる物なるが故に、醇の醇なる文藝品を以つて、目すべき物に非ず。従つて、醇乎たる美的要求に反する物と云はざるを得ず。されど、人生とか文明とか云ふ、立脚地より見れば、此の如き混淆は、むしろ歓迎す

べき物とす。故に次に美的静観と抵觸する物と雖も、美的以外の見解點より、是認するを得る場合を調べん。アートファアート云々は文藝の自由美術の獨立の爲めに煥發せられたる宣戰の布告にして、藝術の爲めに萬丈の氣焰を吐けるものなりと雖も、一面には多少の偏見を含めるが如し。

(八) 美的静観の妨害

(イ) 道徳的意志の挑發。扱、美的静観を妨害する物の一は、道徳的意志の挑發なり。文學繪畫又は音樂等が賞翫者に、道徳的感情を喚起し、遂に決意と實行とを促がす事は往々あり、此等の物の中、文學が最も多く讀者の意志を激勵するに適す。詩人は道徳的命令を、積極的と消極的との二方法によりて、發表するを得。積極の場合には、詩人は理想を揭示し、人道を指示し、以て國民を鼓舞激勵して、人たる者が向上努力せざる可らざる理想郷を實現せん事を要求す。敵國の征服、暴君の懲膺、自由平等、忠君愛國、革命刷新等を歌へる抒情詩は皆此の部類に屬す。此等の詩歌は讀者の美感を刺戟するを以つて甘んぜず、更に著しく實際感情を喚起し、意志を激勵して、一定の目的に向つて勇猛突進せしめんとする物なり。

八、美的静観の妨害
(イ) 道徳的意志の挑發

消極的方法によりて、詩人が讀者の道徳的意志に刺戟を與ふる場合には、暗黒醜怪の方面を忌憚なく描寫し、不義不徳を未發に防がしめんとする物なり。然し人として耻づべき状態や、又は讀者に、嫌忌恐怖悲痛憤怒心配其他良心の苦痛等を與ふる(勿論此等の感情は實際感情には非ず)暗黒界を、單に描破するに止まる場合もあり、殊に、近世又は現代の文士は、此の如き墮落せる状態を曝露して、不安恐怖悽愴等の辛辣たる感情を喚起するを好む。ゾーデルマンの「ソドムスエデン」や「シメツテルリングス」シラハト等は美的印象と共に、劇烈なる嫌忌厭惡の念を惹起す。イブセンの「ゲスペンステル」トルストイの「マハトデルフィンステルニス」ハウプトマンの「ウヰベル」等は所謂道徳的傾向と云ふ臭味を帯ぶる物には非ずと雖も、若し此等の作品が積極的に又は組織的に道徳的意志の挑發を勉むれば、益々讀者に道徳的に實現せんとか又は實現せざらんとする強烈なる衝動を與ふるに至らん。佛蘭西のギョーヨは作中に旁觀する活動生命を貴重なる物とし、作品が賞翫者を鼓舞して、行爲活動をなさしむる力を文藝の本領と説く。然し吾人は此の如き説に與するを得ずと雖も、下の事丈は認容せざるを得ず。即ち道徳的影響

が混淆せる結果、美術的印象が蒙る妨害は、醇の醇なる美的印象を主眼とする人々に對しては、殆んど感ぜられず、假令感ぜらるゝとも、其の妨害は極めて些細なる物なりと。若し道德的要求が冷やかなる教訓的形式に非ざる場合には、又は所謂「傾向」として現れぬ場合には、即作家が狭き淺幕なる量見を交へずして、公平なる客觀的描寫の結果として、自から道德的觀念が讀者の意識に油然而起る場合には、此の如き有利の關係が成立する物なり。先に擧げたるイブセン、トルストイ、ハウプトマンの作は此の例とす。之に反し、道德的要求が未だ定りの説教や、演説調とならば、即詩人が倫理學者の態度を取り、乾燥無味の冷き理屈を讀者に浴せ掛くるならば、假令世を益する物なりとも、趣味索然たらざるを得ず。傾向と云ふ事は常に美を損ふ罪惡にして、然も此の罪惡は健氣にも道德の爲めに盡すと云ふ、殊勝なる心掛によりて贖ふを得ざる物なり。

(ロ) 宗教的影響。讀者に敬虔なる宗教感情を喚起せんとする詩歌、之も道德的詩歌と同様、多くは下らぬ物となるが常なれど、然し、一陽來復して、春風吹そよぐ所、百花自から開くが如く、宗教的情意が自然に湧き出づる詩歌もあり。ノバリ

(ロ) 宗教的影響

(ハ) 戀愛

スやルーテルやパウエルハルト等の作には此の如き有利の性質を備へたる物あり。されど、教會や寺院の歌の大多數は、徒らに趣味索然たる思想感情を興ふるに過ぎず。

(ハ) 戀愛。戀愛を材料とせる作品は非常に多し。古今東西を通じて、測り知る可からざる無数の作品中、十中の八九迄は悉く戀愛を種にすると云ふも過言に非ず。かく無数の戀物語中には又異性間の感情を刺戟し、欲望を興奮させんとする無数の作品あれど、扱如何なる場合には、此の戀愛感情が美的享樂を妨害するか、之を心理的に考究せば、先づ三の場合に遭遇するを見る。

- (ニ) 性欲
- (イ) 作家の態度

(ニ) 性欲。先づ第一に賞翫者の生理状態より異性間の情欲がきざせば、直に美的靜觀は妨害せらる。此の事は多言を費さずして明かなり。

(イ) 作家の態度。文藝家が吾人の意識に異性間の情欲を惹起せしめんと企てたる事を吾人が認めたる時には、假令情欲の念は起らずとも、美的靜觀は破壊せらる。此の如き陋劣なる作品に對すれば、厭惡嫌忌憤怒の感情を得、作品に對しては冷淡なる態度を取り、作者に對しては輕蔑の念を抱き、直に作品を見捨てざる

(c) 印象

を得ざるべし。

(c) 印象。作家が實際靜觀者の心に感覺的性欲を催起せんとする目的を有せずとも、尙美的情緒を妨害するに足る場合あり。即作家が此の如き目的を以つて描寫せるが如くに見ゆる印象を、作品が有する場合なるが此の如き印象が美的靜觀を阻止するに足るは勿論なり。此の印象は賞翫者の側より起る物と、作品の側より起る物との二あれど、賞翫者の側より起る物は暫く措き、作品の側より此の印象を吾人に與ふる物は何かと云ふに、作家の心理状態なり。實に文藝は精神の反映なり。人格の反射なり。若し作家の精神が賤劣なる要素を含まば、必ずその精神が冥々の裡に隱約して、對觀者に此の如き印象を與ふるや必せり。古來日本や支那の畫家は、目の畫を忌み、心の畫を描かんとし、精神の修養を第一義とせるは故ありと謂ふべし。宋人王景賢曰く畫は宜しく靈を持つてすべし、眼を以つてすべからずと。古來より東洋にては、氣韻生動を神品と稱し、筆墨絶倫を妙品とし、形似規矩を得たるを能品と稱す。而して所謂「氣韻生動」の神韵を作品に賦與せんとするには、先づ精神の修養を爲し、高く清き脱俗、超世の氣品を得、高尚卓越の人

九、美的態度の無勞力

格を有せざる可からずとせり。

(九) 美的態度の無勞力。終りに臨んで、美的態度は無意志なると共に、又比較的無勞力なりと云ふ事を述べん。美的態度には、現實の仕事に免れざるが如き、勞力なし。即實際の仕事をなす際に、受くるが如き、嚴肅なる骨折は觀美態度中に存在せず。故に吾人は美的態度は無勞力なりと云ふを得べし。

然し、觀美態度は全く無勞力なるを要すとの主張は極端論たるを免れず。美的享樂は吾人の或精神活動の結果として得る物なるが故に、全く無勞力と云ふを得ず。若し吾人が今迄美的態度に就て考究せる所の物を顧みるに、美的態度に於て、吾人は大に注意を作品に凝集して、思想感情を活動させざる可からず。特に意味深き内容に對する時には、理性は盛に活動す。之に依つて見れば、觀美態度は、決して絶對的無勞力の物に非ず。殊に作品が深遠なる物、高尚なる物、幽玄なる物ならば、此の勞力は益々著しく必要となるは明かなり。故に觀美態度に對し、絶對的無勞力を主張するは正しからず。然し美的態度の勞力は、かの勞働の骨折や、人生の奮闘に於ける困難の排除や、或は利己的又は道德的意志に於ける妨害の征

服等の勞力とは、全く趣を異にす。此等の勞力に比すれば、美的態度は比較的無勞力なり。

此の外、尙美的態度には、比較的無勞力となり得る事情あり。吾人が作品の意味關係を知らんと努力する時に、美術家は、大に吾人の勞力を省かんと勉む。即作家は意味内容を感覺化し、或は作品を分類し、統一し、簡單にして、美的努力の輕減を補助す。故に美術品に對する態度は、大に無勞力となり得る物とす。

此の美的勞力には、自から甚しき程度の差あり。優美なる物は崇美なる物に比して、遙かに觀者の努力を必要とせず。無邪氣なる滑稽はユーモアよりも、遙かに無勞力なり。幽玄なる哲理を含み、深邃なる思想を包む作品の美は、賞翫するに困難を覺ゆ。樂觀的の作は厭世的の物より容易なり。悲惨なる物、恐しき物、頑なる物の觀照は、善なる物、幸福なる物に對して喜ぶよりも難し。シルレルはシェイクスピアより無勞力なり。グリンバルツェルは、ヘッペルより、ブレイターグス、は、イブセンより、ラファエルは、レムブラントより勞力を要せず。

美的態度に於て、無勞力の必要なる事は、若し吾人が多大の勞力を拂ふにも係

一、觀照の際
物質を認めず

らず、到底解し難き作品を觀照せる場合を想像すれば、容易に首肯するを得べし。此の場合には、吾人は不可解の謎に對するが如く、又は不思議の迷宮に入れるが如き感を得、恰も現實の事業や困難より受くると同じ努力奮闘疲勞又は不安苦惱煩悶等が心に起る。此の結果、吾人は實際美術に對してをるにも係らず、現實の事物にたづさわるが如くに感ぜざるを得ず。故に諸君が自己の經驗によつて知れるが如くに、過度の勞力は美的情緒を滅ぼす物と云はざる可からず。

其二 超物質性

(一) 觀照の際物質を認めず。文學や音樂には、所謂物質はなし、只形象美術のみが物質によりて成立す。故に繪畫彫刻建築等の如き視覺に訴ふる美術を觀照する時には、物質を見ざるを得ず。此の結果多少物質の印象が看者に影響す。然し普通美的態度に於ては、殆んど物質より何等の印象を受けず。吾人は美的觀照の際には、形式その物を見るに過ぎず。換言すれば、全く物質を等閑視して、純粹なる表面、線、色等を見るのみ。此所が美的の見方と普通の見方との相違なり。普通の見方にては、物質に重きをおけど、美的の見方にては、形式に重きを置き、只純粹なる形

二、物質より離れたる形式

式のみを見る。
(二) 物質より離れたる形式。觀照の際には、唯形式をのみ見ると云ふもの、茲に云ふ純形式とは、内容を抽捨せる形式にはあらず。形式と内容との調和と云ふ章に於て述べたるが如く、眞の形式は内容を包含するは勿論なり。茲に云ふ純粹の形式とは、單に物質より脱離せる物、絶縁せる物、換言すれば、物質を度外視して、物質より何等の煩累を受けぬ眞の形式その物を言ふ。

物質より脱離せる形式と云ふ意味を明かにせんには、美以外の見方が、物質に關係して居る有様を考ふるを可とす。布を買ふ物は布の表面をのみ見ず。外觀の善惡よりも、質の善惡を見る。土地の豊饒如何を判断せんとする人は、土地を見て、地味地質を觀破せんとす。肉を買ひ野菜を求めんとするには、物を見、質を見、そのよしあしを穿鑿す。物に對する普通の態度は、總て斯の如く、外觀に依り内部の實質を窺はんとする物なり。然るに、美的觀照にては、形式を見る耳にて、物質の如何を見ず。

三、意識は完全に物質より分離するにあらず

(三) 意識は完全に物質より分離するにあらず。かく云へばとて、吾人の意識は

四、形象美術に於ける超物質性

全く物質より分離するを得ず。元來、物質なくんば空なり。無なり。虚なり。形式なる物は存在するを得ず。形式は物質によりて支へられ、物質に依りて現る。ゆゑに、吾人は全く物質と絶縁するを得ず。物質を認めずして、形式をのみ見んとするは不可能なり。吾人の注意の幾分かは物質に向けらる。その結果、繪畫を見れば、必ず油繪とか、墨繪とか、水彩畫とか云ふ考が起り、彫刻に對しては、木に彫つた物石に刻んだ物と云ふ考が起る。故に觀照者の心より、物質の觀念が全く消滅する物に非ず。故に形象美術には形式はあれども、物質はなしと云ふもの、此の無物質性と云ふ事は、無意志性と同様に、絶對的の物には非ず。比較的の物と知るべし。

(四) 形象美術に於ける超物質性。形象美術に於ては、超物質性は二の方面に現る。現實の事物に對しては、只その物が有する物質を等閑視して、形式をのみ觀照すれば、美的態度となる。建築に對しても同様に、建築に使用せられたる材料即石材材木等の表象を念頭より去るを以つて足れりとす。即此等の物の美的觀照に於ける超物質性は、只材料となれる物質を等閑視すと云ふ、一方面をのみ有するに過ぎず。然るに、形象美術即繪畫彫刻に於ては、超物質性と云ふ事が二方面に現

はる。一、書き又は刻むに費用せる物質、例へば、繪具大理石等の物質より分離する事、二、作品の内容として採用せる物の物質より分離する事、即之なり。

大理石に彫まれたるギリナスの像を見るに、石屋又は土方の目を持つてし、此の像を臺に据ゑ付けるには骨が折れる目方は大方三百貫もあらうか云々の考が起らば、その瞬間は、物質的邪道に迷ひ込める物なり。此の外ヴィナスの像に對して、解剖學者の考や、情欲に襲はれたる者の眼を持つて觀照せば、美的態度には非ず。物質的見方なり。前者は手段として費用せる物質の煩累より、後者は内容として採用せる物質の拘束より、脱離せざる者にして、共に物質的觀照をなせる物と云ふべし。

(五) 蠟細工の人形、パノラマ。超物質性の要求を無視せる著しき例は、蠟細工等の下物美術とす。此等の物は物質的見方を吾人に強ゆる物にして、吾人に美的觀を許さず。

堂々たる文科大學に教鞭を取らるゝ御方なり。或時ベルリンのとある勸工場へ行きしに、繪葉書店あり。その店の傍には、婀娜たる小女盛粧を凝して立てり。思

五、蠟細工の人形、パノラマ

ふに、芳齒將に十八九ばかりにもならんか。一瞥の下に、有情の男子を惱殺するに足る目もとには無限の媚をたゞへて愛らしい口のあたりには、無量の情を含む。某はやがて博士にならるゝ御方なりと、雖も、ちゝむさき御年寄と早合點する事勿れ。未だ青春の血内に燃ゆる、有爲の一秀才にして、且、獨身者の若き文學士なり。その某文學士はときめく心をあさへしや否やは知らねど、先づ一揖して、數葉の繪葉書を求めんと、流暢なる獨乙語をあやつり、その代價を尋ねたるに、怪むべし。乙女は口をつぐみて答へず。學士は言語學に精通す。況んや、獨乙語は極めて流暢にして、且、正確なり。故に學士の言葉が通ぜざるの理なし。學士は怪みつゝ、も更に尋ねつ。されど小女は黙して何の答もなさばこそ。學士の心情糸の如くに亂れざるを得ず。されどよく見れば、生ける乙女と見しは、僻目にて實は蠟細工の人形なりしと。

此の人形は明かに人を欺き、現實の小女と云ふ考を喚起させんと、企を以つて、摸造せられたる物なり。かく極力生ける人間の外貌を摸倣するに勉めて、人を欺かんとするさもしき計畫の爲に、觀者は物質を想起せざるを得ず。詳しく云へ

ば、此の如き人形は看者をして、生きてをる人間と思はしむ。然るに、又直に人形は蠟なりと氣付かしむ。故に吾人は此の如き作品に對しては、生きてをる人間の物質と、蠟と云ふ物質とに著しく注意を向けざるを得ざる物とす。即知る此の如き手段は決して作品に超物質性を賦與する所以に非ざるを、極端なる摸擬がいやに精巧ならば益々、作者は極力實物に似せんと勉めたりしが、兩者の間には、大なる物質上の差別ありとの考が對觀者の心に惹起せらる。即此の種の人形は如何に巧妙に摸倣せらるゝとも、遂に死物に過ぎずとの思想を看者に強ゆる物なり。故に此の如き人形は唯死物なり、殘骸なり、と云ふ性質を得るに過ぎず。此の外實物と繪とを狡猾に並べて、人目を盡惑せんとするパノラマや、彩色を施し又は衣服を着せて、實物に強いて似せんとする彫刻、塑像等も、之と同じく、恰もアダムのイブが智慧の木の實を食して、遂に下界の人と爲れるが如く、徒らに物質性を得て、下界の物と墮落せざるを得ず。

六、文學と音樂とに於ける超物質性

(六)文學と音樂とに於ける超物質性。文學は讀者の空想に、音樂は聽者の聽覺に、訴ふる物なるが故に、文學と音樂とは、視覺に訴ふる形象美術の如くに、甚しき

物質の煩累を受けず。詩歌音樂にて、費用する材料即表象と音響とは、色や表面に比して、遙かに物質より隔離す。此の結果、文學は手段として費用せらるゝ材料より物質的煩累を受けず。音樂も同様なるが、全く受けぬには非ず。何となれば、聲樂に於て歌ふ人の容貌が目につき、奏樂に於ては彈奏者の風采が目につく事往々あればなり。然し内容として採用せられたる對象は音樂にはなし。故に對象よりは、物質性と云ふ羈絆を蒙らず。文學は之に反し、描寫せられたる佳人等より、物質的煩累を受くる事多し。若し火災の描寫に對し自己が火災にかゝれる當時を想起せば、その瞬間に詩的靜觀は消滅す。要するに、詩歌音樂に於ては、物質的妨害は比較的少しと雖も、尙多少の物質性を伴ふ恐あり。然し洵治せられたる賞翫者の美的態度中には、全く此の物質性は現れず。

されど、反對論者は云はん。詩人は時として、物體の物質や成分を記載し、又は嗅覺や觸覺や又は味覺に關する句味、觸り工合のよしあし等を描寫する事あるが、此等の記載は物質を讀者の意識に喚起する物なり。故に物質よりかけ離ると云ふ要求と矛盾するには非ざるかと。

七、下等感覺に美的價値の乏しき所以

然し此の際讀者の想像に浮び來る物は實物に非ず。物の表象なり。故に實物の如くに、此の表象は吾人を襲ひ、直接に物質的感覺を興ふる物に非ず。此の意味に於て、詩歌文學も物質性を脱すと云ふを得べし。

(七) 下等感覺に美的價値の乏しき所以。此の立場より下等感覺が美的價値に乏しき所以を明かにするを得べし。味覺觸覺又は嗅覺は視覺聽覺に比して、物質と密接なる關係を有す。視覺聽覺に於ては、物質の觀念をして、意識の後景に退かしむるに容易なれど、句味、寒溫、剛柔等の感覺は物體に固着し執着する物なるが故に、物質との縁を離るゝに極めて困難なり。故に超物質性と云ふ要求に應じ難し。此の結果美的價値乏し。

八、超物質性の成立する條件

(八) 超物質性の成立する條件。超物質性の成立する條件は、無意志性の成立する條件と同様なり。觀者は形式その物に注意を集めて、物質に注意を奪はれぬと云ふ心掛を必要とす。此の場合に、意味深く内容に富む形式は、對觀者の心を奪ひ、精神を物質界以上に高め、恍惚として美の假象界を逍遙せしむる力を有す。又之も無意志性の所にて述べし如く、莊嚴崇高優麗嫺雅等の形式は物質性より脱離

九、無意志性と超物質性の關係

するを容易ならしむ。みすぼらしき、不快なる、醜き、粗野等の形式即勞働者農夫乞食等を對象とする物に對しては、美的陶冶を経ざる普通の看者は、物質性より脱離するに困難なり。その結果、此等の形式中に含まるる美を認め得ざる物とす。

賞翫者の側に就て云へば、天稟の才と訓練の力との如何によりて、物質界を超越し得ると得ぬとの差起る。人に依りては、形式に對して、物質的聯想を拒むに、甚しき困難を感ずる人あり。然し天才と練習とに依りて、周邊の現實界より超越する能力に富む人もあり。

(九) 無意志性と超物質性の關係。無意志性と超物質性とは、美的感情の特性にして、共に美的感情より、現實性を抽出するに與かる二要素なり。従つて此の二者は密接なる關係を有す。即此の二者は相互に助け合ふて、美的靜觀を賞翫者に與ふる物なり。吾人は此の關係を三に區別するを得。

(イ) 其の一は美的態度に於て先づ超物質性起り、之が無意志性の成立を助くる場合とす。對觀者が風景又は繪畫等の前に立てる時、莊嚴の美とか又は優麗の美とか又は其の他の理由に依りて、無意識的に看者の眼が、形式の捕ふる所となる

事も、又は看者が純粹の形式を見んとする渴望と物質の煩累を受けざる觀照を得んとする熱望とに依り、意識的に物質の方面を等閑視する事もあり、此の場合には、意識的に又は無意識的に、美の對象に關して超物質的の觀察が成立するに至る。かく一意専心形式の觀照に沈湎する結果、看者は容易く現實の我を沈黙せしめ、自我を忘却し、無我の郷に入り、没我の域に移り、飄乎として現實の物質界を超越し、茫然として自失の淨境を翱翔し、悠悠として入神の樂園を逍遙するを得。之を美的靜觀の三昧と云ふ。此の如き靜觀の域に入れる瞬間には、下界的の欲望や意志は漸滅せらるゝは當然なり。此の結果無意志性の成立を援助する事となる。

(ロ) 其の二は觀美態度に於て、無意志性が先づ起つて、超物質性を助くる場合なり。吾人が意識的に美的享樂をなさんとの目的を以つて、對觀する時、又は無意識に偉大なる美的歡興によりて、全意識が支配せらるゝ時には、對觀者は現實の自我より解脱するを得れど、又吾人は現に美術の假象界に對すとの自覺も亦現世的の自我を消滅せしむる力を有す。兎に角、無意志的靜觀と云ふ態度が先づ起る。

とせんに、此の意志無き靜觀の態度中には、超物質的觀照を助長する事情が伏在するを見る。何となれば、無意志性の成立條件中に述べしが如く、意志無き感情状態の起るには、主觀をして形式その物の觀照に耽らしむるを要す。故に既に無意志性が成立せる時には、吾人の注意は形式その物のみ、凝集せられたるなり。然るに形式の觀照に沈湎すると云ふ事は、偶々超物質性の成立を助くる條件なり。故に無意志性は超物質性を助長する事となる。

(ハ) 其の三は此の二方面が同時に相提携して、美的態度中に現るゝ場合を云ふ。此の時には、二の溪流相合して二階の流となる如く、一は他を援助し、他は一を扶接して、美的感情に超世間的の特性を與ふ。

以上述べし三の場合には理論上の事にて、實際には此の如き形をなして現れざるべし。多くの場合には、以上三者の混同せる形を取るか、又は三者中の或物に近き形を取つて現るゝ物とす。

其の三 没認識性

(一) 没認識性の一般の意義。實際感情の抽出に、貢獻する所の物には、無意志性

の一般の意義

と超物質性との外に、尙第三の没認識性と云ふ物あり。十八世紀頃の人々は、道德上の觀念が、美的態度と吾人の思惟するよりもより多く調和し得る物と考へしと同様に、吾人が主張せんと欲する程、嚴格に此の認識活動を美的靜觀の埒外に排斥せざりき。即彼等は、哲學上の思想併びに道德上の觀念が、吾人の心情に美的印象を與へ得る物と、一般に思惟せり。然し吾人の思ふ所は此の反對なり。

吾人が文藝の賞翫に際して、認識上の努力を爲し又は爲さざるを得ざるやう強いらるゝならば、美的靜觀は忽ちに消滅に歸す。自己の知識を廣めんとか、事物の原因や、結果や、又は色々の關係を知らんとか、又は人生や世界の問題を明かにせんとする努力は、行爲に現さんとする意志と同じく、直接に現實の事物に關係する物なり。故に此の如き智識欲より起る實際の緊張感情は、美的態度に固有なる靜觀と相反す。

(二) 美が對觀者を教化する價值。かく云へばとて、美が賞翫者の智識を弘め、見識を高むる利益を否定せんとする物には非ず。美神の帝座に咫尺して、富贍なる智識と、卓越せる見識と、を求めずして得るは寧ろ願はしき事と云はざる可から

二、美が對觀者を教化する價值

ず。ゲーテやシルレンの詩を賞翫して、人情の機微に觸れ、人性の秘鑰を穿ち、世界の真相を知り、人生の實相を窺ひ得ば、又希臘羅馬の詩を翫味して、古代の燦然たる文化の花を知るを得ば、そは吾人の偉なる利益なり。斯く人間その物の知識を知らしむるは、文藝が吾人に與ふる利益の一なれど、吾人は此の利益を二の方法によりて獲得す。一は間接方法、他は直接方法なり。間接とは、觀美態度が終れる後に獲得する物を云ふ。此の場合には、美の享樂は妨害せられずして、人生に關する貴重なる知識を獲得し得べし。直接とは、賞翫中に認識作用が起るものを云ふ。此の場合は、更に二に別る。

(イ) 美的享樂が主として、意識の中央に現はれ、認識作用は、副として意識の片隅に弱く幽に働く場合。此の場合には、美的享樂は大なる妨害を受けず。然し、

(ロ) 此の認識作用が意識内に跋扈跳梁する場合。此の場合には、美感は全く打破せられ、美術は本來の目的を失ひ、他の目的の爲に方便として使役せらるるに至る。學校にて、詩歌文學を講ずるの目的は優秀嫺雅なる趣味の涵養には非ず。却つて、人生の知識、道德の陶冶、言語文法の知識等を授くるが重要なる目的なるが如

三、教訓的詩

し。然し美學は文藝を此の如き目的の手段方便として、使役するを禁止するの權利なし。美學は只次のやうに云ひ得るに過ぎず。此の如き場合には、純粹なる美的靜觀は滅亡す。此の美的靜觀は人の性情を完美ならしめ、人格の修養には、缺く可からざる物なり。従つて美的靜觀は吾人に對して、偉大なる價值を有す云々と。

(三) 教訓的詩歌。認識作用は自然美に對するよりも、文藝に對する場合に多く起る。文藝中、特に詩歌文學は、讀者を誘惑して知識欲を引起さしむる傾最も強し。而して、文學中教訓的詩歌は殊に此の知識欲を喚起して、美的感情を毀損する恐ある物とす。然し繪畫彫刻等も亦教訓的の物となる事あり。

詩が教訓的の物となる場合は、詩人が道德家又は宗教家の態度を取り、道德や宗教の問題を解釋し、又は訓戒的意見を含むる時なり。ゲーテの「ダスゲオットリッヘ」「インフィゲニー」「タッソー」等は此の傾向を有す。若し吾人が此等の詩を讀み、ゲーテの人生觀や世界觀を知り、著しく自己の思想が豊富にせられたるを感ぜば、此等の詩は甚しく假象性を失へる物なり。

然し吾人は、決して此等の教訓的詩歌の價值を否定せんとする者には非ずと

四、教訓詩に善惡の二あり

雖も、此等の詩は純粹なる文藝の範圍内にのみ屬すべき物に非ずと云はざる可からず。即教訓詩は、文藝と教育と結合せる物なり。

(四) 教訓詩に善惡の二あり。此の教訓的詩歌の結合は、如何なる程度迄、是認せらるべきかの問題は、特殊なる詩學の研究すべき範圍に屬す。故に吾人は單に美學上より見て、此の如き詩に是認し得る物と、得ざる物との二ある事を述ぶるに留めん。

美學上より否定すべき物とは如何なる物か。若しも訓戒的思想が美的形式を取らぬ時、又は美的形式を取るとも、尙不完全なる場合には、その詩は詩としての價值乏し。即思想が觀照と感情とを伴はずして、唯外的に韻や律やを有する詩の形へ押込められたる物に過ぎざる時には、徒らに、吾人の認識作用を引き起すのみにて、趣味索然たる物とならざるをえず。之に反し、詩として是認し得る物は、如何なる物かと云ふに、抽象的の説明、冷かなる議論が全く跡を絶つて、觀照せらるゝ様に、思想が形を取り、更に感情を喚起する所の物たらざる可からず。

(五) 訓戒詩と冥想詩。教訓詩と冥想詩とは、同一視するを得ず。冥想詩とは、幽玄

五、訓戒詩と冥想詩

深遠なる哲學的思想が微妙なる情緒激越なる感情、又は空想信仰等の形を取つて歌はるる物にして、全く教育とか訓戒とか云ふ要素を含まざる物を云ふ。シルレルの鐘の歌、逍遙吟、理想と人生、幸福、神靈、人生の詩等は立派なる冥想詩なり。ゲーテの有名なる「ファウスト」や「キンスドレルリード」や「ヴェルトゼーレン」や「メタモールフォーゼ」や「アインウントアルルス」等は幽玄なる哲學的思想を含蓄すと雖も、猶此等の詩は吾人をして單に科學的又は哲學的研究態度を取らしめんとする物には非ず。又バムレトの獨白中に、沙翁は深遠なる哲學的思想を述べ、されど茲に思想は單に思想として現れず、無限の悲哀、無量の苦痛を伴ふ感情となつて現る。恰も、思想即感情、感情即思想にして、例ふれば、思想その物が嘆じ、悶え、悩み、苦しむが如く、その思想は聞くを得、見るを得、感ずるを得べく、思想は恰も感情の言語にして、動作に現れ、たゞちに人の肺腑を衝き、看者をして共に泣き、共に苦み、共に藻掻き、共に惱ましむる方となり、命となつて現る。換言すれば、思想は感情化せられて、血を得、肉を得、形跡を取り、動作に現れ、看客をして決して冷かなる理窟一天張の認識をなさしむる物に非ず。即沒認識と云ふ要求に一致す。

六、沒認識性の
に反する種々の
疵瑕

(六) 沒認識性に反する種々の疵瑕。然し此の如き教訓詩、冥想詩は往々沒認識性の要求を犯かして、美的靜觀中に認識上の努力を喚起する事あり。若し此等の詩が美的形式を取らずして、晦澁嶮難の要素を含まば、必ず讀者をして徒らに認識沙汰に忙殺せしめん。ファウスト第二巻は詩聖ゲーテの靈筆を以つて、尙此の弊を免れず、まして小詩人の小詩才にて此の難關を打破せんとするは、恐らく絶望と云はざる可からず。此の事は、獨り詩人にのみ限れるに非ず、畫家にては、同様なり。若しも遠き昔の錯雜せる歴史上の事件を描寫する時には、看客をして屢々美的享樂の代りに、知識上の努力を喚起せしむる事あり。此の如き場合に、文藝家は美的享樂が理解せんとする努力、認識せんとする努力によりて、毀損せらるゝ事に對して、全く責任なしと云ふ可からず。何となれば、文藝家の技倆、巧拙の如何によりて、美的靜觀が認識の爲に妨害せらるゝとせられざるとの差起ればなり。然し此の如き妨害は再三反覆して、熟讀玩味せば、遂には全く排除せらるゝ物なるが故に、若しもその作品が先に擧げたるが如き卓越せる名什佳篇ならば、讀者に熟讀玩味を要求するとも、決して不當には非ず。

之に反し、若しも讀者が詩歌文學の美を享樂する代りに、描寫せられたる物を知らんと拘泥せば、その罪は全く賞玩者の未熟に坐す。繪畫彫刻に對する場合も之と同じ。美術館を訪問する多數の者の中には、畫中の山や川や寺や町が何處にあるか、風俗畫は何の事件を現すものか等を知つてその知識欲の満足より、一種の快感を得るに止まる徒あり。然し又或場合には、假令美的享樂が了解の勞力によりて妨害せらるゝとも、作家の罪にも觀者の罪にも非ざる事あり。即時と所とが異なる爲め、讀者をして理解穿鑿認識研究に多大の勞力を徒費せしむる場合なしとす。

七、緊張感情

(七)緊張感情。先に述べしが如く好奇心も美的靜觀を妨害す。此の好奇心又は緊張感情は、次に來る事件の發展如何を知らんとあせらしむる物にして、沒認識性に反對する物なり。此の沒認識性の違犯は詩歌文學戲曲等に於て最も著し。然し吾人は美的享樂中に起る一切の緊張又は期待の感情を非とする者には非ず。詩の耽讀に際し、注意を美的享樂に凝集すると同時に、尙注意の一部を前方に向けて、期待し希望し又は憂懼する事あるは自然の事にして咎むべきに非ず。何と

八、文藝に精通せる人士に起り易き弊

なれば、此の種の緊張感情は全く美的靜觀と調和し得る物なればなり。之に反して、注意を美的享樂に向くるを妨害する好奇心は美的靜觀と相容れざる物とす。普通小説愛讀者の十中の八九は、此の食欲なる好奇心の奴隸となり、一瀉千里の速力を以つて、美點長所を翫味せず、全部を鵜呑にせんとする徒輩なり。此等の讀者は一旦好奇心が満足せられ、緊張感情が弛緩するや、その小説を抛擲して顧みざるを常とす。

(八)文藝に精通せる人士に起り易き弊。美的靜觀に於ける沒認識性の違犯は文藝精通者又は精通者と自任する人々に依りて、屢々演ぜらる。此の事も、先に述べしが如く、此等の人々の美的享樂の態度は、巧の吟味に過ぎぬ事が往々あり。此の種の人々は作家の書振りを認識し、技術の善惡に就て説明を加へ、理由を附して、それより一種の快を得るに過ぎぬ事あり。此の外、所謂批評家の態度を取つて、作品を賞玩せず、檢閲するが如き場合には、美の眼を以つて美の世界に逍遙する態度に非ざるは勿論なり。

(九)沒概念性。沒認識性に最も類似する沒概念性と云ふ要求は、形式と内容と

九、沒概念性

十、概念は人
を没して感情中
に没せしめ

の一致と云ふ第一規範より自から起る。既に第一規範の場合に述べしが如く、観美態度が観照と感情との統一を必須条件とせば、表象又は思想が概念的の物たるを容さず。概念は元來全く抽象的の物なるが故に、概念が形式を取るは不可能なり。然るに表象又は思想が美の内容となるには、第一に感情と結合し、第二に感情と結合せる物が更に形式を取り、感覺的の観照に堪へらる物たらざる可からず。此の二の關係に於て、概念は美的表象と異なる。

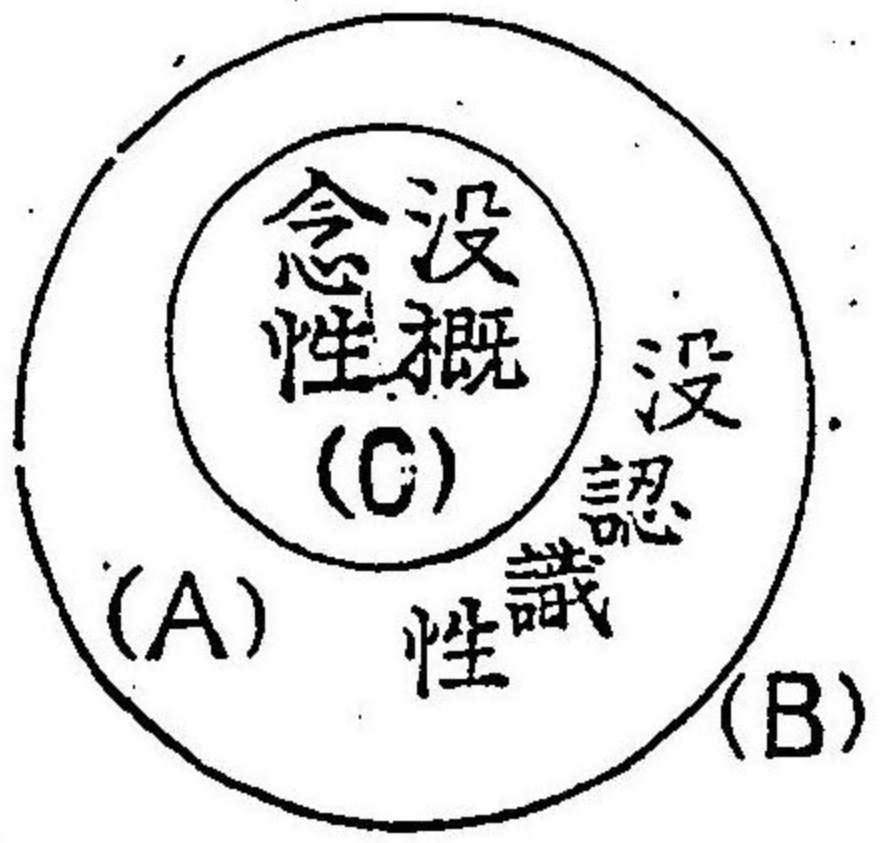
(十) 概念は人をして感情中に没了せしめず。第一に概念は冷かなる論理的の物にして、感情を伴はざるが故に、恍として人を感情中に没入せしむるを得ず。表象が概念的になればなる程、吾人に感情を興へ得ざる事となる。享樂の三昧に没入すると云ふ事は、美的態度の特徴なるが故に、表象は出来る丈、感情に染められ感情に包まれざる可からず。

第二に概念は抽象的の物にて形なし。故に吾人に観照を許さず。此の結果、概念は感情と観照との融合一致を許さず。概念が具體的の物に非ずと云ふ特徴は一般の事に應用せられ得る長所を概念に賦與せる物にして、科學は之が爲めに驚

十一、沒概念
性と沒認識性

く可き發達を遂ぐるを得たり。されど、概念は形式と内容との一致と云ふ規範に牴觸す。故に美の内容たるを得ず。

(十一) 沒概念性と沒認識性。色々の密接なる類似性あるにも係らず沒概念性と沒認識性とは、同一視するを得ず。沒認識性は認識せんとする欲望意志を觀美態度より排斥せんとするものなり。然るに、沒概念性は思想の概念的性質を非とするものなり。故に二者の適用範圍異なる。沒概念性は沒認識性より範圍狭し、之が爲めに、沒概念性の範圍外にある詩にして、尙沒認識性の範圍内にある事あり。換言すれば、前者に反對するにも係らず、後者に牴觸せぬ詩あり。之に反し、沒概念性の範圍内にある詩は悉く亦沒認識性の範圍内にあり。又沒認識性に違犯する詩は亦同様に沒概念性に反對す。今(A)と云ふ作あり。その内容たる思想が沒概念性に牴觸する。此の場合に、思想が分り易き物ならば、認識作用起らず。故に(A)は沒認識性と矛盾せず。又假令難解なりとも、讀者がその思想を明かにせんとせずして、讀過し終れば、同様に沒認識性と云ふ觀美態度が成立す。之に反し、その思想を明瞭に理解せんとせば、又は理解するを要する詩ならば、沒認識性と牴觸す。此



の如き詩を(B)とすれば(B)は没概念と没認識との二要求を容れぬ物なり。然るに(C)と云ふ詩あり。その思想は十分に具象化せられたる物、即没概念性と一致する詩ならば、讀者は認識作用を働かす必要なし。故に没概念性の範圍内にある詩は同時に没認識性の範圍内にあり。此の二特性の要求の範圍は大體上の圖の如し。

哲學者又は小詩人が、冥想詩教訓詩又は意味深き内容を有する詩を作らんとせば、大概(A)又は(B)の如き物となる。(C)の詩を作るには、偉大なる詩才を要す。

第十一節 假象性

(一) 美の假象性。以上は美の特性を心理的に説明せる物なるが、次に客觀的に此の第三の根本的規範を説明せん。上述の美的靜觀の態度に於ける無意志性と超物質性と没認識性とは、客觀の對象に於ては、如何なる形を取るか、如何に作品に現るゝかと云ふに、美の對象は吾人に全く實物として現れず、現實の對象に比

一、美の假象性

二、美術に固有の假象性

三、一般の美に通ずる假象性

すれば、只假象として現ると云ふに歸着す。

(二) 美術に固有の假象性。美術が假象なりと云はるゝ所以は、文藝は唯現實界の事物を描寫せる物に過ぎずとの事實に存す。美術は只表面上又は外見上、實物らしく現實の物象を描寫せる物なり。大理石、青銅、材木、繪具、三味線の音、役者の身軀等は皆假りの物質假りの身軀なり。美術はかく假りの物に依りて、實際の物らしく現るゝのみ。故に此の意味に於て、美術は假りの現れ、即假象なり。此の意味の假象は全く美術のみに固有の性質とす。

(三) 一般の美に通ずる假象性。美術は假の物が實の物らしく見ゆる物に過ぎざるは火を見るよりも明かなる事實なり。自然も之と同じく美の對象となる時には、實際の物として吾人に現れず、自然は勿論實際の物なり。然し吾人が一旦觀美の眼を以つて、自然に對する時には、自然は決して實際の物として吾人に現れず。故に藝術と自然とを問はず、美の對象は悉く實際の物として吾人に現れず。此の點より見れば、美の對象は假象なり。然し美の對象は實際に、美的感情と云ふ感情を吾人の心に喚起する物なるが故に、美的對象は全く虚に非ず。無に非ず、實際

の存在物なり。此の點より見れば、美の對象は一種の實在性ケルツヒカイトを持つと云はざるを得ず。即美の對象は美的實在性と云ふ、一種の實在性を有すと云ふを妥當なりとす。

然し此の美的實在は吾人を壓迫する重苦しき眞の實在とは異なる。即ち吾人を驅つて意志を動かし、決意と行爲とをなさしむる實在、又は吾人の運命吾人の不幸に直接關係を有する現實には非ず。美的實在は此の如き眞の實在に比較すれば、假象的實在と云ふべきなり。此の事は自然美に對しても同じ。吾人が庭園、森林、山川等を審美眼にて對觀する場合には、吾人は此等の物を現實の物として見ず。詳しく云へば所有せんとか獲得せんとか云ふ念を以て、吾人を刺戟し又は苦め又は満足さす所の實物として觀ぜず。只假象的の物形象的の事として認むるに過ぎず。之と同じく、意中の佳人を美の眼にて見得る人は、その瞬間に於ては、佳人が生ける存在物なりとの考を去り、繪に畫かれたる人又は夢に現れたる像なるが如く、只美しき影として見、只愛らしき幻として、認むるのみ。

就中美の對象が假象なる事は美的靜觀の超物質性に依りて、更に明かにせら

四、幻影

る。殊に眼に訴ふる美術に於て然りとす。前述の如く主觀的に物質を超越すとは之を客觀的に云へば、物質が形式の爲めに壓倒せらるゝと云ふ事に外ならず。即物質が純粹の表面として現ると云ふことなり。此の意味に於て、美は物質を超越せる非物質の純形式なり。此の純形式、即美の世界は物質的の現實界と比較せば、全く假象界なり。此の假象界には全く重く堅苦しき現實性なし。純粹の表面無物質の形式又は實際の生命を含まざる形此等の物は吾人を圍繞する現實世界に求む可からず。然し現實性を缺けるにも係らず、美の世界は吾人に實際の物らしく認められ感ぜらる。故に美は假象的實在、實在的假象と云はざるを得ず。此の意味に於て、吾人は一般に美は假象なりと云ふを得べし。美術には此の一般の假象性に、更に前述の美術固有の假象性が附加せらる。

(四) 幻影　かく美は假の物が現實の物らしく見ゆるに過ぎざるが故に、美は幻影なり。假象なり。美術に於ても、自然に於ても、美の對象は著しく實在性を抽出せられたる假象に過ぎずと雖も、尙生々と生命ある實在として現るるがゆゑに、美は幻影なりと云ふを得。あらゆる美は此の幻影中に存在し、幻影の中に活動する

物なり。此の幻影又は假象と云ふ世界は不思議の靈界にして、此の靈界の天地には、春の霞か、はた花の香か、彩霞模糊として四方をとざし、紫雲霞靨として空になびき、一切の有象無象を包みて其の現實性を彷彿裡に隱蔽す。その結果、森羅萬象は燦爛として悉く美化せられ、淨化せられ、靈化せられ、醜き現世的の性質は依稀としてその面影を留めず。此の如き靈妙不可思議なる脱俗超世の天地を、文藝の靜觀者は飛行自在なる想像の羽翼をかりて、翔翔する物なり。

五、歴史

(五) 歴史。此の假象論は特に獨逸の哲學的美學者によりて、盛に論ぜられたり。此等の哲學的美學者中の、白眉なる者をハルトマンとす。氏は美的假象を重大なる美の特性とし、之を美學の出發點にして、且中心點なりとせり。氏の偉大なる組織と壯麗なる系統とを有する美學は、心理的研究極めて少なく、主として純理哲學上の見地より論ぜるが爲めに、詰屈贅牙、晦澁嶮難、容易に初學者の近づくを許さざる弊はありとも、兎に角、氏の美學が卓越せる効果を收め得たる所以の一は、此の假象と云ふ根據の上に立ち、嚴正にして深遠なる思索をなせるにあり。フィッシャーの美學に於ても同じく、假象が氏の美學の根本的概念をなす。シッレルも亦

六、遊戯としての美

此の説を取れり。氏は有名なる「美的教育に關する手紙」に於て、假象に就き幽玄なる哲學的解釋を述べ、此の外シッレル、ゲル、キルヘルム、フォンホルト等も同様なり。キルヒマンは形象と云ふ語を用ふれど、假象とその意味同じ。

(六) 遊戯としての美。次に遊戯と云ふ概念を美に適用する説あり。先づ、第一シッレルが美的態度の本質は遊戯なりと唱破せる事は、普く人の知る所なり。人は遊んでをる時にのみ全き人なりと云ふ氏の言葉は、人口に膾炙す。ゲーテも眞の美と完全なる文藝とは眞面目と遊戯とを結合せる物なりと云へり。スペンサー、グロース、ラング等の諸氏も同様に遊戯と云ふ概念を以つて美的靜觀の態度を説明せんとす。

吾人が先に述べたる美的態度の研究を十分によく了解し得たる者は、一方に於て、遊戯と觀美態度との類似を認むると共に、他方に於て、此の二の態度には大なる相違あるを知り得べし。遊戯に於ては、吾人は眞面目なる態度を取らず。勿論遊戯中には、遊戯以外に身軀の強壯、賭事ならば、金儲等の目的ありと雖も、眞の遊戯には、此の如き目的概念なし。遊の醇なる物は、遊戯以外の目的とは全く離れて

七、遊戯と觀
美態度との相
違

只遊ぶ物とす。此の如き眞の遊戯に耽る人は、相手の者を自己保存と關係無き物として遊ぶ。即遊戯には遊戯以外の目的なし。故に意志を刺戟せず。若し勝負事に負けじとて、相手に對し實際に怒り又は悲まば、又は何等かの欲望を惹起し或は情欲を催起せば、その刹那に於て、遊戯以外に逸出せる者なり。茲が美的態度と遊戯との類似點とす。

(七)遊戯と觀美態度との相違。然し遊戯に於ては、美的靜觀に於けるが如くに、著しく實際感情が排除せられず、遊戯に於ては、超物質性なし。遊戯の相手となる物又は人は物質的の物現實的の人なり。美術に於ては、物質は表面に凌駕せられ形式に壓倒せられて、對觀者の意識に上らざれど、遊戯には、此の如き性質缺乏す。球、繩、さい、碁盤、碁石、人形、此等の物は決して純粹の形式として認められず。故に遊戯は實在性が抽象せられて假象となる事に於て、遂かに美術に及ばず。即遊戯の非實在性は美術に比して、極めて不完全なり。

此の外、遊戯には、美的靜觀の如くに、強烈なる感情中に全意識を没入せしむると云ふ事も又は形式と内容との一致と云ふ事も又は意味ある内容もなし。此等

八、美的假象
感情

の根本的相違あるが爲めに、遊戯と觀美態度とは、決して同一視すべき物に非ず。故に美術と遊戯とを同一視せんとするは、甚しき誤解なり。遊戯説を採用する者は、觀美態度と遊戯との間に存する、劃然たる區別を無視する者なり。特に此の説は意義ある内容と云ふ要求と、抵觸するのみならず、形式と内容との一致と云ふ規範、及び後に述べんとする第四要求、即複雑なる要素の統一と云ふ法則と矛盾す。然し觀美態度と遊戯との間には、本來の類似點あるが故に、遊戯と云ふ概念を美術に適用せる説は、美の一面を説明するに貢献せるは勿論とす。此の外、遊戯説は特殊の美例へば、快活なる滑稽、輕妙なるユーモア等を説明するには極めて適切なり。

(八)美的假象感情。吾人は美的感情をハルトマンやラング等の云ふが如く、假象感情と云ふを得何となれば、美感は假象より受くる感情にして、實感より實在性を抽出せる物なればなり。此の假象感情は疑もなく、自然物に對するよりも、美術に對する時に、最も多く現る。是れ美術に對する場合には、一般に通ずる美の假象性より感情が影響を蒙るのみならず、此の外、特に美術に固有なる假象性より

九、假象的擬人

も、強き影響を受くるを以つてなり。

(九) 假象的擬人。吾人が人類以下の生物、又は無生物を對觀する時には、微妙なる象徴的氣分を感受するを常とす。元來、此の氣分は對象物が有する感情には非ず。全く吾人が吾人の氣分を恰も對象物が有するが如くに、客觀化せる物に外ならず。即ち吾人は自然の對象物に、精神や感情を與へて、自然が悲み、喜び、憐れ、憂ひ、泣くと見るに過ぎず。換言すれば、吾人が自然物を擬人せるなり。開眼せるなり。假りに魂入れをせるなり。此の意味に於て、吾人は自然物に對して、假象的擬人をなすと云ふを得。實際の又は畫中の山川草木は本來對觀者の心に屬する氣分を假りに受けたる物なるにも係らず、その山川草木は實際に氣分を宿してをるかの如くに見ゆ。

十、美の假象的統一

(十) 美の假象的統一。此の外、後に詳しく述べんとする第四の規範を考察すれば、更に美の假象的一方面を明かにし得べし。第四規範とは何かと云ふに、美の對象は有機體的統一を保たざる可からずと云ふ事なり。此の有機體的統一と云ふ事も、同様に單なる假象に。此の事は後に述べん。

十一、目的論的基礎

以上述べ來れる所に依れば、一般の美的假象性は(一)一般の美に通ずる假象性(二)美術固有の假象性(三)假象感情(四)假象的擬人(五)假象的統一と云ふ五に區分せらるゝを見る。吾人が風景畫に對するならば、上述の五の意味を有する假象が共に起る。第一、畫中の山川は純粹なる超物質的形式として現る。之は一般の美の假象性なり。第二、繪具の彩色が吾人に風景と云ふ印象を與ふ。吾人は眼前に實際の風景を見るかの如くに思ふ。之は美術に固有の假象なり。第三、畫を見ると、必ず普通の感情とは異なる超現世的の感情即假象感情が起る。第四、畫中の山川は憐れ、憂ひ、泣くが如く悲むが如く又は活氣に充つるが如くに見ゆ。之は假象感情なり。第五、最後に山川草木は布置配合宜しきを得て、調和的又は有機體的統一躰なるが如くに思はる。然し此の有機體的統一は吾人の印象に對してのみ見ゆる統一にして、假象的統一に外ならず。

(十一) 目的論的基礎。觀美態度に與ふる價值、吾人は今第三規範に、究竟見的基本を與へざる可からざる時機に際會せり。先づ、此の第三規範が、前述の二規範に附加せらるゝ事に依りて、如何なる價值を觀美態度が得るかを述べん。觀美態度

は此の第三規範の附加に依りて、著しく人類に對する固有の價値を得。既に述べしが如く、美の對象が第一と第二との二規範に一致する物ならば、美的靜觀は、觀照と共に感情を伴ふて意味ある内容中へ没入すと云ふ状態となる。されど、此の態度は敢て美的靜觀にのみ限れる物に非ず。學者が科學哲學を研究する態度は殆んど之と同じ。然し之に第三の規範が附加せられて始めて美的態度が全く科學哲學宗教道德等に於ける態度と異なる物となる。

勿論宗教道德又は哲學に於ける態度には、實際の對象を、觀照すると云ふ事なし。然し意味ある内容中に、感情を以て没入すると云ふ事は、起るを得。科學には、觀照に相當する「觀察」と感情を伴ふ思想が意味ある内容中に没入すと云ふ二の態度起る。されど、科學にせよ、又は宗教道德乃至哲學にせよ、對象を假象とし又は形象として見る事なし。換言すれば、此等の態度には、對象物を現實の我に全く關係なき物と考へ、又は重苦しき現世的羈絆、物質的束縛を解脱し、超然として、天上界を逍遙し、紫雲を踏んで暗嶺たる下界を下瞰する底の趣を缺く。此の如き超然たる不羈不束の態度は、只第三規範の附加する事にのみ依りて得らる。

そは、兎も角、文藝は此の假象性を得て、始めて第一規範と第二規範との要求を十分に實現し得る物とす。換言すれば、感情を伴ふ觀照に依り、意味甚深なる内容中に全意識を沒了すと云ふ心理態度は、文藝を假象として見るを得て、始めてその實を全うし得べし。何となれば若し美的對象が假象性を有せずんば、賞翫者は不羈不束の超世間的態度を取るを得ず。従つて實際的感情や、現世的意志や、現實的認識や、物質的欲望等の爲めに、觀照と感情との發展が著しく妨害せらるればなり。例へば、浪狂ひ、風怒る、大洋の壯觀も、觀者が恐怖の實感に襲はるれば、泰然として美的觀照をなすを得ず。悲劇に對しても、これと同じく、激烈なる嫌忌恐怖憎惡憤怒憂懼苦惱等の實感を得ば、從容として美的靜觀を爲し得ざるべし。此の外、觀美態度中に、物質的欲望や、科學的認識や、道德的情意や、宗教的祈念等を催起せば、又觀照と感情との發展は妨害せられ、到底完全なる二者の統一的活動は得られざるなり。故に假象性は觀照と感情との一致を援助する物と云はざる可からず。かく無關心の超世間的態度は、觀照と感情との發展を扶掖するのみならず、價値ある内容として認めらるゝ物の範圍を擴張す。即假象性は感情と思想とが調

和的に範類へ擴張するのを助くる物なり。何となれば、吾人は此の出世間的の超然たる態度に依りて、我執と偏見との煩ひを免れ、公平無私の態度を取り、寛濶なる見地に依るを得るが故に、云ひ換ふれば、自己の奉ずる偏狭なる主義とか、得手勝手の主張等の煩累を脱し、慈悲無量なるの神の心と一致するが如き客觀的態度を取り、一視同仁の目を持つて、事物を靜觀し得るが故に、此の結果として、價値ある内容として認めらるゝもの、範圍は非常に擴大せらるゝは疑を容れず、故に假象性は感情と思想とが、調和的に範類へ擴張すると云ふ、心的状態を助くる物なりと云ふ所以なり。

第十二節 觀美態度に於ける分合作用

一、分合作用

(一) 分合作用。美的態度は上述の三規範を誘因する三の特性を有する外に、尙一特徴を有す。その特徴とは何かと云ふに、觀照の際、對象の各部分を分解し、更に結合する作用を云ふ。かく美的靜觀に於て、各部分の印象を統一する作用より美の第四規範起る。此の分合作用は、單に美的觀照に限れる物には非ず。實際の事物

二、普通の見方に於ける分合作用

を觀察する際にも同様に、對象を分拆し結合統一する作用起れど、特に美的觀照に於て、此分合作用は十分に現る。先づ普通の觀察に就いて述べん。

(二) 普通の見方に於ける分合作用。吾人が實際の事物を見るに當り、對象が極めて小さくして、簡單なる物ならば、其の全体が網膜の中央小窩に寫るが故に、吾人は一時に全部を見るを得。然るに若し對象が大きく複雑なる物ならば、吾人はその各部分を順を追ふて見、更に此の各部分を綜合して、初めて對象の全体を知るを得べし。即知る、吾人が物を見る際には、複雑なる形や雜多なる色の印象を結合する作用起るを。

三、普通の聞方に於ける分合作用

(三) 普通の聞方に於ける分合作用。音を聴く際にも、同様に複雑なる音響の集合せる物が、順序を追ふて知覺せらる。人の話を聞く時には、フレーズやクロースに分ち、又は文章や節や段落に分ちて聞分く。此の外、色々の噪音に於ても、多少分合作用が行はる。例へば、足音、車の響、汽車の振、時計の音、又は颯々たる松籟、潺々たる水流、輕々たる濤聲、さては水に鳴く蛙、花に歌ふ鶯より、火の燃ゆる音、湯のたぎる響に至る迄、皆一種の律又は節をつけて聞くが常なり。

此の如く、普通の視聽覺に於て行はるゝ分合作用は美的態度に於ても當然行はるゝ筈なり。何となれば、美術の觀照も實際の觀察と同じく、感官の知覺作用に依る物なればなり。此の分合作用は美的觀照に於て、唯に行はるゝのみならず、實際の觀察に於けるよりも、遙かに完全に行はるゝ物なり。普通の知覺に於ては、各部分を結合統一するに、多くの勞力を要せず。吾人を圍繞する事物に於ては、各部分の統一は甚不完全にて、一向にまとまりがなく、不規律の物極めて多し。従つて、普通の事物に對しては、只此は家なり、森なり、川なりと云ふ事が分れば、それにて事足る。詳しく事物の各部分を意識にて分拆し、更に綜合統一するの必要なし。然し美的觀照に於ては、斷じて斯の如き放埒なる意識態度を以つて臨むを許さず。かくしまりなき注意状態を以つて、作品を對觀せば、美的靜觀は全く成立するを得ざればなり。故に吾人が美的靜觀を全ふせんと欲せば、美的對象に注意を凝らし、その對象の各部分を知覺し、更に結合統一して、全體を一の統一體と認めざる可からず。美的靜觀は決してスル／＼と上滑りの觀照とは一致するを得ず。眞の美的觀照に於ては、作品が呈供する丈の複雑なる部分と、その部分間の統一とが、

注意して認められざる可からず。此の事は一切の藝術及び美的對象として認めらるゝ、自然美に通じて行はるゝ作用とす。

然し對象の各部分を綜合し、全體を統一體として認めざるにも係らず、然も生々と力ある美的享樂が起る場合もあり。例へば、或山水書を布置巧妙にして、配合宜しきを得たる統一的の畫として認めず、賞翫者が活氣に充ち充ちたる享樂を得る事あり。又音樂に熟達せぬ者は樂曲中の各要素間に存する統一を明かに意識せずして、然も強烈なる感動を受く。多趣多様にして複雑なる藝術品に於て、個々の成分を「アズエホール」として統一する事なしに、只個々の物として享樂するを得る場合もあり。然し之は趣味の幼稚なる時代に行はるゝ事にて、眼識が陶冶せらるゝに従ひ、益々綜合的に觀照するに至る。かく觀照の際、分解的に得たる個々の印象を統一して享樂するは、觀美態度の一特性なり。然るに、此の統一作用は先に述べたる觀照と感情との融合一致よりも、コンクリートよりゼテラルへ移ると云ふ事よりも、又は實際感情の排除と云ふ事よりも、演繹し得る物に非ず。又此の反對に、此等の三者は此の統一作用と云ふ一性質より演繹し得る物とは

一四、形式的統一と内容的統一

思惟せられず。故に此の統一作用は一の新しき獨立の心理的源泉にして、之より一の新しき獨立せる美の根本的規程が起ると考ふるを妨げず。

(四) 形式的統一と内容的統一。各部分の統一には二の種類あり。一は形式的統一、他は内容的統一なり。吾人は先づ、此の兩者の差異を明かにして、後第四規程の意味を知り得べし。

一 形式的統一とは、對象の形式によりて爲さるゝ統一を云ひ、内容的統一とは、對象の意味内容に依りて爲さるゝ統一を云ふ。一は外部の關係より起り、他は内部の關係より起る。然し此の兩者の區別は、尙精密なる説明を要す。

形式的統一は形式上の關係例へば、齊整、齊對、比等より起る。されど此の形式的統一は形式より起る氣分によりて助けらるゝ事あり。音樂建築等は人又は物を描寫せぬにも係らず、對觀者に氣分を喚起す。然るに此の氣分なるものが統一を扶掖する事あり。大建築に對し、莊嚴と云ふが如き氣分が、何となく全體に行互れるが如くに思はるゝ時には、此の氣分が全體を統一するを裨益する物なり。然るに、此の氣分は建築の内容と見るべき物なるが故に、形式的統一と云ふとも、嚴

密に云へば、形式上の統一と氣分的內容より起る統一との結合なり。

二 内容的統一。之は繪畫彫刻等が表はす物の意味又はその意味に聯絡する感情によりてなさるゝ統一なり。然し吾人は大體に統一作用をなす物を、形式と內容とに分ち、一を形式的統一、他を内容的統一として區別せん。

此の如く、形式的統一は線、表面、色、音等の關係によりて規定せられ、内容的統一は形式中に含まるる實際の內容即意味感情等によりて爲さるゝ物なり。先づ例を上げて説明せんに、ラオコーン像、之は父が中央にをり、二人の子がその左右に立つ。此の親子三人は、大體に嚴密に云へば當らざれど、「シンメトリー」を爲す。而して、此の三人のグループを大蛇がメ付けて一團となす。之は形式的統一なり。然るに、親子三人は大蛇にからまれて、激烈なる心身の苦痛を共にす。此の共通の而かも作品全體に普く現るゝ大苦痛と云ふ感情が、此の作品を統一す。これは内容的統一なり。博覽會に當て出品せられたる軍人歸省の油繪に於て、軍人の熱心なる戰爭談に對し、一家の人々は皆軍人に視線を凝集して、聞惚れてをる。此の繪は軍人が統一の中心をなす。此の外、文部省の美術展覽會に掲げられたる日蓮の辻

説法にても同様に、數多の群集が日蓮の熱烈熾く、が如き説法に魅せられて、熱心に傾聴する者もあり、又は反抗的態度を取る武士もあれど、此等の群衆は皆日蓮を中心として統一せらる。此等の統一は内容的統一なり、吾人の能く經驗する事なるが、庭を窓より見、又は小さき穴より覗き、景色の或一部分を區劃せば、大いに美的となる事あり。又寫眞に取つて見ると、つまらぬ所が存外能く見ゆる事もあり。かく景色の一部を限ると美的になると云ふ理由は、全く形式的統一と内容的統一とが得らるゝが故なり、限り方が宜しきを得ば、景色に固有の氣分を害する部分排除せらるる事も、又は形式的統一を破る部分が削除せらるる事もあらん此の結果景色が美しく見榮えする物とす。

(五)各美術に於ける二の統一。文藝の種類に依りて、此の形式的及内容的統一は大に趣を異にす。描寫的美術に於ては、意味内容が著しく統一を助く。此等の美術は内容として自然物人間動物等を描寫する物なり。故に描寫的美術を賞翫する際には、内容的統一が著しく現る。しかし線、表面、色、又は詩歌に於ては、音調等の關係が作品の觀照に際して、意識せらるゝ物なるが故に、此の際に、又形式的統一

五、各美術に於ける二の統一

が起る。

之に反して、音樂又は建築等の氣分的藝術に於ては、之と大に趣を異にす。音樂には觀念的内容なし。故に全く内容的統一は音樂に於ては皆無なり。勿論音響によりて聯想さるゝ意味、又は氣分、感情が多少内容的統一を助くる事あれど、之に依りて爲さるゝ統一は、極めて微弱にして殆んど勢力なき物なり。音樂は只音響の關係即音の強弱、大小、長短、旋律、節奏等に依りてのみ成立す。故に音樂には唯形式的統一ある耳。

他の氣分的美術即工藝美術又は建築等に於ては、音樂と大に類似す。茲には形式的統一が著しく現れ、内容的統一は極めて少し。工藝美術に於ては、例へば急須は底腹、蓋、嘴、把手等の各部分が釣合よく結合せる物なり。此の結合は線や表面の結合即形式的結合なるは云ふを俟たず。然し此の外意味の結合が共に起る。即急須の目的に關する知識が茶を入れ茶碗に茶を注ぐと云ふ一の目的の下に各部分を一統するを助く。建築に於ても同様なり。大伽藍はその形式によりて統一せらるゝは勿論なれど、此の際、又建築物に固有の意味が多少統一を援助す。伽藍の

六、描寫的藝術に於ける著しき不規律

階段、玄關窓、廣間等は昇降の爲め、出入の爲め、光線を取る爲め、信徒を容るゝ爲め、云々の目的に關する知識によりて、伽藍は各部分に分解せられて意識せらるれども、然し寺院に固有の神佛を禮拜する爲めと云ふ一目的の下に各部分は存在してをると云ふ考に依りて、各部分は統一せらる。

(六) 描寫的藝術に於ける著しき不規律。描寫的藝術には合律、齊整、齊對又は等比等の規則に従はざる所の複雑なる要素又は單獨なる部分を持つて不規律なる作品極めて多し。若しも吾人が作品は規則正しき統一體ならざる可からずとか、各部分は同じ形を有し、又は同じ比例を持ち、又は黄金律に叶はざる可からずとか、云ふが如き考を持つて、繪畫彫刻等に臨まば、大に失望せざるを得ざるべし。描寫的美術の十中の八九迄は、規律は不規律の爲めに、齊整は不齊整の爲めに、齊對は不齊對の爲めに、等比は不等比の爲めに、壓倒せらる。只幾分か合律等比齊整に近き配合布置が現るゝに過ぎず。

七、物體より束縛せられぬ氣分的藝術

(七) 物體より束縛せられぬ氣分的藝術。氣分的藝術に於ては、大に趣を異にす。氣分的藝術は自然に依りて作られたる物體を、描寫する物に非ず。只藝術家自身

八、氣分藝術に於ける規律

の意匠次第、勝手に音線、色、面等を組み合わせ得、従つて自然界の對象より束縛せられず、描寫的藝術は之に反し、自然界の對象を描寫せざる可からず。即自然を或程度迄は模倣するを要す。然るに、自然界又は人間界の事物現象は、實に不規律にして、等比齊對黄金律等を無視する物極めて多し。是れ描寫的藝術にては、形式上の規則が嚴密に行はれざる所以なり。然るに氣分的藝術に於ては、此の制肘を受けず。自然界の事物よりは、何等の束縛をも蒙らざる美術は、音樂なり、建築や工藝品は、その現す物の實用上の目的より、多少の制肘を受く。然し建築や工藝品は、人によりて勝手に作らる。家屋、寺院花瓶、毛氈等に於ては、隨意に線、色、形、面等が複雑なる組合せを爲すを得、かく此等の物は作家の意匠次第、勝手に製作せらるる所は音樂と似たり。然し前者は實用の爲めに束縛せらるれど、後者は全く自由なり。故に全く同じとは云ふべからず。

(八) 氣分藝術に於ける規律。上述の事情より、氣分藝術に於ては、複雑中の統一が他の美術に於けるよりも遙かに完全に現し得。即氣分藝術にては、各部分の齊對、齊整、等比、杯の法則に従ふて、布置配合せらるる事多し。建築や毛氈等には同じ

九、同形と等比との反覆

形の窓や模様が反覆せられ、音楽は音響の結合せるグループを繰返す。此の如き色々の方法に依りて、氣分藝術には、不規律の部分は壓倒せられて、規則正しき配合が勢力を占む。

(九) 同形と等比との反覆。吾人は茲に各部分の統一は、唯「出來得る限り」實現せられざる可からずと云ふ事を述ぶるを要す。出來得る限り」と云ふ語を用ふる所以は、結合統一の程度は各美術に固有なる色々の事情に依りて、異なるが故なり。故に如何なる程度迄、各部分が統一せらるゝを要するかは、一般的に規定するを得ず。此の統一の程度如何は、美術の種類書き振りの差異、作家の技倆、又は取扱ふ對象の相異等によりて異なる。然し氣分藝術は描寫藝術に比して、遙かに完全なる統一をなし得る事丈は確なり。氣分的藝術は統一作用を妨害する彼の不規則なる自然物の爲めに制肘せられざるが故に、同形等比の反覆を十分に用ふるを得。その結果統一の程度は、最も完全に現る。描寫的美術に於ては、同形等比杯を反覆するを得ず。若し此等を反覆せば、それこそ、不自然極まる結果とならざるを得ざるべし。

十、氣分藝術に於ける不同の要素

(十) 氣分藝術に於ける不同の要素。氣分藝術は比較的完全に統一せらるると雖も、決して不同の要素不規律の成分が、全く排除せらるゝ物に非ず。他より何等の制肘をも蒙らざる音楽に於てすら不規則の要素が著しく包含せらるゝを見る。音響の長さ連續の中には、律的の統一が著しく現るると雖も、尙強弱の差異、長短の相異、大小の區別、音色の變化等によりて、甚しく不規律なる關係を有す。建築に於ても、同様に、規律同形等は不規律不同形の部分によりて、大に蠶食せられ、不齊對の部分、不合律の成分、單獨にして繰返されぬ要素が或程度迄包含せらるゝを常とす。

十一、合律の美的價值

(十一) 合律の美的價值。吾人は上述の説明によりて、各部分の整然たる秩序が美的規範たるの資格なき所以を明かにし得べし。然し如何なる美術と雖も、各部分が混沌として、錯亂紛糾せる物にして、美術品たる價値を有する物は斷じてなし。各美術品の各部分は必ず多少規律に叶へる配合をなす物なり。既に吾人が述べしが如く、規律に適へる配合は、不規則の配列によりて、多少犠牲となると雖も、又殊に描寫的美術に於ては、合律と云ふ事は、單なる暗示又は幽かなる痕跡

を示すに過ぎずと雖も、尙隱約の間に規律あり、冥々の裡に秩序ありて存す、獨逸のツァイジングと云ふ美學者は黄金律を極めて貴重なる法則と主張し、此の黄金律は、鑛物にも植物にも動物にも又は人身にも現るゝのみならず、太陽系統の諸惑星間にも現るゝものにして、美の根本的法則なりと主張すれど、蓋極端論たるを免れず、吾人が叙述せる所に依りて考ふるに、規律正しき關係は、美術に固有の事情により、色々の仕方と様々の程度に於て、不規律なる關係と相平行すと云ふが適當なり。故に美の各部分の關係は、不規則中に規則を保てる物と云ふべきなり。若しも、美が規則正しき物ならば、乾燥無味となり、平凡單調に陥らざるを得じ。單に規則正しき丈の形式は、美的價值ある物に非ず。故に美の形式は、不規則中の規則、不秩序中の秩序、複雜中の統一を得て、價值ある物となるを得べし。

因に云ふ一直線を二分し、一を a とし、他を b とし、 a と b との比が a と b との比に等しければ、此の a と b との比を黄金律と云ふ。

第十三節 有機體的統一

統一、
複雜中の統一

(一) 複雜中の統一。美の對象は複雜中に統一を保つ物、統一の中に複雑なる物と云ふ考は、昔より知られたる事實にして、美の此の特性程、早くより知られたる物はなし。既にプラトニーやアリストートルは此の方面に着眼して、美は異なる物の結合多くの物の統一なりと道破せり。後世に至つても同様に、多くの美學者に依り同じ事が、色々の言葉に依りて、説明せられたり。其の一二を擧ぐれば、部分の調和、部分の秩序、正しき配列、力の平均、ヘルデル統一せられたる複雜(スルツェル)部分が全體と一致する物(バウムガルテン)云々。近代に至つても同様に、統一的に結合せられたる複雑と云ふ考は、多くの學者に依りて、等しく主張せられたる事なり。

(二) 有機體的統一。複雜中の統一が美的影響を吾人に與へんには、此の統一は有機體的の統一ならざる可からず。唯同じ物、又は似たる物の多くが、單に外的に何等の密接なる内部的結合なしに、集合して複雑なる物となれるのみにては、此の要求を満たす物と云ふ可からず。例へば、色々の繪の具を手當り次第に塗抹して、更にその上を或一の色を持つて、普く染むれば、各々の色は一の共通色に依つて統一せらると云ふを得べし。或は歪める鼻、歪める口、凸凹せる汽車道、曲れる線

統一、
有機體的

三、有機體的統一
は假象なり

等を雜然と畫くとせば、此等の圖には、明かに歪めりと云ふ特性が共通す。故に此の二の反古は複雑中に美的統一を得たる物なりと云はゞ、笑ふべきなり。否、笑ふ價値もなき妄言なり。塗抹せる色、歪める形、此等の物は成程共通の色と形とを持つ。然し此等の物には、内的結合なく有機體的統一なし。吾人の所謂複雑中の統一とは、多くの物が内より結合すと云ふ印象を與ふる物、即各部分の間に脈絡ありて、密着不離の關係ある物譬ふれば、各部分に血が通ひ、神經が通じてをるが如くに、見ゆる物、即有機體的統一をなす物ならざる可からず。唯支離滅裂の物、寄木細工的の物、つぎはぎせるぼろの如き物たる可からず。

(三) 有機體的統一 は假象なり。此の如く吾人は有機體的の統一と云ふもの、決して嚴密なる科學的意味に於て、有機體的と主張する者に非ず。唯その結合の工合が有機體的なるが如くに、見ゆるを要すと主張するのみ。實際吾人が美の對象を觀照する際には、對象の各部分が親密なる有機體的統一をなすかの如き印象を得。此の有機體的統一は、全くかの如くに、見ゆるに過ぎず。即假象なり。幻影なり、吾人の迷ひなり。然し實際の花卉とか禽獸とか又は人間等を美の對象として

四、描寫的及び氣分的藝術に於ける統一の性質

見る時には、有機體的統一と云ふ印象は、幻影に非ず。従つて有機體的統一 は假象に非ず。實際對象物が有する性質なり。然し之は特殊の場合に限れる事にして一般の場合には、有機體的統一 は假象なりとす。

(四) 描寫的及び氣分的藝術に於ける統一の性質。美的對象の各部分の印象を統一する力の性質は、藝術の種類に依りて異なる。既に前節に述べたるが如く、氣分藝術に於ては、著しく形式的統一が勢力を占む。されど描寫藝術に於ては、之と異り、形式より起る統一も、多少はあれど、主として内容的統一なり。即描寫藝術は描寫せらるゝ人や物や行爲事件の配合如何によりて、有機體的に統一せらるゝと雖も、主として人や物や事件等の有する意味及び其の意味に附隨する感情に依りて、有機體的統一の印象を得る物なり。

(五) 統一の様々なる方法。美の對象に於ける統一は假令形式的に又は内容的に形成せらるゝとも、此の有機體的統一は、感覺によりて見、又は聞き得るやうに現るゝ物とす。かく統一が觀照せられ得るやうに現るゝ方法、即統一の表出方法には、色々の仕方あり。今その中の三四を上げれば、

五、統一の様々なる方法

一、中央に位する形

一、中央に位する形。美の對象の各部分が皆中央に位する物に關係を有するが如くに形成せらるれば、見心よき統一が成立す。中央部に位する物を、立派に作り上ぐれば、それが他の部分を統率するやうに見ゆ。恰も其中央の物が美的對象を統一する中心なるかの如き印象を與ふ。建築や工藝品が齊對的に構成せらるゝ時には或形を持つ物が中央に位置を占めて、他の部分を左右の兩翼に分つ事は、極めて多し。美しき窓、立派なる物見櫓、飾ある破風、素晴しき出入口等が建築に於ては中央に位す。繪畫に於ては、クリストやマリア等の重立てる人物が中央に畫かるゝ例は随分多し。

二、統一する者が中央に非ざる場合

二、統一する者が中央に非ざる場合。然し他の部分を統轄する物は、必ずしも中央に位するを要せず。統一の中心が端に片寄れる例は繪畫には極めて多し。重立てる人や物の位置は中央にあるを要せざるのみならず、重立てる花役者の數は一以上の事あり。又は一團の群衆より成る事もあり。川中島の合戦を畫くとせば、信玄と謙信との二大將が花役者となる。かく統一する力は如何にせばよく現るゝか、又は統一する人や物の位置數等は如何にせば可なるか、等のことは茲に

三、運動的統一

述ぶるを得ず。

三、運動的統一。統一力を有する物は強ちに一又は一以上の人や物と限れるに非ず。時としては統一する物が線又は線を通じて走る運動中に現るゝことあり。先に述べたる一と二との如き統一を固定的統一と云はゞ、第三の統一は運動的統一と云ふを妨げず。運動的統一は、例へば幼稚園の子供が教師の廻りに互に手を取り合ふて大なる輪を作り、歌ひ乍ら運動する所を畫くとせば、此の場合には、同じ方向に向ふ運動により統一せらる。ルーベンスの「百姓躍り」と云ふ畫は圓き線をなして走る運動に依りて統一せらるゝ例なり。勿論此の動的統一は靜的統一と結合し得るは云ふを俟たず。幼稚園の小供が中央に立てる先生の指揮によりて、歌ひ且躍るとせば、此の教師は全體の固定的統一人物となる。日本畫に於て鯉や鮎等が畫かるゝ時に、此等の魚類の群が曲線を描いて流るゝ水の線と此の水流を遡つて同一方向に泳ぐ運動とによりて統一せらるゝやうに畫かるゝ事はよくある例なり。

四、相對運動

四、相對運動。之も亦統一する力を有す。二の相對人物が好意的に相愛し相親

五、文學に於ける固定的統一

んで寄りかゝる場合にも、又は二者が敵視して互に相争ひ相闘ぐ場合にも同じく、兩者の對向する運動に依りて統一が起る。ルーブルに在るラファエルの「ゲオルグ」が龍を退治する繪畫にては、龍と馬とが猛烈にのしかつて、たけり、狂ひ、闘ぎ、争ふ。騎士は奮然として劍を閃かし、龍を斬つて捨てんと馬上に立上つて居る。此の激烈なる相對的運動が此の作品に統一的表出を與ふるは疑を容れず。

五、文學に於ける固定的統一。以上述べたる統一の方法は嚴密に云へば、繪畫彫刻建築等の美術に對してのみ適用せらるべき物なり。文學や音樂に關しては、大に趣を異にす。然し戯曲小説等にも亦固定的統一ありと云はれざるにしも非ず。例へば、芝居にせよ小説にせよ必ず一人又は二人の主人公ありて、全體の葛藤の筋となる。此の外、團體を主人公とせる戯曲もあり。之に依りて見れば、一人又は二人の主人公又は團體が葛藤の筋となり、紛紜の中心となり、大綱となり、全體を統一する物と云はざる可からず。之は人物が統一する例なれど、此の外、所作の連續中には活動が最高潮に達せる一又は一以上の頂點あり。此の頂點は戯曲や小説を統一する力を有す。何となれば、色々の所作、様々の葛藤が、相寄り相集つて、此

六、複雑の種類

の動作の頂點を誘引する物なるが故に多くの所作葛藤は皆此の頂點に向つて集中し輻湊する物と見るべき物なればなり。此の關係によりて、事件の大發展をなす幕は、前に演ぜられたる色々の所作を統一する物なり。芝居の大團圓は此の一例とす。

文學戯曲等を統一する物は、形象美術のそれと大に異なるは、以上の説明によりて知るを得べし。されど各美術に於ける、多くの統一方法及此等の統一方法の差異等は茲に詳しく述ぶるを得ず。吾人は唯(一)統一には性質を異にする物ある事(二)同じ性質の統一にても、その統一方法には色々の物ある事(三)此の色々の方法は互に助け合つて一作品中に現れ得ること、之を知つて暫く満足せざる可からず。

(六)複雑の種類。複雑には三の種類あり。此の三の關係によりて、單調と複雑との差起る。三の關係とは何ぞと云ふに、第一部分の數の多少、第二相異せる部分の多寡、第三各部分の相違の程度即之なり。

各部分の數の多少は、例へば、日本の音樂と西洋の音樂とを比較せんに、一は簡

單なる音、他は複雑なる音を用ふ。三味線の音にせよ、笛の聲にせよ、一の響なり。勿論嚴密に云へば、原音と多くの部音との結合なれど、然るにピアノやオルガンにては、振動數の異なる多くの音を一時に出す。即日本樂の音響は簡單にして、西洋樂のものは複雑なり。此の外、獨奏と合奏とを比べ、二三本の花卉の畫と、花園全體の畫と、又は一個の指輪と、盛粧せる婦人とを比ぶれば、二者の間には部分の數に、非常なる相異なるを知らん。

相異せる部分の多寡は、晴れ渡れる空と、夕照の空との間に、白雪皚々たる冬の景色と、百花爛漫たる春の景色との間に、著しく現はる。

相異の程度は、黄昏の景と、晝間の景とを比較して見れば分る。黄昏時には、物の色と形とがドンヨリとなつて、物と物との相異の度が畫に比して非常に少し。

(七) 複雑の度の過大と過小とは、此の三の關係如何に依りて起る。複雑の度が極めて小なる時には、對象物に於ける各部分を統一せんとする賞翫者の要求に、相當の滋養物が供給せられざるが故に、統一の要求は満足せられず、従つて賞翫者はその作品を單調とし、平淡とし、無趣味とし、ブリアとして、非難するは當然な

七、複雑の度の過大と過小

り。此の反對に、複雑の程度が極めて甚しく吾人の統一力以上ならば、作品は混沌たる物紛亂せる物雜然たる物として排斥せらる。然し吾人は或一定の程度迄は、複雑の度が上るとも、又は下るともよしと云ふ。其の境界線を、一般にあてはまるやうに、規定するを得ず。何となれば、此の複雑の程度は、美術の種類に依り、描寫の如何により、書ぶりの相異により、作家の技倆により、對象の性質によりて、一定せざればなり。

茲に特に吾人の注意すべき事あり。それは何かといふに、單調と平淡とに密接の關係を有する一種の美ある事なり。即東洋趣味に固有なる禪的の寂し味、俳句的澁味等と云ふ一種の妙味が、單調の中に含まるゝ事あり。此の外、場合によりては、假令寂し味や澁味と云ふが如き妙味を含まざる單調と云へども、作品の必要なる要素となり得る事多し。小説や戯曲等には、往々單調なる幕が挿挿される。例へば荒涼たる沙漠や、空漠たる冬枯の野原や、茫々たる海洋等の景を表はして、大に作品全體の美を増す事あり。之と同様に、複雑の過大も亦美的影響を増す事あり。ワグネルの樂曲の前に奏する曲は、嚙然轟然又雜然、耳を聳する許り混沌たる物

なるにも係らず、此が爲に一段の趣を添ふるとの事なり。芝居にも、役者の出揃ひと云ふ事あり。西洋にては、大げさに二百人位の役者が總出をする事あり。恐らく目がくらむ事なるべし。されど之が爲めに、芝居が非常に引立つと云ふ。之は過度の複雑が全體の美的影響を助くる例にして、過度の複雑の有する消極的價值とす。然し過度の複雑その物も、亦積極的價值を有する事あり。例へば、入り亂れて躍り狂ふ舞踏には、それ相應の或美的價值あり。又は百花繚亂たる風情、落花狼籍たる趣、等も亦捨がたき一種の趣味を有す。

八、通覽性

(八) 通覽性 トランスヴェール 一般に適用し得る複雑の程度を規定する事は、假令不可能なりとも、大體に複雑の程度に、或寛濶なる制限を與へらべし。此の制限とは何ぞと云ふに、對象をアズ、エ、ホールとして、通覽し得ると云ふ事なり。之を假りに吾人は通覽性と云ふておく。

此の通覽性は對象が過小と過大なる時にはなくなる。通覽し得る境界線には二あり。一を極小限、他を極大限と云ふ。對象が極小限以下に下りて、極めて小さくなれば、美の對象とならぬと同様に、極大限以上に上つて、尨大なる物となれ

ば、アズ、エ、ホールとして、認むるを得ず。文學が法外に長き物にて、注意力と記憶力とに富む讀者と雖も、大體事件の経過を想像して統一し得ざる場合、又は先に讀める事件を想起して、後に讀む事件との關係を認めえぬ場合には、美的統一と爲して吾人に影響を與へず。ゾラの「ルイ・ゴンマカール」と云ふ二十冊物の小説は、續き物なれど、恐らく統一と爲して賞翫し得る者は非ざるべし。馬琴の「八犬傳」も隨分長し。通覽するには非常に困難なり。勿論「八犬傳」は其の内容が荒誕無稽なる成分に富み、長々しき龍の説明やら、支那の古事古實の引用やら、無趣味の説教やら、下らない冒險談等の爲めに、吾人の注意力に衰弱を來たし、全體を通覽するを得ざるに依るべし。されど兎に角、此等の作品は長さに於ても、最大限に近き物なるべし。宏大なる建築の觀照に於て、十分なる印象を得んと欲せば、外を廻つて見、内に入つて見、近づいて見、遠ざかつて見て、個々の知覺表象の斷片を想像に依りて綜合せざる可からず。故に非常に困難を感じる物とす。

最小限の方面は如何と云ふに、矢張對象が極めて小さき物ならば、通覽しえず。例へば、豆のやうに小さき物ならば、吾人の觀照が一部より他の部分へ移り行く事な

し。従つて、分解も結合も起らず。故に通覽する(多少語弊はあれど)を得ず。日本には、俳句川柳和歌等の短詩あり。此の十七音又は三十一音詩之は日本文學否世界文學の最小限なり。勿論此等の和歌俳句は形式に於て、最小限なりと雖も、長き歴史と天才の輩出とに依りて、偉大なる發達を遂げ、俳句とし和歌として立派なる詩を出せり。されど遂に俳句としての傑作、和歌としての名作に過ぎず。大なる文藝品としての價値は、詩形の小さなと同じく、小き物なりと云はざるを得ず。天地を動す力ありとの讚辭は畢竟白髮三千丈流の形容に過ぎず。此の最大限と最小限との二境界線内にある物と雖も、悉く美的價値ある物と云ふを得ざるは勿論なり。此の二境界内にある複雑なる物にも、尙複雑の度が過小なる物も、過大なる物もあるは云ふを俟たず。既に述べしが如く、如何なる程度迄、複雑なりとも又は單調なりとも、十分に美的影響を吾人に與へうるかは、一般に適用し得るやうに規定するを得ず。

(九) 嚴格なる統一と寛濶なる統一。之迄は統一と複雑とに就て述べしが、次に來る可き問題は統一と複雑との關係なりとす。吾人は次に如何なる程度迄、統一

九、嚴格なる統一と寛濶なる統一

が複雑中に現るべきかを述べん。

統一が複雑を支配する程度には、嚴重なる物と寛大なる物との二あり。而して此の兩極端の間には、寛嚴の差ある幾多の階級が含まる。嚴重なる物に於ては、吾人が各印象を結合するに際し、統一の爲めに強ひらるゝやうに感ず。此の如き作品に於ては、各部分を統一する力は甚強く嚴しく、決して束縛をゆるめず。即各部分は全く統一の下に服従して、恰も統一と云ふ物より、容赦なく御せられ自由に複雑なる發達をなすを許されず。自由なる統一に於ては、統一は弛く且弱く各部分は比較的、不羈奔放自由獨立の發展を爲すを許さる物とす。かく統一力には、寛嚴の二あり。而して此の二者の間には、幾多の階級が挟まる。然し吾人は大體に寛なる物を寛濶なる統一とし、嚴なる物を嚴格なる統一として區別せん。

(十) 各美術に於ける統一の寛嚴。統一の寛嚴は描寫的藝術と氣分的藝術とに依りて異なる。描寫藝術に於ては、物、人行爲、事件、現象等を描寫する物なり。然るに作家が模寫せざる可らざる物や人や行爲や現象等には、自然に統一の嚴なる物も、寛なる物も、更に、又統一の無き物もあり。故に作家が統一的に描寫せんとする時

十、各美術に於ける統一の寛嚴

には、直に外部より束縛せらる。氣分藝術に於ては、之に反し、作家の自由意志に依りて、隨意に結合するを得。此の結果描寫的美術に於ては統一は弛寛なり。唯整然たる規律に接近せんとするに過ぎず。従つて各部分是不覇奔放なる發展をなすを得。氣分的藝術に於ては、統一は峻嚴にして整然たる秩序を有す。故に各部分は規矩繩墨に依りて、拘束せらる。

又同じ描寫的藝術の内にては、繪畫彫刻小説戯曲等に依りて、統一の寛嚴に異なる差異あり。或程度以上に統一力が弛緩せば、藝術の或物の性質と相容れず。されど又或程度以上に統一が緊密とならば、或藝術の性質と調和し得ざる事あり。彫刻と繪畫とを比較するに、彫刻の方は遙かに嚴格なり。彫刻に向つて繪畫に於けると同じ程度の寛濶なる統一を要求するのは不合理なり。此の理由は何かと云ふに、主として材料の異なる所より起る。彫刻の用ふる材料は大理石又は青銅等の如き重き物質なり。従つて不規則なる形や、入り亂るゝ形、又は運動する姿等は現さんとするも据ゑ付くるに難し。假令何等かの方法に依り据ゑ付くるを得とも、尙對觀者に不安の念を興へ又は支へ柱等を用ふれば、一見して不自然の考を

起し、美的靜觀を妨害す。故に普通規則正しき形を現さざるを得ざるなり。此の結果統一が嚴格に行はるゝ事となる。

小説と戯曲とを比較するに、戯曲に於ては遙かに統一が嚴なり。戯曲は小説の如く無遠慮に枝葉に亘り、到る所に花を咲するを得ず。之戯曲にては、要を摘み粹を集めて、短時間中に首尾照應し、前後呼應するやうまとまりを付けて演ぜざるべからざればなり。統一に於ける寛嚴の差は趣味の異同と文化の程度とによりて、大に異なる。趣味が偏狹不熟にして、美的陶冶の不十分なる時代には、堅苦しき規則重苦しき法則に束縛せらるゝを常とす。波斯戰爭以前の希臘の彫刻、伊太利のチオットオの畫等は、固苦しき形式に依る。ラファエル、チ、アンに至れば、チオットオに比して剛張れる所が大に減少す。然し尙後代に至るに従ひ、益々統一の束縛は自由となる傾向を示す。されど、此の反對に藝術家が圓熟するに従ひ、奔放不羈縱横無碍の發展より、次第に嚴正なる統一を計るに至れる例もあり。スツルムウントド、ラング時代に於けるゲーテ、シラーの文藝と圓熟時代の文藝とを比較するに、前者は複雑にして且つ極めて大膽なる自由發展をなせど、後者は比較的嚴正確

十一、第四規
範の目的論的
基礎

實の統一を爲す。

(十一) 第四規範の目的論的基礎 次に第四規範に目的論的基礎を與へん。元來何故に美的態度に於て、觀照と感情との一致と、意義ある内容と、超世間的感情とに、尙複雑中の統一と云ふ第四の要求が附加せらるるか、實際此の第四規範が充たさるれば、美の人類に對する價值が尙一層完成せらるゝに至るか。第四規範に哲學上の基礎を與へんには、先づ人類を智力の主體又は理性の主體なりと主張せざる可からず。智力を有し、理性を有する人類は、認識の際、事物を分拆し結合し統一せんとする要求を持ち、且能力を有す。元來理性の核は、形式上の方面より見れば、此の分解統一の作用に外ならず。故に理性の主體たる吾人々類は、觀照の際に文藝を統一的に觀照せんとする要求を有する者なり。感情と觀照との融合一致と云ふ事は、一種の統一なり。されど各部分を分解し統一すると云ふ意味の統一とは全く種類を異にす。前者には全く理性が活動せず。第二第三の規範も、同様に此の意味を有する所の理性の要求とは何等の關係なし。故に此の理性の要求は先に述べたる三の要求とは別種の物にして、互に根本的の物と云はざるべから

一、上述の四
規範は一切の
法則を包攝す

ず。かく人類の理性より起る此の根本的的要求は、唯美の對象が複雑中に統一を得てをると云ふ特性によりてのみ満足せらる。美の對象が統一體たらざる可からずと云ふ理由は實に茲に存す。

第十四節 四規範の統一

(一) 上述の四規範は一切の法則を包攝す。以上述べ來れる所に依れば、美の根本的規範は第一形式と内容との統一、第二意義ある内容、第三假象性、第四複雑中の統一と云ふ四となる。而して此の四の規範は吾人の美的靜觀の際に起る四の心理的に獨立せる人格の根本的的要求に外ならず。

扱吾人は以上の四法則を是認すると、次に美の根本的規範は此の四に限るか、と云ふ疑問に遭遇す。換言すれば、吾人の美的靜觀中に起る根本的的要求は此の四に限るか、と云ふ問題起る。されど吾人は之に對して「然りと答へんと欲す。未來永劫の末、吾人々類の美意識が進化に進化を重ね、吾人の精神が一大革新を遂げたる結果として、如何に要求が變化するかは、今より豫知し得る限にあらねど、少

くとも現今の状態にあつては、美的靜觀に對する吾人の根本的要求には、以上の四あるのみ。吾人は此の外に尙根本的要求ありとは信ずるを得ず。勿論幾多の小さな化成的要求はあり例へば、

(a) センシエアリズム

(a) センシエアリズム。の人は繪に於ては色、音樂に於ては聲が美しからざる可からずと主張す。趣味の幼稚なる者は殊に此の要求をなす。されど、美しからざる色や音は、特殊の美を現はす物なるを忘るべからず。故に此の派の要求は、取るに足らざる物とす。勿論所謂優美なる内容を描寫せんとするには、感覺的材料は美しき物ならざる可からず。故に此の派の要求は、唯所謂優美なる物を内容とする場合にのみ正當なる物なり。然るに此の場合の要求は、形式と内容との一致と云ふ規範に包含せらるゝ物なり。故に吾人は此の派の要求は、第一規範の一部分なりと見做すを妨げず。

(b) 寫實

(b) 寫實。寫實派の人々は、摸倣を非常に大切なる金科玉條と尊崇す。而して作中の事物殊に人間に於ては個性が現れざる可からずと主張す。然し之に反して理想派の人々は理想を尊び、文藝は高尚なる種族性を描破するを要すと説く。此

の個性と種族性との二は文學や繪畫等に於ては、甚貴重なる規範たるは無論なり。日本畫や西洋のアカデミシの繪畫彫刻等には、全く個性が缺乏す。その結果、吾人は此等の美術に對して多大の歎興を得るを得ず。

元來天地間にある物にして、多少個性を備へざる物はなし。殊に人類に於ては、著しく個性が現る。世界には決して同一の人が存在せず。假令似たる人はありとも、區別のつかぬ程似たる人は決してなし。禽獸に至るも猶同じ。唯普通の人は、禽獸の個性を十分に觀破しえざるのみ。鳥屋、牛屋、馬屋等の商買人は決して一と他と混同せず。毛色、大小、恰好等によりて十分に個性を區別し得。礦物植物等になると、個性は非常に減少して、殆んど無差別となる。然し山川の風景等は獨特の趣を供ふ。萬物は此の様に一方に於ては各々多少の個性を備ふると共に、他の一方に於ては皆種族性を表はす。人類は最もよく個性を現すと雖も、なほ各共通の性質を持つ。日本人には日本人氣質あり。支那人には支那人根性あり。同國民の中にも商人には商人らしき所、學生には學生らしき所、學者には學者らしき性質あり。故に寫實派が忠實に自然を摸倣すれば、個性を現すと同様に、種族性又は一般性を

も併せ寫すを得。此の結果吾人が寫生派又は寫實派の文學美術に接する場合に、思想が個體より範類的の物へ擴張すと云ふ心的經過をなすを得。即ち第二規範の一部分を實行するを得るなり。然し寫生寫實等の文學にあつては、思想が感情を伴はぬ」と云ふ缺點あり。寫生文と號する物にはことに此の缺點が見事に現る。此の外、感情的見地より見て、價值ある範類へ擴張せしむると云ふ性質を備へず。之に依りて見れば、寫實派寫生派の主張する主義は唯第二規範の一部分をのみ捕へて、文藝の理想は茲に在りと主張するに過ぎざる物なり。

(c)理想派

(c)理想派。の人々は寫實派に反對して理想化又は醇化美化と云ふ事を主張す。曰く藝術の本領は自然を超越し、自然よりも高尚なる物價值ある物を創造するに在りと。此の結果、此の派の人々は美人を描くや極端に美ならしめんとし、偉人を寫すや法外に偉ならしめんとするが爲めに、遂に個人性を失ひてあり得べからざる不自然の物を作り出す事となる。十中の八九迄、東洋の文學美術は古來より此の弊に陥れり。之は理想化の極端に走れる結果なるが、中正なる理想化は決して排斥すべし。物に非ず。寫實摸倣も極端に走れば、之と同じ弊害あり。摸倣と

醇化と結合して完全なる文藝が成立し得る物とす。

(d)技巧の完美

寫實的理想化、理想的寫實にして始めて藝術の規範とするを得べし。此の中正を得たる理想化と云ふ條件は先の規範の何れに入るかと云ふに、主として第二規範の中に入る物なり。形式の方面に對する理想化は第三第四等の規範に入る。寫實と結合せる理想化の作品は、感情を伴ふ思想が個體の觀照より價值ある範類へ擴張すと云ふ心的經過を吾人に與へ得、故に寫實と結合せる理想化、即理想的の理想化と云ふ規範は第二規範と一致する物とす。然し所謂理想化なる條件は、感情を伴ふ思想を持つて個體を觀照すと云ふ心的態度を吾人に與へずして、唯感情的に價值ある範類を知らしむるのみなり。故に所謂理想化なる物は偏頗なる主張にして、第二規範の一部分をのみ充す條件に過ぎず。

(d)技巧の完美。も文藝に必要缺く可からざる條件とす。文藝家の一生涯の努力は殆んど此の技巧の完美を得んとするに費さる。此の技巧の必要は茲に改めて喋々するを要せざる程重且大なる條件なり。此の條件は、上述のどの規範に入るかと云ふに、主として形式と内容との調和と云ふ第一規範に屬す。されど又多

少假象性とか又は複雑中の統一と云ふ規範にも關係す。此の技巧の完美と云ふ事は、一般の人々には、美しく綺麗に手際よくかきこなすと云ふ意味に解せらるれど、文藝は唯形式が美しく裝飾的に手際よく書きこなされたる耳にては、價値ある物とはならず。故に此の意味の技巧の完美は、全く文藝の法則とするに足らず。此の技巧の完美と云ふ事が、美の法則となる値をうるには、内容が形式の内に旁礴するやう巧みにかきこなすと云ふ意味の技巧の完美ならざる可からず。然るに此の意味の技巧の完美は、全く第一規範と一致する物なり。故に此の技巧の完美と云ふ事も、獨立の根本的規範とするに足らず。

(e) 此の外「ツエツクメンシゲカイト」

(e) 此の外「ツエツクメンシゲカイト」と云ふ事を、美の規範と主張する人あり。嘗て高山博士は此の語を合的性と譯せしがあまり結構なる譯語には非ざれども、外に適當の語が思ひ當らぬが故に暫く此の語を借用す。扱、此の合的性と云ふ事は「目的」の如何によりて二に分類するを得。一は主觀的合的性、他は客觀的合的性なり。

主觀的合的性

主觀的合的性とは何かと云ふに、吾人が精神の全部を美的靜觀に沒了せんと

客觀的合的性

する目的に、一致する作品の性質を云ふ。換言すれば、作品が文藝の目的に適合すると云ふ事なり。作品が此の目的に一致せんには、吾人が先に述べたる四の根本的規範を充せば事足る。單に「文藝は文藝の目的に適合せざる可からず」と云ふのみにては如何にせば文藝の目的に適合するかを教へず。然るに如何にせば、文藝の目的に一致するかを教ふる物が即規範に非ずや。故に此の文藝の目的に一致せざる可らずと云ふ要求は、文藝の規範たるの價なし。

(イ) 内的合的性

客觀的合的性 之はカントが二に區別せり。其の區別法に従へば、一は内的となり、他は外的となる。

(イ) 内的合的性 とは美の對象となる有機體が自己生存の條件に適當すると云ふ事なり。之に反し、(ロ) 外的合的性とは作品が吾人の實用に適當すると云ふ性質を云ふ。

此の如き説を吐ける最初の人は誰かは知らねど、アルトは「システム、デアキュンステ」二十九頁に内的合的性に就て述べて曰く、對象物が有機體ならば、其の對象の美は有機體が自己生存の目的に合すると云ふ事に在りと。此の如き説は決し

て文藝に適用しうる物に非ず。若し此の如き説を文藝に適用して作品の價値を斷定し得るとせば、枯木死人自殺失戀戰爭等は文藝の材題とならぬと云はざる可からず。ギリルバルツェルが希臘の女詩人サッフォーが失戀の人となり、嫉妬と怨恨と苦悶との極、ロイカデアの岬頭より身を海中に投じて死せる慘憺たる經歷を歌へる有名なる詩も、グーテのエルテルも、沙翁のハムレットも、近松の歌念佛も、皆自己生存に反す。故に非なりと云はざるを得じ。

此の內的合的性を主張する説は又完全説と云はるゝ事あり。對象が自己生存の目的に適してをる時にはその對象は完全なり。對象が完全なりと云ふ事は、疑もなく、美殊に優美等には缺くべからざる物とす。然し文藝が弱々しき病的の半ば破壊せられたる物を寫すにも係らず、その物が完全と云ふ理想と大に庭徑あるが爲に、却つて獨特の美的表出を有する事あり。凋める花、霜枯れたる草、荒敗せる畑、荒涼たる冬景色等は皆獨特の強き美的影響を吾人に與ふ。

此の外此の説に従へば、蚯蚓、蜥蜴、蠅、雀、豚等の如く比較的美的價値の少き動物と雖も種族の完全を現はし自己生存の目的に適せる物ならば孔雀、獅子、虎等と

(ロ) 外的合的性

同じ程度の美的價値を有すと云はざる可からず。何となれば、前者も後者も合的性又は完全性と云ふ要求を同じ程度に於て充すが故に、二者共に同一程度の美的價値を有すと云はざる可からざればなり。かく色々の不都合極る結論を引起すが故に、完全説や目的説の背理にして取るに足らぬ物なるは明かなり。

(ロ) 外的合的性。も同様に取るに足らぬ僻説なり。裝飾工藝美術建築等が吾人の實用に適すると否とは美術に關係なし。勿論此等の美術品が吾人の或實用の目的に合する時には、一種の快感を與ふれど、此の快感は超現世的の美術感情には非ず。此の如き實用の目的に適せる物より得る快感が果して美術感情ならば、一切の道具器械皆美術品なりと云はざるを得ず。建築や工藝美術等は實用上の目的とは無關係なる所の純粹の形式に於てのみ美術品なり。眞の美的靜觀の態度は假象性の場合に述べし如く、利害關係より超絶せる無關心の享樂なり。欲求なき觀照なり。意志の沈黙せる靜觀なり。此の如き外的の目的に作品が一致するや否やは問ふ所に非ず。藝術の觀照に際し、實用上の目的に叶ふを欲求するが如き態度は假象性と抵觸す。此の如く卑しき欲求が意識に上るや否や、美感は忽焉

として消滅に歸す。要するに客觀的目的に適合すると云ふ要求は、内外の二共採るに足らぬ僻論なり。僅かに意味ありとして許すべき主觀的合目的性と云ふ事も、美的規範とならず。故に合目的性と云ふ規範は悉く取るに足らぬ物と云はざる可からず。

(f) 自然主義

(f) 自然主義。自然主義と云ふ物あり。一時西歐の文壇を風靡せしが、今や大瀛萬里の波を蹴破し捲土襲來の勢を以て、吾國の文藝界に吹きすさぶや、靡然として靡かざる草木は無く、翕然として一世の流行をなせり。茲に於てか批評壇に甲難乙論の聲喧しく、論戰に火花を散して相争ふに至る。元來自然主義とは何ぞと云ふに、自然の在りの儘の忌憚なき直寫を文藝の絶對的規範なりと主張し、一切の人爲を排斥せんとする物に外ならず。吾人は次に吾人の所説に照して、自然主義の是非曲直を撿覈せん。

一、在りの儘の直寫

一、在りの儘の直寫。彼等は人生の一隅、自然の一片を唯ありのまゝに描寫せば、文藝の目的は達せらるると稱す。されど、自然及人生には、文藝の内容とするに足る價值と意義とを有する物と有せざる物とあり。然るに意義なき物を如何に

二、極端なる肉感

細叙し、趣味なき物を如何に模寫するとも、遂に文藝品たるを得ざるや明かなり。然し浪漫派の如く、人生の危機に觸れ、心神を激動せしむるが如き稀有の事件奇異の現象のみが、文藝の内容たり得べしと主張する者に非ず。勿論平常の状態に在る、自然及人生の描寫と雖も、又は下層社會の平凡卑俗なる生活狀態の直寫と雖も、亦意義ある内容となり得べし。されど、自然主義の主張する如く、文藝は唯在りの儘に自然の現實レキヤイを細叙し、人生の真相ソルナスを直寫せば、萬事足るとの説にして正しからんか。文藝は墮落して平凡冗長無意義無趣味の物となり終らざるを得じ。見よ十九世紀の初頃、俄然として自然主義が勃興するや、之に隨伴して平凡主義の流行せる西歐文壇、乃至現今の吾國文藝界を、吾人は平凡主義の跋扈と冗長主義の跳梁と、無趣味主義無意味主義の横行との弊に堪へざるなり。而して此の如き弊害の依つて來れる原因は何ぞと云ふに、唯自然主義は第二規範を無視するの要素を含むに依る。知るべし、自然の直寫なる物の許すべからざる主張なるを。

二、極端なる肉感。彼等は又忌憚なき自然の直寫を主張する結果として當然憚る所なく、人性の獸的方面を極寫し、殊に性欲を露骨に且赤裸々に眞寫し、人間

を怪物化せずんば止まざらんとするに至る。かく極力際どき直寫を敢てし、俗流の甘心を買はんとするや、遂に賞翫者の意識に實際的感情を挑發し、讀者を美的靜觀の埒外に誘惑する事となる。此の種の作物は風教を害し、世道人心を蠱毒する事、極めて大なるは云ふを俟たず。故に文藝以外の見地より見るも、極端なる自然主義は撲殺せざる可からず。加之此の種の作品は賞翫者に美的靜觀を許さざる似而非藝術なるが故に、文藝それ自からの見解に依るも、亦排斥せざるを得ず。即自然主義の極端なる物は、第三規範の假象性と矛盾する物にして、怪物化主義、肉感主義と墮落するに至る。之許す可からざる自然主義の第二缺點なり。

三、排技巧

三、排技巧。此の外ありのまゝ主義に依れば、自然は是なれど人の手に成れる物は總、非なりとす。従つて一切の技巧を排斥するに至る。即彼等は一方に於て、脚色上の技巧を撥斥すると共に、他方に於て、修辭上の技巧をも合せて唾棄せんとす。

先づ脚色又は筋の構成上の技巧より述べん。苟も作家が自然又は人生の一部を捕へ、その真相を直截に、且切實に、描寫せんとするには、その真相を十分に發揮

するの特色ある事件または現象を撰擇し、不必要の現象や妨害となる事件を排除し、以つて賞翫者が明確に觀照し得るやう、布置按配せざる可からず。然るに自然界の事々物々は雜然として紛糾し、混沌として錯亂す。故に文藝の理想がありのまゝの直寫にありとせば、文藝は遂に混沌として紛亂し、何等の秩序も何等の統一もなき物となり、觀照するとも、遂に明確なる印象を得ざる事となる。即自然主義は第四規範と抵觸し、やがて混沌主義となり、雜亂主義とならざるを得ず。之は自然主義の有する第三缺點なり。

此の外吾國に於て自然主義者と自稱するワイ、連の中には、修辭上の技巧を斥け、第二規範の形式と内容との調和を蔑視する没分曉漢あり。自然派の主張するが如く、人生の真相を描破して、直截に、且確實に、之を賞翫者に示さんとせば、賞翫者に明確なる印象を與へざる可からず。賞翫者に明確なる印象を與へんには、即内容に妥當せる形式を賦與せざる可からず。茲に於てか適切なる文字の撰擇と、妥當なる章句の洗練と、適當なる文章の布界、等を要す。こは炳として火を見るよりも明かなる事とす。宜なり、フローベール、モーパッサン、ゴントール等の自

然主義者が、思想感情を妥當に切實に且正確に表出せんとして文字の烹練と章句の推敲とに經營慘憺たる努力をなせしや、然るに輕佻浮薄なる末派の自然主義論に従はゞ、文藝は遂に平板無味粗漫蕪雜とならざるを得ず、即吾國に於ける一派の自然主義なる物は蕪雜主義非藝術主義と選ぶ所なき妄言に過ぎず。蓋排技巧論者は不自然なる脚色上の技巧や陳腐なる修辭上の粉飾を排斥せんとして遂に真正なる技巧をも併せて之を非とするに至れる没分曉淡と云はざるを得ず。

かく自然主義は第一規範の形式と内容との調和を無視して、蕪雜主義非藝術主義となり、第二規範の意義ある内容と矛盾して、平凡主義無意味主義となり、第三規範の假象性と抵觸して、獸欲主義肉感主義となり、更に第四規範の複雜中の統一と衝突して、混沌主義雜亂主義となる。故に自然主義なる物は到底眞の藝術とは氷炭相容れざる僻説たるを免れず、即ありのまゝの直寫云々は文藝の規範たるを得ざるなり。されど他の方面より見れば、自然主義も亦正當なる方面を有す。正當なる方面とは、何ぞと云ふに、先づ、

一、活人生に
觸る

一、活人生に觸る。彼等は自然の直寫を標榜す。従つて活人生に觸れ、人間生活の實相を爬羅剔抉し、現實生活の苦悶を描き、活きたる時代精神を捕へ、直に人性の根柢に迫つて生活の深奥に徹底せんとす。茲に於てか、經濟社會道德等の根本問題に觸れ、個人と社會との激烈なる交渉に筆を着くるに至る。自然派の作品が或は個人主義的傾向を帯び、或は社會主義的傾向を有し、又は社會劇と云はれ問題劇と呼ばれるいは、正に此の結果と云ふべし。かく自然主義の作品は活人生に切實に觸れ、現實生活の苦悶を描き、深く人性の深奥に短刀直入して、直截に、眞摯に、切實に、且大膽なる描寫を試み、以つて事件の底に隠るゝ無限の意味を味はしめんとす。此の結果深刻となり、痛切となり、辛辣となり、熱烈となり、激切なる生命と潑瀾たる氣魄とを作中に旁礴せしむるを得べし。こは現代人心の要求に呼應する所の物にして、眞正なる自然主義は意義ある内容と云ふ第二規範を十二分に満し得る物なり。之を自然主義の正當なる一方面とす。

二、新技巧

二、新技巧。舊文藝に於ては、多く古典に則り、古人の作を模擬するを事とし、大自然に學ぶを知らず、現實を忘れ、空想に馳せ、徒らに故意の技巧を弄し、不自然の

粉飾を施して顧みず此の結果弊害百出して狹隘となり、陳腐となり、不自然となり、何等の色も香もなき皮屑淺薄の作物を出すに至れり。茲に於てか、自然主義なる物勃興して、一切の因襲的虚飾を捨て、傳說的技巧を斥け、自然を學べ、而して不自然の形式と故意の粉飾とを擺脫すべしと説くや、新進氣鋭の作家は之を實行せんとして、近世の科學的新知識を應用し、幾多の研究を積み、慘憺たる努力を経、遂に描寫の手段方法を改善し、以つて新技巧を完成し、内容に妥當する新形式を建設するを得たり。之を自然主義の正當なる第二方面とす。

三、取材の範圍の擴張

此の外舊文藝は主として、上品、高尚、優美、偉大等を目とし、動心驚魄の事件や、張目駭耳の現象や、又は稀有の事、珍奇の事等をのみ題材とし、上流社會を寫し、光明的方面を畫くを常とする傾ありき。然るに近代に至り、勞働者、農夫等の下層社會を描寫し、又は日常茶飯裏の事件や平常の狀態にある人生の歴史を取り、之を現實のまゝに直寫して、然かもその内に無限の趣味と意義とを含蓄せしむるを得るに至りぬ。

又自然派の人々は暗黒面に筆を染めて、或は男女が飲酒色欲貧困等に圍まれ、

如何に墮落するかを語り、或は文明と云ふ虚偽の衣を剥ぎ去れる赤裸々の人間を寫し、その野性獸性原始性を描き、又は醜惡を直寫す。然るに此等の作品と雖も描寫の如何によりては、賞翫者に辛辣凄愴不安恐怖悲痛等の美術感情を興へ得る物なり。故に唯暗黒面を寫すとの廉を以つて、此等の作品を非とするは、大なる偏見と云はざる可からず。加ふるにこれ等の描寫は必ず經濟政治社會道德等の根本問題に觸る物とす。されど勿論自然派の人々は此の如き人生の根本問題を無解決のまゝに描寫すると雖も、然も無解決の描寫中に、無限の意味を寫し、以つて人生の新意義又は新理想を窺はしめ、又は考へざるを得ざらしむ。

故に日常卑近の狀態を寫すとも又は暗黒面を描くとも描寫の如何に依りては、皆意義ある文藝となるを得べし。而して此等の方面に筆を着けて著しく取材の範圍を擴張するを得たるは、全く自然派の功勞に歸せざる可からず。之を自然派が文藝に貢獻せる第三の方面とす。

以上敘述せる所を綜合せんに、自然主義の生命とし、モットーとする「自然の眞寫なる物は、一方に於て、(一)活人生に觸れ、(二)新技巧を完成し、(三)取材の範圍を擴張

するの功あり。然るに、(一)活人生に觸る云々は、偶々意義ある内容と云ふ規範に、一致する一條件に過ぎず。故に自然主義の有する此の長所は第二規範中に包含せらる。(二)新技巧の完成云々は唯形式と内容との調和と、複雑中の統一と云ふ二規範の實現方法を刷新せるに外ならず。而して(三)取材の範圍を擴張す云々は、意義ある内容の新領土を開拓せしに留まる。即自然の眞寫云々中には特に美の規範とするに足る新要素あるを見ず。

(g) 快樂説

加ふるに、自然の眞寫なる物は他方に於て、蕪雜主義となり、無意義主義となり、肉欲主義となり、混沌主義となるの弊を伴ふ。之に依りて見れば、自然の在りのまゝの直寫云々は、美の獨立せる根本的規範とするに足らずと云はざる可からず。(g) 快樂説 美的態度は非常なる快樂に依りて充さるゝ事は、藝術家賞翫者又は哲學者等に依りて、普く認められたる事實にして、或美學者の如きは、大に此の快樂を尊重し、快樂を以つて美の規範となさんとせり。世に此の派の人を目して、快樂派の美學者と云ふ。フェヒネル、マーシャル等の書を讀めば、直に快樂を以つて美の研究の出發點となすのみならず、尙快樂その物の中に、美術の理想を見出

さんとするを認む。

然し吾人の説は大に快樂派の解釋とは異なる。吾人は快樂が美的規範に列するの價值をすら否定する者なり。故に快樂を以つて、唯一の根本的標準と主張する快樂派の説には、絶對的に反對せざるを得ず。元來快樂は第二次的現象なり。美的規範が實現せられたる結果として起る現象なり。

美的觀照と享樂とは、多方面なる精神作用の調和的活動なり。先づ第一規範によりて觀照と感情との二が、互に渾然たる融合一致をなして調和的に活動す。此の結果として、吾人は非常なる快樂を得。又觀美態度中には、意志作用も知識作用も大に現はる。然し第三規範の實現せらるゝ結果、實行又は認識の方面に偏する憂なく、又現實的の努力や、勞力が排除せらるゝが故に、快樂を妨害する物がなくなる。又第四規範に依りて、理性の形式的統一と云ふ要求が満足せらるゝが故に、此の結果として、又快樂が起る。此の外第二規範に依りて、吾人の思想は感情を伴ひつゝ、個體より價值ある範類へ擴張して行く物なるが、之れも吾人の要求する心的經過なるが故に、此の要求の満足せられたる結果は、吾人の心に快樂を喚起

す。かく此等の規範の實現せられたる物は、皆人性に固有なる根本的要求に満足
を與ふ物なるが故に、此等の四規範は強烈深遠なる快樂の源泉なりと云ふを妨
げず、之に依りて見れば、快樂なる物は上述の四規範に相當する四の心理的活動
の結果として起る二次的現象換言すれば、結果現象なりと云はざる可からず。
故に美的規範を快樂の上に建設せんとするよりも、寧ろ快樂の源泉たる心的活
動の上に建設するが正當の順序なりと謂つべし。

此の外、吾人は吾人の經驗に照して鑑んに、吾々は美術文藝を目して、唯に快樂
を與ふる物とは考へず。若し吾人が美的活動は單に快樂を得んが爲めなり、換言
すれば快樂その物が吾人の第一目的なりと主張せば、それは明かに吾々の内的經
驗に反す。吾々が茶番狂言を見んが爲めに、劇場へ行くならば、全く快樂が主要目
的なりと云ふを妨げずと雖も、之に反し、ハムレットを見んとか、又は井ルヘルム
テルを見んとして、劇場へ行く場合や、又はゲーテのエルテルを讀み、ジャンパウ
ルのタイタンを讀む場合に、吾人の期待する所の物は、決して單なる快樂その物
には非ず。寧ろ偉大なる物崇高なる物神聖なる物高尚なる物を知り且つ感ぜん

二、四規範の
統一

事を要求する物なり。即吾人は偉大なる作品中に包藏せらるゝ意^〇義^〇や價^〇値^〇を經
驗せん事を期待し、且要求する物とす。勿論此の價値ある物の經驗は、同時に吾人
に満足愉快等の感情を與ふると雖も、然し此の快樂を得んとする希望が、吾人を
して崇嚴なる美的靜觀をなさしむる直接の衝動には非ず、之に依りて見れば、快
樂は吾人が美的態度に於て獲得せんとする所の眼目には非ず。快樂は只美的態
度中に於て、自然に經驗せらるゝ結果現象にして、決して吾人をして高尚なる美
的靜觀をなさしむる第一目的に非ず。故に美的規範を快樂の上に建設せんとす
るは、不當なりと云はざる可からず。

此の外曰く簡潔、曰く婉曲、曰くコントラスト、曰くハーモニー、曰く餘韻、擬人、遞
層、遞減、抑揚、頓挫等各美術の枝葉に亘り、末節に走れる、小法則小規矩等に就ては
又夫々の研究を要す。故に今茲に、一々述ぶる事を得ざれども、孰れ皆上述の根本
的規範に從屬する物にして根本的規範とするに足らじ。故に吾人は大小百般
の美的法則は、悉く上述の根本的規範中に包攝し得る物と信ず。

(二) 四規範の統一。 美の諸法則は皆四規範中に調攝し得る物として、扱此の四

規範は各自孤立して相互の間に何等の脈絡もなき物なるか。上述の説に依れば美は各々獨立せる四の根本的規範の體現せられたる物なり而して四の規範の間には全く統一する物なしと云ふ事になるが若し四の規範が相孤立して統一を失へる物ならば此の孤立的四規範の具現せられたる美は何故に四分五裂して統一を缺ける物とはならざるか。美その物は素朴なる享樂者にも陶冶せられたる鑑識者にも同じく一の完全なる統一體として感ぜらる。美の四法則が全く孤立せる物ならば此の四法則の具現せられたる物の集合體たる美は支離滅裂の物とならざるを得ぬ筈なり。然るに事實は全く之に反す。美の各部分は一に堅く結合し一致し一の完全なる有機體的統一體なりと云ふ印象を吾人に與ふ。之は何故なるかと云ふに美の規範は夫々獨立の心理的源泉より起れる物なりと雖も元來人類の精神活動は統一的の物なり。即精神活動に於ける各々の現象は假令獨立の物の如くに見ゆると雖も精神の統一作用に依りて互に關係する物なるが故に四の美の心理的源泉即人心の根本的要求は獨立の物なるが如しと雖も深く探らば相互間に何等かの關係なかる可からず。即此の四の心理的源泉

第一源泉の水脈

の根柢には更に心理的水脈ありて此の水脈を辿り行かば最後に四源泉を結合し統一する所の或物を發見すべき筈なり。然らばその統一的の或物とは何ぞと云ふに吾人の研究日尙淺く加ふるに不才微力容易に窺ひ知るを得ずと雖も吾人は九重の雲深く神秘の幕をとざせる遠かた彷彿として物色を辨ぜざる天の一方にその統一的の或物を想見するが如き感なきにしも非ず。思ふに吾人の想見する所の或物はよく探り見れば根も葉もなき妄想に過ぎざるやも知れず。されど多少の信念を有す。先づその或物とは何かと云ふに之を心理的に云現せば「高尚なる精神の調和活動」と云ふ事なり。

第一源泉の水脈。扱吾人は次に四の源泉の根柢に横はる水脈を調査せざる可からず。先づ第一源泉の底を覗いて見るに、觀照と感情との一致は分れて知覺と表象と感情との一致となる。

表象……感情
注意——知覺
………感情

吾人が美の對象を觀照するには、先づ(一)注意を對象に注ぎて、(二)知覺す。

此の場合に、鮮やかなる色、美しき音等に依りて、感官の末端神経が刺戟せらる。然るに、鮮やかなる色や美しき音は特に撰擇せられたる物なるが故に、印象力が強きのみならず、稀に用ふる神経を刺戟す。故に吾人に大なる感動を與ふ。此の場合には、知覺より直に表象を経ずして感情が起る。

次に知覺が他方に於て(三)表象を喚起し、次いで感情を刺戟す。此の場合に、知覺に次いで、色々の想像や聯想や類推等の知的作用が活動して感情を誘起す。而して此の心的經過の初より終り迄、注意作用が活動す。茲に吾人の注意を要すべき事あり。即此の心的經過中、注意と云ふ意志活動が弛緩すれば、觀照が起らず。觀照が起らざれば、感情が起らず。感情が起らざれば、注意が弛む。故に注意と云ふ意志作用と、觀照と云ふ知的作用と、感情との三は、互に相提携して活動するを要す。之に依りて見れば、觀照と感情との一致と云ふ事は、換言すれば、知情意の活動が調和せざるべからずと云ふ事になる。即觀照と感情との一致と云ふ事は、(知情意の調和活動)と云ふ事なり。

觀照と感情との一致……知情意の調和活動

第三源泉の水脈

第三源泉の水脈。第二源泉は都合に依り後廻しにし、第三の源泉を窺はん。第三の源泉とは、假象感情と云ふ事なり。假象感情とは、現實性を抽捨せる感情を云ふ。假象感情は第一強度弱し。故に吾人は悲哀、恐怖、憤怒、驚愕、憎惡、心配愛情、同情、歡喜等の感情に堪へ得るなり。即感情が吾人の「耐えうる力」に對して調和的活動をなす。

又實感は感動力が猛烈なる上に、執着力極めて強く、時によりては、一生涯の間も繼續す。失戀の苦痛は此の一例なり。然し假象感情は執着力弱し。此の結果、急激迅速なる變化代謝に應ずるを得。即一感情のみが跋扈して、他の感情を壓倒する事なく、各種の感情が調和的に活動す。以上の二は假象性が感情の調和的活動を助くる一方なり。此の外、假象性は他の方面に於て、觀照と感情との一致を助く。先に假象性を論究せる所にて述べしが如く、美的態度が假象性を有するが故に、吾人は美的靜觀の際、不羈不束にして無關心なる超世間的態度を取り、靜かに落着いて事物を對觀するを得。此の結果、現世的の欲望や利害や又は運命や或は道徳科學宗教哲學等の要求の爲めに觀照と感情との調和活動が妨害せられず、之

を假象性が精神の調和活動を助くる他の一方面とす。

假象性

………感情の調和活動を爲さしむ。
………觀照と感情との一致即知情意の調和活動を助く。

第四源泉の水

第四源泉の水脈。次に複雑中の統一と云ふ第四源泉の底を探らん。複雑中の統一とは、先に述べしが如く、一、複雑中の形式的統一、二、複雑中の内容的統一、とに分る。一の形式的統一は、吾人の理性をして統一的活動をなさしむる物なり。此の理性の統一的活動と云ふ事は、理性の調和的活動と云ひ換ふるを得。元來統一とは、各部分の親密なる結合を云ふ。然るに此の親密なる結合はやがて調和なり。故に調和と統一とは同じ概念なり。第二の内容的統一に於ては不必要にして、内容の調和を破る人や物を省き、思想感情の統一を計る物、即思想感情の調和を計る物なり。

複雑中の統一

形式的統一—理性の統一的活動—知識の調和的活動

内容的統一

………思想の調和的活動
………感情の調和的活動

第二源泉の水

第二源泉の水脈。最後に第二規範の意義ある内容と云ふ物を調べん。此の規範を心理的に云へば、「個體より、感情的見地より見て價值ある範類へ、感情を伴ふ思想が擴張す」と云ふ事なり。此の要求は明かに、「個體より價值ある範類へ擴張する」と云ふ事、と感情との調和的活動」と云ふ事、を意味す。茲に注意すべき事は、價值ある範類と云ふ事なり。作品中の人物事件等が、吾人に對して價值ある物、意義ある物、高尚なる物を代表して、始めてその作品が深刻なる感情、深遠なる意義、崇高なる品位、偉大なる價值を得る物とす。文藝は只之に依りて、遊戯三昧に墮落するを救はれ、玩弄物と同一視せらるゝを防ぎ得るのみ。即價值ある範類と云ふ物は、作品に高尚なる性質を賦與する物なり。従つて、此の如き高尚なる作品を賞玩する吾人の感情を伴ふ思想の活動、換言すれば、知情の調和活動、その物が、高尚なる性質を得るは明かなり。此の如き高尚なる知情の調和活動は、高雅なる人格の士の要求なり。理想的に完全なる主觀の要求なり。高尚なる精神は、此の如き高尚なる内容を有する作品に對してのみ、知情の調和活動をなし得るに過ぎず。此の反對に、陋劣なる内容を有する作品は、決して高雅なる精神をして、調和的活動をなさし

ひるを得ず。

故に第二規範の心的経過を簡單に『高尚なる知情の調和活動』と云ふを得べし。先にも述べしが如く、此の如き心的状態は獨り美的態度にのみ特有の物には非ず。科學哲學等の研究態度は之と同じされど之は文藝をして、神聖なる物高尚なる物とならしむる必要條件なりとす。

意義ある内容：…高尚なる智情の調和活動

以上述べ來れる所を表にして掲ぐれば、左の如し。

一、觀照と感情との一致……………(1) 知情意の調和活動

二、意義ある内容……………(2) 高尚なる知情の調和活動

三、假象性……………(3) 感情の調和活動を助く

……………(4) 知情意の調和活動を助く

……………(5) 知情の調和活動を助く

……………(6) 知的調和活動

……………(7) 思想の調和活動

四、複雑中の統一

形式的統一

(7) 思想の調和活動

〔内容的統一〕

(8) 感情の調和活動

*假象性は先の節に於て(假象性の目的論的基礎を論ずる場合に述べたるが如く、第二規範を助くる物なり。故に假象性は知情の調和活動を助くる物と云ふを得べし。

以上(8)個條は、吾人が四の心理的源泉の底を探つて得たる水脈なり。然るに此の八個條の水脈は、悉く精神作用の或部分の調和的活動と云ふ事を意味するを見る。

元來調和活動には、同時的の物と繼續的の物との二あり、同時的の物とは、各要素が同時に起つて、互に調和する物にして、繼續的の物とは、相繼續して起り、互に調和する物を云ふ。例へば、二色に共通の灰白色を與ふれば、同時的の調和色となり、二音に共通の部音オクトを與へて、同時に鳴らせば、同時的調和音が成立す。此等の例は、二要素が内的に親密なる同時的結合統一をなして、調和せる物、即同時的調和の例なり。第二の繼續的調和とは、何かと云ふに、多くの音響を繼續的に鳴らして、

調和の種類

八ヶ條の調和活動

各音響間に内的に親密なる關係ある場合には、メロディーとなる此のメロディーは音の繼續的調和の一例なり。

扱、上述の八個條の調和活動は、此の二の調和の孰れに屬するかと云ふに、先づ(1)の知情意の調和は同時的調和をなして、時間的に連續し行く物なり。(2)の知情の活動も、知情が互に提携して調和的に活動する物なるが故に、(1)と同じく、同時的調和活動なり。(3)の感情の調和、之は二に分る。(イ)吾人の耐え得る力との調和(ロ)感情と感情との調和。(イ)は同時的調和にして、(ロ)は繼續的調和なり。(4)知情意の調和活動を助く云々は、同時的調和活動を助くる物なり。(5)に假象性は第二規範を助くる物なるが故に、假象性は知情の同時的調和活動を助くる物と見るを得。以下の(6)(7)(8)は藝術の種類に依りて同時的ともなり、又は繼續的ともなる。文學又は音樂の如き時間的藝術にありては主として繼續的調和なれど、繪畫彫刻建築の如き空間的藝術に於ては、主として同時的調和なりとす。

八ヶ條の調和活動の綜合

次に吾人は此の八ヶ條の水脈を潜つて四源泉を結合する或物を究めんとする物なるが扱、上述の八ヶ條を綜合して見るに、吾人は容易に此の八ヶ條を「精神

の調和活動」と云ふ物に歸するを得べし。改めて云ふ迄もなき事なるが、(1)の注意と云ふ意志作用と、知覺聯想想像類推認識思想等の知識作用と、感情作用との三の調和活動は精神の調和活動の一部分なり。(2)の「高尚なる」知情の調和活動も、同様に精神の調和活動の一部分に外ならず。(3)と(8)とは皆感情の調和活動にして、(4)は精神の調和活動を助け、(6)は知的調和活動をなす物なり。(5)は知情の調和活動を助く。かく八ヶ條は皆精神の調和活動を爲さしむる物又は助くる物なり。

茲に注意すべき事は、(2)の「高尚なる」と云ふ事なり。高尚なると云ふ性質は下等なる知情の調和活動を否定する物なり。換言すれば、「感情的見地より見て價値なし」と云ふ範類へ擴張する「知情の活動は假令調和活動なりとも、高尚雅典なる主觀に取つては、美的活動に非ず」と云ふ事を意味す。吾人の思惟する所に依れば、此の「高尚なると云ふ性質は文藝に莊嚴端麗なる品位を賦與する唯一の條件なるが故に、輕視するを得ず。故に吾人は高尚と云ふ性質を「精神の調和活動」に添加して、美の心理的源泉を統一する物は「高尚なる精神の調和活動」なり」と云はんと欲する者なり。

文藝の特色

此の如き精神の調和活動を十分に爲し得る物は、獨り觀美態度あるのみ。科學や哲學に於ては、冷かなる概念のみが支配し、アレキサンダー道德にあつては、張り裂ける程外部に向つて緊張する意志のみが勢力を占め、宗教にあつては、内部に向けらるゝ感情のみが跋扈す。即宗教道德科學哲學に於ける態度には、或は感情のみが跋扈し、或は意志のみが支配し、或は理性のみが跳梁して、精神の調和的活動を十分に遂行するを得ず。之に反し、觀美態度に於ては、各精神作用が、同時に又は繼續的に共同一致して、完全なる調和活動をなす物なり。之は文藝の一大特色にして、文藝は此の點に於て、科學哲學乃至宗教道德以上の價值を有する物と云ふを妨げず。此の如き高尚なる精神の調和活動は、吾人が文藝に對する一大要求なり。吾人が卓越せる名什傑作を靜觀し終る時には、此の一大要求が満足せらるゝ物とす。今此の要求を精神内部に起れる缺陷と見れば、此の缺陷を補充する物は文藝の靜觀なり。即精神の調和活動に外ならず。前者を主動の力とせば、後者は受動の力なり。吾人が卓越せる作品を靜觀し了るや、吾人の心が、恰も黒風一過、寂然として風ぎ渡れる海の如く、平穩和靜の感と、白雨一去、轉然として晴れ亘れる空の如く、

意志活動と觀美態度との關係

光風霽月の趣とを得るは、一に此の主動と受動との二勢力が調和せるに依らずんば非ず。靜觀中に起る精神作用の同時的又は繼續的調和活動は、動的調和なれど、此の靜觀の完了と共に起る主動力と受動力との調和は、靜的調和なり。故に文藝靜觀の心的態度は、精神が同時的又は繼續的に動的調和活動をなしつつ、靜的調和を以つて終る物と云ふを得。之は文藝に對する絶對の主觀的標準なり。理想的作品は對觀者に、此の如き精神の調和活動を與ふる物ならざる可からず。茲に附言するを要する事は、觀美態度は精神の調和活動なりと云ふものゝ、精神のあらゆる作用を網羅せる調和活動に非ざる事なり。八ヶ條の條文を見るに、感情が最も多く調和的に活動す。此の事は吾人の美的經驗に鑑みるに、少しも吾人の經驗と矛盾せず。

次に知的調和活動がやゝ多く、最も少き物は意志活動なり。かく意志活動の極めて少きは、何故なるか。美的靜觀以外の或目的を實現せんとする意志は、全く美的態度と調和せざるが爲めなり。哲學的又は神學的に説明せば、意志は現世的の物なり。老子の所謂無爲又は無欲恬淡の域に入つて、始めて現世的煩累より解脱

するを得るのみ、恐らく超世間的の天國に在つては、實現の意志欲望等は斷滅せらるべし。シルレルが人は遊戲中に於てのみ、眞の人なりと云へる所以は人は遊戲に於ては、利害關係の世界より離脱して、意志の壓迫より逃れ得るに依る。

意志は努力なり、苦痛なり、現世的の物なり、而して心の平和を破り、精神活動の調和を亂す。然るに、美的態度は靜觀なり、享樂なり、出世間的の物なり、心の平和を保つ物なり、精神活動の調和なり、前者は醒寢としてあせる、されど、後者は從容として返らず、一は殺氣紛々たれど、他は和氣霽々たり、一は秋風肅殺の性質をそなへ、他は春風胎蕩の風情を持つ。故に兩者は氷炭相容れざるものにして、實現の意志は到底美的態度と一致するを得ざる物なり、唯注意の意志や又は美的感情中に於て、緊張、弛緩、興奮、沈靜等の形式をなして活動し、その結果、美的感情を強むる所の美的意志等のみが美的靜觀中に現れて、他の智情と共に調和的活動をなし得るに過ぎず。

美術以外の目的を實現せんとする意志活動は、上述の如く觀美態度と到底調和し得ざれど、努力の程度が弱められて、意志の活動が調和的になれば、美的感情

を伴ふ事あり、その最もよき例は舞踏とす、舞踏は運動の美術なり、此の運動は意志活動の外部に表れたる物に外ならず、此の外、散歩旅行運動の遊戲等は適度の意志活動なり、即意志の調和的活動なり、言換ふれば精神の一小部分の調和活動なり、此の結果、美的感情を伴ふ。

智識活動も之と同様に調和的に働く場合には、美的情緒を喚起す、例へば科學、數學殊に哲學に於て、幽玄なる思索、冥想に思を凝らして知的活動が着々と進行する場合、は、美的に近き感情起る、此の外、宇宙の眞理を得て、自分は之にて満足なりと云ふ所に到達せる場合にも、美的情緒に近き感情起る、先の場合には、知識が動的調和活動をなし、後の場合は、靜的調和活動を持つて終る、故に精神の調和的活動の一局部と見做すを得、此の結果、美的に近き感情を伴ふ事となる、茲は哲學の終局點にして、哲學が美的感情と連合する所とす、此の點より見れば、眞は吾人の精神に對して調和的の物にして、且つ美に接近せる物と云ふを得。

翻つて道德の方を見るに、アレキサンダアと云ふ人は善は、エキイリブリウム又は平均を保てる物と云ふ、アリストオトルは中庸なりと説く、グラインの自我

知的活動と美的態度との關係

眞と調和

善と調和

實現も、個人と社會との調和と見るを得、自他の調和は善なり、個人意志と社會意志との調和は善なり、良心の命令と調和する行爲も善と見るを妨げず、吾人が良心の要求に従ふ時に一種の快感を覺ゆるは、吾人の意志活動が良心の要求と調和せる爲めなり、此の結果、善行には美的感情に近き情緒が伴ふ、此の點より見れば善は吾人の精神の調和とも、自他の調和とも又は個人意志と社會意志との調和とも見るを得、即善は一種の調和なり、然るに此の善は美感に近き情緒を伴ふ物なるが故に、善と美とは一致する物少くとも接近する物なり。

之に依りて見れば、眞と善とは共に調和的の物にして、且美に近づく物なり、大膽に云へば眞と善とは共に調和的の物にして、美と一致する物なり、然し吾人が科學的態度を取れる間は、眞と善とが調和的の物にして、終局に於ては此の眞と善とが美に一致すと云ふ事は、到底證明するを得ず、されど此の事が假りに認容せらるるとせば、美の内容中、最も高尚なる内容換言すれば、至大至高の意義ある内容は、此の客觀的又は哲學的方面より調和的内容なりと云ふを得べし。

意味ある内容は調和的内容なり

此の外先にも述しが如く、高尚なる内容のみが高雅なる精神に調和的活動を

與ふ、賤劣醜怪なる内容は、決して完美なる主觀に精神の調和的活動を與へず、吾人は此の意味に於て、意義ある内容は高雅なる精神に對して、調和的の物なりと云ふを得、故に此の主觀的又は心理的方面より吾人は意義ある内容は調和的の物なりと云ふを得。

吾人は次に『高尚なる精神の調和活動』と云ふ美の主觀的規範を客觀的規範に轉換せん。

(三) 客觀的規範へ主觀的規範の轉換 扱、高尚なる精神の調和活動と云ふ主觀的規範を客觀的規範に轉換すれば、如何なる物となるかと云ふに『調和』と云ふ事即之なり、吾人は完全なる文藝は、形式の調和と内容の調和とを保ち、更に形式と内容との調和をなせる物ならざる可からずと、主張する者なり、吾人がかく主張する理由は何ぞと云ふに、上述の四規範は皆吾人の主張する調和說中に調攝するを得ればなり、先づ第四規範を見るに、之は(甲)形式的調和と(乙)内容的調和となる。(甲)の形式的調和は吾人の所謂形式的調和をなす物にして、(乙)の内容的調和は内容の調和をなす物なり、第二の意義ある内容は先に述べしが如く、心理的方面

三、客觀的規範へ主觀的規範の轉換

より見れば、高尚なる精神に調和活動を與ふる物、即内容の調和せる物なり。第一規範は云ふ迄もなく、内容と形式との調和に外ならず。残りの第三規範の假象性は第一に形式と内容との調和を助く。此の事は先の假象論中に述べしが如し。第二に内容の調和を助く。此の事も、第三規範の目的論的基礎を論ずる場合に述べたる如く、假象性は第二規範を助く。即高尚なる内容の調和を助くる物なり。此の外、假象性に依りて、吾人の感情が現實性を抽出せらるる故に、感情が調和的となる。此の結果、假象性は作中に内容として包含せらるる、感情を調和的の物となす。故に此の方面よりも、内容を調和的になすと云ふを得べし。

以上述べ來れる所に依れば、美の四規範中の第一は内容と形式との調和を計り、第二は内容の調和を爲し、第三は内容の調和を助け、更に形式と内容との調和を助く。而して最後に第四は形式の調和と内容の調和とを爲す。故に美の四規範は皆夫々調和の或部分を爲すもの、又は助くるものと云ふを得。換言すれば、調和と言ふ唯一の絶對的規範が、分派し化成して、形式と内容との調和となり、意義ある内容となり、假象性を要求し、複雑中の統一となる物と思惟するを得べし。

形式の調和第四規範
内容の調和第二規範
第三規範
第四規範

形式と内容との調和第一規範
第三規範

第六章 批評論

論一、批評有用

(一) 批評有用論。吾人の觀美態度中先づ起る物は觀照にして、次に享樂となり、批評となる。此の批評を下すには、準備として、觀照と享樂との二過程を経るが必要なり。此の美的判断に就ては、第四章にその大體を述べしが、尙標準論を述べたる後に非ずんば論究するに不便なりと云ふ事情の下に、尙云ひ殘せる事あるが故、その事を茲に述べて、此の書の結論とせん。

既に第四章に述べしが如く、正確なる美的判断を下さんとするは、非常に困難なり。かく批評難を來たす原因には二あり。一を外的原因と云ひ、他を内的原因と云ふ。外的原因は更に分れて、(イ) 美の標準の不完全、(ロ) 批評家の資格の缺乏、之は更に分れて、(ハ) 觀照と享樂との不完全、(ニ) 美の法則の體現せられしや否やを看破する能力の缺乏、(ヘ) 過大視過小視の弊となる。

内的原因は、美的判断に感情の必要なる事なり。かく内外の困難あるが爲めに、美的價値の判断は、人に依りて異り、同一作品に對して、或は是とし、或は非とし、歸一する所を知らず、かく批評が區々なる爲め、批評無用論を唱ふる消極論者や、批評不可能論を叫ぶ悲觀論者が起るに至る。然し批評は無用の物にも、將た不可能の物にも非ず。

何故に無用には非ざるか。云ふ迄もなく、批評家は(一)作品の美點長所を世人に知らしめて讀む可き物と讀む可からざる物とを示し、社會一般の趣味を高めて、その墮落を防ぎ、眞の美を味はしむると共に、(二)又短所や缺點を指摘して、作家を指導するの天職を持つ。(三)此の外、一般の賞翫者も、文藝の創作家も、乃至批評家自身も、作品の優劣及び優劣の理由を知らんとする要求を有す、即吾人は或作を美と感じたれど、そが果して正しきや否や、又は美と信ずるがその理由は如何と云ふ疑問を解決せんと欲する者なり。然るに此の要求に満足を與ふる者は批評家を措て他に求む可からず。此の三が批評をして有用ならしむる理由なりとす。

(二)批評可能論。然し如何に有用なりとも、眞の批評が不可能ならば、致し方な

論二、批評可能

かるべし。批評は果して悲觀論者の叫ぶが如く、不可能なりや、非ず。或程度迄は可能なり。勿論理想的完全なる批評は或は不可能ならん。されどそれに近き批評はなし得る物なり。批評難の原因には數多あり。先づ外的原因の一に、

(甲)美の標準の不完全。と云ふ物あれど、吾人が前章に論じたる所によれば、美の標準はほゞ一定せる物と見て差問なし。上述の美的規範は吾人々類の心的事實を基礎として、科學的に建設せられたる物なるが故に、確乎不動の價値を有すと斷言するも敢て獨斷見に非るべきを信ず。若しも科學的建設法にして誤らざらば、されど、勿論上述の四大要求は、人々に依り、教育境遇經驗稟賦等に差あるが爲め、多少の差別はあれど、此の要求は人性の根柢に潜在する所の物にして、精神が完全なる發達を遂げ人格が圓滿なる發展を爲さば、必ず現れざる可からざるものなり。即此等の心的事實は不變化の物にして、苟も人類が喜ばしき時に喜び、悲しき時に泣き、花を愛し、月をめて、莊嚴なる日没、皎々たる月夜、崇高なる山嶽、雄大なる海洋に對して、偉大なる美的感情を得る間は、牢乎として、抜く可からざる永遠の物なり。此の如き確乎不變の根據の上に、上述の美的規範は科學的に建設せ

られたる物なるが故に、その價值その効力は若しも吾人の科學的建設法に誤なしとせば、疑ふ可き餘地を含まず。故に批評難に於ける外的原因の一は之によりて或程度迄除去し得たりと云ふを妨げず。

(乙) 批評家の資格の不完全。之は更に分れて、(a) 觀照と享樂との不完全。元來美的判斷は趣味の判斷とさへ云はるゝ物にして、確實なる判斷を下すには、是非感情の助を借らざる可からず。然るに美的享樂を不完全にする原因に、又多くの物あり。此の多くの原因は直接に享樂を不完全にし、その結果、間接に批評を不完全となす。かく間接に批評を不完全となす原因は何かと云ふに、(一) 享樂の前に有する實際感情。(二) 注意の弛緩。(三) 賞翫する才能の缺乏。(四) 美の法則の影響。(五) 享樂中に起る實際感情又は實際的感情。(イ) 戀愛。(ロ) 宗教。(ハ) 道徳。(ニ) 好奇心。(ホ) 主義的感情。(ヘ) 虛榮心。(六) 所謂批評家的態度及び研究的態度等とす。

(b) 美の法則を作品中に發見する事の不完全。

(c) 過大視過小視。

然し此等の (a) (b) (c) は主觀が完全ならば、全然消滅すべき物なり。假令主觀が理

想的完全なる物に非ずとも、それに近き發達を遂げ得たる者ならば、此等の批評難の原因は大に其の勢力を失ふ物とす。次に、

内的原因とは何かと云ふに、批評に際し趣味の後援を要すと云ふ事なり。然るに此の趣味性は個人的にして、且盲目的の物なるが故に此の影響を受くる批評は又個人的とならざるを得ず。然し此の困難も主觀が完全となれば、全く排除するを得。假令理想的完全の域に達せずとも、それに近き主觀ならば、此の困難の大部分を排除するを得べし。加ふるに若し此の際、客觀的標準の後援を借らば、肯綮に當れる批評を下し得るや疑を容れず。故に此の批評難の原因も、趣味の開發せられたる人が確實なる美の標準を有する時には、少しも恐るゝに足らざるなり。之に依りて考ふるに、批評をして困難ならしむる一切の要件は、皆或程度迄は排除し得る物なるが故に、徒らに悲觀論者の如く批評不可能論を叫ぶ者は、芒の穂に恐るゝ落武者と撰ぶ所なしと云はざる可からず。

(三) 批評の種類。かく批評は有用にして且可能なるが此の批評には多くの種類あり。一は古典的批評。二は感情的批評。三は美學を基礎とする批評なり。

類三、批評の種

(a) 古典的批評

(a) 古典的批評。之は歴史上最も古き物なり。此の派の人々は傳説的の標準に照して、作品の價値を判定す。和歌のち師匠様や俳句のち宗匠様の批評なる物は、大概之に屬す。彼等の金科玉條として、尊信する標準は和歌は、「二段切れ又は三段切れなるを要す」古語雅言を用ひよ、「調子は慣例に依るべし」俳句には季を入れざる可らずと云ふが如き物なり。而して彼等は此の如き尺度に照して、作品の優劣高下を定むるを常とす。

歐洲にても十七十八世紀頃の文藝は、大體所謂古典的なりき。而して批評も同様に狹隘陳腐にして多く偏頗なる形式上の法則に拘泥せり。然し宇宙の事々物々は長く一所に停滯するを許さず。十九世紀の初頭より、社會の各方面に革新の氣運が現れしと共に批評界にも亦舊式の批評より脱出して、新しき天地に入らんとする自由運動が現れたり。此の運動の結果起れる物は即感情的批評なり。

(b) 感情的批評

(b) 感情的批評。とは作品の長所を發揮し美點を解説し作品の包含する複雑なる妙味を分解し綜合し、以つて、一般の賞玩者に、自己の感得せる印象を傳ふるを主とし、作品の價値を裁斷するを避け、又はドグマタイズするを嫌ふと號する

一種の批評を云ふ。

此の派の者は、從來の推理的傾向に反對して、感情を重んぜよ、牽強附會を斥けて印象を先にせよ、缺點の穿鑿をせず、美點の發揮を勉めよ、叱責的態度を去り同情を以つて作品を賞玩せよ、趣味は寛濶なるべし、判斷は自由なるべし、と主張す。

十七八世紀の古典的批評はクラシカルなれど、感情的批評はロマンチカルなり。前者は推理的なり、されど後者は感情的なり。一は判斷の標準を客觀的に樹立せしに對し、他は主觀の、内心にある物として、明かに標準を制定せず。故に前者は客觀的批評なれど、後者は主觀的批評と謂つべし。

古典的批評に於て、彼等が金科玉條として尊崇する所の標準が、狹隘陳腐にして且偏頗なる形式上の法則に拘泥する物なるが爲めに、その結果として、此の派の批評が、偏狹固陋探るに足らざる物となるは當然なりとす。然るに此の古典的批評にあき足らずとして、勃興せるロマンチックの感情的批評は如何。此の派の者は主張して曰く、美の客觀的標準は無し。故に唯主觀の心に依りてのみ、評價

し得るに過ぎずと。蓋彼等は文藝の靜觀に依りて得たる自己の印象を巧みに翻譯して、その作品の長所又は美點を感情的に説明せんとする者に外ならず。換言すれば自己の感得せる印象より批評の抒情詩を創作せんとするが彼等の理想なり。彼等は印象賞翫感情趣味を重じ、批評の自由を主張す。

此の如き批評態度は吾人が第四章に於て述べし所の美的判斷には感情が必要なりと云ふ要求を、十二分に充す物なるが故に、此の批評態度は、一面に於て大なる價值を有す。されど此の派の者が根據とする唯一の本城とも云ふ可き主觀の趣味が、若しも不完全なる場合には、如何に？ 趣味性は人に依りて異なる事尙容貌の同じからざるが如し。彼等は自から理想的完全なる主觀なりと、公言し得る資格ありや、勇氣ありや、將た權利ありや、假令公言し得る資格ありとも、如何にしてその證據を呈出しその理由を證明しうるか。此の證明は不可能に屬す。従つて此の派の批評には、群小を感壓するに足る權威なし。茲に於てか、批評界は亂世とならざるを得ず。即群小の跋扈となり、僻論の跳梁となり、異說紛々遂に統一する物無く、玉石混淆して孰れか是非、判別するに苦む。之は感情的批評が有す

主觀的批評と客觀的批評の比較

る缺點の一なり。加之、趣味が如何に完全なる物なりとも、その批評は是非善惡の理由を明かにするを得ず。故に此の批評は吾人の要求を滿さざるのみならず、作家を益すると云ふ批評の本務を果すを得ず。之を此の派が免るをえぬ弱點の二とす。假令似而非批評の跋扈は忍ぶべしとし且批評の目的を果す能はざるとも、尙恕すべしとするも、主觀が理想的完全なる物となるは至難中の至難ならずや。之が此の派の有する缺點の三なり。

主觀的批評と客觀的批評の比較。古典的批評と感情的批評とを比較して見るに、大體に於て、一は客觀的、他は主觀的なり。然し嚴密に云へば、兩者の差は甚だ漠然たる物にして、吾人は二者の間に截然たる區別を劃するを得ず。客觀的批評と雖も、作品に或標準を擬する前には、豫め賞翫せざる可からず。賞翫の結果は、必ず作のよしあしを感ぜしむ。佳し惡しを感じたる後に、其の佳き所以、惡しき理由を既成の標準に照して説明するが、多くの場合に客觀的批評家の取る徑路なりとす。之に依りて見れば、客觀的批評中にも、主觀の趣味性が働く物たるは疑を容れず。故に此の方面より見れば、又主觀的批評と云はざる可からず。

主観的批評に於ても、先づ作品を玩味し、佳しと感じたる物を佳作となし、悪しと感じたる物を拙作とする物なれど、此の場合に、主観的批評家は、標準を明かに客観に掲げず、即彼等は、客観的標準を明瞭に意識せず、又意識せんともせず。然し何等かの標準は必ず主観の心の奥に伏在する物なり。唯彼等は作品を識域外に在る此の無意識的標準に照して、或は傑作とし、或は駄作とするに過ぎず。元來標準なる物は先に述べたるが如く、主観の要求其の物に過ぎず。感情的批評家は自己の有する此の要求を明かに認識せずと雖も、必ずや此の要求を無意識の内に有する者なり。苟も完全なる主観たる以上は前述の四要求を有せざる可からず。此の四要求を有せざる物は完全なる主観と云ふ可からず。従つて感情的批評を下す資格なきなり。兎に角、感情的批評をなすの資格ある人は此の四要求を、少くとも無意識の間に有し、作品の静観に依りて、此の要求が満足せられたる時には、その作品を傑作となし、せられざる時には、駄作とするに過ぎず。故に主観的批評家と雖も、暗々裡に自己の心中に潜在する或標準に照して、評價する物に外ならず。

(c) 美學を基礎とする批評

要するに主観的批評も客観的批評も、所詮は同一作用なり。唯主観的批評は賞翫のみに依らんとし、客観的批評は標準にのみ頼らんとする者にして、一は表面をのみ尊しとし、他は裏面をのみ重しとするに過ぎず。

(c) 美學を基礎とする批評。主観が理想的完全に達せる者の評價は正鵠に中るを得、然し此の評價は、單に是とし、非とするに留り、何故に佳作なるかの原因、何故に劣作なるかの理由を明かに指摘するを得ぬが故に、讀者に満足を得へぬのみならず、作家を裨益するを得ず。之が主観的批評の第一缺點なり。加ふるに此の派の批評には權威なく、群小を統一しえず。之は第二弱點なり。又主観が理想的完全に達するは極めて難し。之が爲に唯主観の趣味のみによりて下せる判断は、往々肯綮に中らぬ事が多し。之を第三の缺點とす。此の三の缺點を補はんとするには、健全なる美學の教ふる標準に依りて批判せざる可からず。美學は美の法則を學術的に研究するを重大なる一目的とする物なり。換言すれば、美學は完全なる理想郷に到達せる主観の心中に埋没しをる標準を發掘して、如何なる者にも、明かに認識し得るやう客観に掲げ出さんとする物なり。而して現今既に或程度迄

は信頼するに足る標準を得たるが故に、最も多く信頼するに足る批評をなさんとするには、先づ十分に作品を翫味し、更に美學の教ふる標準に依り、一方に於ては主觀の缺點より起る誤謬を矯め、他方に於ては、作品の是なる所以非なる理由を明かにせざる可からず。此の批評態度は主觀的批評と客觀的批評とを併せ用ふる物にして、最も安全にして、最も多く信頼するに足る物なり。之を吾人は美學を基礎とする批評と云ふ。

(四) 批評界の二大主義の調和。批評界には古來より二大思潮あり、一は文藝は文藝の爲なりと主張する主義にして、文藝は文藝の法則、文藝の目的理想、即、美を體現せしや否やに依りて判断せよ、他より標準を借り來る勿れと云ふが此の派の中心の趣意なり。之は英國のマッシュ・アール等の唱へし説にして、唯美主義と云ふは即之なり。

他は文藝は人生の爲めなりと云ふ主義なり。此の派にては、眞と善と美とは同一の物と信じ、文藝は人生の眞理を宣傳し、人類の理想を啓示し、新文明新人生を豫言して、社會を此の理想郷に導く物ならざる可からずと主張す。その結果、作品

四、批評界の
二大主義の調和

の内容が人生の目的理想、即、眞と善とを具現せしや否やに依りて判断せんとするが此の派の主旨神髓なり。カアライル、トルストイ等の主張は之に一致す。人生主義と云ふは即之なり。

此の唯美主義と人生意義とは近代の批評界及び文藝界に併立する二大精神、二大思潮なり。されど此の兩者は、共に正しと雖も、又共に正しからざる一方面を有す。唯美主義は形式に重をおく物にして、前章に述べたる第一と第三と第四との規範をのみ重んじ、第二規範の意義深き内容を排斥せんとす。故に此の主義に依れば、文藝が人生に對して有する深遠なる意義と、偉大なる價值と、崇高なる品位とを失ひ、藝術が遊戯又は玩弄物と同一程度に墮落せんとするを救済するを得ず。

之に反し、人生主義は意氣ある内容にのみ重を置き、形式美を輕んずるの弊あり。此の結果、内容と形式との調和を害し、又時としては文藝の假象性を毀ふて、意志を刺戟し、認識作用を惹起すると云ふ危険を犯すに至る。

唯美主義は第一形式と内容との調和、第三文藝の假象性、第四複雜中の統一と

云ふ三の規範と相容るゝ物なるが故に此の點に於ては、唯美主義は正當なり。されど内容の深遠なる意義を無視するが故に、此の點に於ては不正當とす。之に反し、人生主義は意義ある内容を重視すると云ふ一方面に於ては正當なり。されど他の方面を輕視するが故に、不正當なり。要するに、此の二大主義は、共に半面のみ過重視して、他の方面を無視する物に外ならず。吾人は實に此の二の者の調和したる所に、文藝の極致を求めんとす。然らば此の兩主義の抱合せる物とは何ぞやと云ふに、前章に於て述べたる四の根本的規範の渾融せる物、換言すれば、高雅なる主觀をして精神の調和活動をなさしむる物、即それなり。客觀的規範を以て之を云ひ現せば、此の二大主義の調和せる文藝の極致とは、形式の調和と、内容の調和とを保ち、更に形式と内容との渾然たる調和を爲せる物に外ならず。

文藝論畢

✽製並附與論藝文✽

明治四十一年五月一日印刷
 明治四十一年五月四日發行

定價金四拾錢

著作
 所權有

著者 田中伊藤次

發行者 大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 石川金太郎
東京市京橋區四紺屋町廿六七番地

印刷所 英舍
東京市京橋區四紺屋町廿六七番地 株式會社 秀

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館



定價	
製並	製特
郵稅 冊金六拾五圓	郵稅 冊金八拾八圓
冊八拾七圓	冊五拾五圓
冊拾七圓	冊二十五圓
冊拾七圓	冊十五圓
冊拾七圓	冊十圓
冊拾七圓	冊五圓
冊拾七圓	冊三圓
冊拾七圓	冊二圓
冊拾七圓	冊一圓

總目録
 世界史
 地理學
 社會學
 經濟學
 政治學
 教育學
 宗敎史
 新學
 支那學
 農學
 醫學
 工學
 商學
 日語
 法律
 國語
 外國語
 國文
 算術
 物理
 化學
 生物
 衛生
 體育
 音樂
 美術
 勞作
 遊藝
 衛生
 體育
 音樂
 美術
 勞作
 遊藝

帝國百科全書
 世界史
 地理學
 社會學
 經濟學
 政治學
 教育學
 宗敎史
 新學
 支那學
 農學
 醫學
 工學
 商學
 日語
 法律
 國語
 外國語
 國文
 算術
 物理
 化學
 生物
 衛生
 體育
 音樂
 美術
 勞作
 遊藝
 衛生
 體育
 音樂
 美術
 勞作
 遊藝

近世美術概論
 佛敎美術史
 世界美術史
 近世美術史
 西洋音樂史
 支那文學概論
 日本文學史
 英國文學史
 世界文學史
 日本文章論

二百編ニテ完結

● 帝國百科	● 哲學	● 純正學	● 處世學	● 西洋哲學	● 新支那哲學	● 宗教哲學	● 佛敎哲學	● 儒敎哲學	● 心理學
● 哲學	● 純正學	● 處世學	● 西洋哲學	● 新支那哲學	● 宗教哲學	● 佛敎哲學	● 儒敎哲學	● 心理學	● 社會學
文學士 藤井健治郎君譯	文學士 井上圓了君譯	文學士 杉谷泰山君述	文學士 蟹江義九君著	文學士 岡島誘君著	文學士 中内義一君著	文學士 姉崎正治君譯	文學士 石原即聞君著	文學士 嶋川龍夫君著	文學士 速水混君著
● 近世心理學	● 倫理學	● 社會學	● 佛敎會論	● 社會學	● 社會學	● 社會學	● 社會學	● 社會學	● 社會學
文學士 德谷豐之助君著	文學士 松本孝次郎君著	文學士 高山林次郎君著	文學士 蟹江義九君譯	文學士 井上哲次郎君著	文學士 木村應太郎君著	文學士 德谷豐之助君著	文學士 嶋川龍夫君著	文學士 十時彌君譯	文學士 淀野耀淳君編

文學士 有馬祐政君著

藝術論

原著トルストイ伯の文豪たるや久矣、而して其文豪たる所以は、寧ろ小説家として然るに非ずして實に文明批評家、藝術評論家たるにあり、此意味に於ては其「藝術とは何ぞや」こそ、伯が本領を發揮すべく心血を傾寫したる名作の一たるを了せん、本書は即ち此「藝術とは何ぞや」を譯出したるもの、文學に音樂に美術にあらゆる藝術の總てを總括して或は宗教上より、或は道徳上より、扱は眞善美の上より之を批評し評論して現代の所謂藝術を抑制し過去の藝術を温めて將來の藝術を知に及ぶ眞個に得易からざる大文學と謂ふべし、今や此大文學は有馬文學士の健筆に和けられて世に出づ、苟く藝術の何たるを知り、且つ之に入神し、之を論作せんとする士は必ずや本書を繙讀せざるべからず。

全一冊 洋裝大判美本紙數三百頁
並製正價四十錢郵稅八錢
特製金五十五錢郵稅拾錢

博文館發行

文學士 小川銀次郎君著

近世美術史

小川文學士藝に本書に對する上中古より近世までの變遷を著し再び筆を近世美術史に執り遂に本編を公にするに至れり本編は第拾七世紀以後即ち伊太利美術ポロチーズ派より現時に至る迄の美術變遷史にして行文は愈々暢明に挿圖は愈々厪密を極む疑に上下の世界美術史を講求せし人は必ず本編をも共讀し以て其完備を期し給ふべきなり。

全一冊 洋裝大判紙數三百二十八頁
定價並製金四拾錢郵稅八錢
特製金五拾五錢郵稅金十錢

博文館發行

小川銀次郎君文學士 世界美術史

上下二冊洋裝大判美本
紙數各三百廿餘頁
定價壹冊並製四拾錢稅郵八錢特製五拾五錢
郵稅十錢

● 序論 上古史	● 第一編 埃及美術	● 第二編 希臘美術	● 第三編 羅馬美術	● 第四編 エトラス	● 第五編 中世史	● 第六編 ビザンチ	● 第七編 回々教美術	● 第八編 回々教美術
● 序論 中世史(續)	● 第三編 ローマン	● 第四編 ゴチック	● 第五編 ヴァイナル美術	● 第六編 文藝復興記	● 第七編 ジョット	● 第八編 ヴィンシイ	● 第九編 隆盛の時	● 第十編 隆盛の時

博文館發行

見よ!! 樗牛全集(全部)!! 見よ

樗牛博士識見一世を抜き學名一代に高し評論の筆に文壇を輝かす事數年その間又倫理美術に關して斬新の提説を公にして學界に雄飛したり而して前後一貫常に社會人生の深處を求め晩年の光明に接してより猛烈として身を妙法の宣傳に委し三世の傑出者としてその短き一代を終りこの時々の議論不朽の著作は收めて此全集五冊の中にあり日本文明の將來と人生の光明とに焦慮する人士はこの中に一條の大天火を見ん

第壹卷 ● 美學及美術史
 著者の肖像及自筆原稿 佛像寫真版及精巧木版數多挿入 紙數五百五十二頁
 正價金壹圓五拾錢 送料拾五錢

次目要概
 第一部 美學上の研究 ①美學上の理想説に就て ②美感に就ての觀察 ③月夜の美觀に就て ④宗教と美術 ⑤詩歌の所縁と其對象 ⑥日本畫の過去及び將來に就いて ⑦歴史畫論 ⑧歴史畫の本領及び題目 ⑨再び歴史畫の本領を論ず ⑩坪内先生に與へて三度び歴史畫の本領を論ずる ⑪審美綱領を評す ⑫壯美及び優美 ⑬外界の美 ⑭自然美 ⑮第二部 日本美術史(未定稿) ⑯總論 ⑰奈良朝以前の美術(上代、推古朝、天智朝の美術) ⑱天平時代(奈良朝の文化概見、奈良朝の佛敎、彫刻、繪畫、木邦佛像の形式と希臘敎式との關係) ⑲平安朝(前期、後期)

第貳卷 ● 文藝及史傳 上
 著者少壯時代の肖像及筆蹟挿入 紙數壹千頁
 正價金壹圓五拾錢 送料貳拾錢

次目要概
 文藝評論 ①文學及び人生 ②近松果林子 ③緒論の批評及其方法 ④戯曲及び之に對する近松の意見 ⑤近松戯曲の種類及び結構 ⑥全材料に就いて ⑦近松に於ける人物性格 ⑧果林子の人生觀 ⑨果林子の女性 ⑩第一期 ⑪運命と悲劇 ⑫歴史的精神 ⑬作家の道念と觀念 ⑭詩人の模倣と天然 ⑮文學と美術 ⑯天才論 ⑰叙事詩 ⑱叙情詩 ⑲第二期 ⑳我國現今に於ける批評家の本務 ㉑支那文學の價值 ㉒坪内逍遙が史劇に就いての疑ひを駁む ㉓曲亭馬琴 ㉔第三期 ㉕文明批評家としての文學者 ㉖嗚呼凡俗改良、外數十項

振替 貯金 口座 第百四十四番 發兌 元 東京 市日 本橋

第參卷 ● 文藝及史傳 下
 高山博士寫真挿入 紙數八百頁
 正價金壹圓五拾錢 送料拾五錢

次目要概
 ①釋迦 ②緒言 ③佛陀の誕生 ④宮中の生活 ⑤三苦 ⑥佛陀の決心 ⑦佛陀の出家 ⑧重慶及乾陞 ⑨佛陀の學童 ⑩阿羅羅山人の成道 ⑪佛陀の布施 ⑫王舍城に於ける佛陀 ⑬父子の再會 ⑭佛陀の入滅 ⑮附言 ⑯平相國 ⑰平家興隆の由來 ⑱清盛の前半生 ⑲一門の榮華 ⑳重盛論 ㉑法印問答 ㉒法皇の幽閉 ㉓源氏の勃興 ㉔入道の最後 ㉕清盛論 ㉖管公傳 ㉗序論 ㉘菅原氏の傳統及少時 ㉙管公の生れたる時代 ㉚管公の性格 ㉛政治上の管公 ㉜詩人管公 ㉝管公の崇拜 ㉞管公平表 ㉟大隈伯が管公談の後に書了 ㊱管公論に就て ㊲史傳雜纂 ㊳南歐美術談 ㊴ナポレオン三世 ㊵古事記 ㊶神代卷の神話及歷史外十四項 ㊷文藝評論補遺

第四卷 ● 時勢及思索
 高山博士寫真挿入 紙數千百餘頁
 正價金壹圓五拾錢 送料貳拾錢

次目要概
 第一期 倫理問題研究の時代 ①人生終に奈何 ②厭世論 ③老子の哲學 ④道徳の理想を論ず ⑤人生の價值及び厭世主義 ⑥東西二文明の衝突 ⑦島國的哲學思想を排す外に七目 ⑧第二期 國家主義の時代 ⑨日本主義 ⑩日本主義と哲學 ⑪國民的哲學 ⑫世界主義と國家主義 ⑬宗教と國家 ⑭我國體と新版圖 ⑮自殺論外廿三日 ⑯第二期 雜編 ⑰歷史と人種 ⑱成敗と正義 ⑲社會問題 ⑳基督敎徒の進退主義 ㉑士の徳操 ㉒私立學校を論じて當局者の注意を喚ぶ ㉓外七十九日 ㉔第三期 信仰覺醒の時代 ㉕美的生活を論ず ㉖日蓮上人とは如何なる人ぞ ㉗日蓮と基督 ㉘吾が好む文章外に八目 ㉙第三期 雜編 ㉚無題論 ㉛笑はん乎狂せん乎 ㉜口耳の學 ㉝空腹高心外に五十目

第五卷 ● 想華及消息
 高山博士墳墓筆蹟挿入 紙數六百廿四頁
 正價金壹圓五拾錢 送料拾五錢

次目要概
 ①瀧日入道 ②歴史小説 ③感想 ④苦味の霧 ⑤戀情論 ⑥故郷論 ⑦雲中梅 ⑧今様三首(教盛、忠度、小春) ⑨推亭那の悲哀 ⑩傷心録 ⑪わがそての記 ⑫厚積薄發 ⑬冷城のひびき ⑭送年の辭 ⑮秋色 ⑯歳暮の思ひ出しの記 ⑰雜編 ⑱馬山紀行の序詞 ⑲夏季の學生 ⑳海の文藝 ㉑清見瀧日記 ㉒鎌倉の話し ㉓細里の弟を戒むる書 ㉔猶多放言 ㉕人と愛情 ㉖疑問 ㉗消息 ㉘仙臺より國元實交へ ㉙病院より姉崎博士へ ㉚大磯より征川臨風氏へ ㉛鎌倉より井上博士へ ㉜大磯より登張竹風氏へ(其他消息百餘通) ㉝外編 ㉞倫理教科書(社會學、倫理、自室に對する本務) ㉟世界文明史(文明とは何んぞや 羅馬帝國と基督敎) ㊱論理學 ㊲近世美學

東京 市日 本橋 振替 貯金 口座 第百四十四番 發兌 元 東京 市日 本橋

78
31

獨逸國碩學 フォンキルヒマン氏著
文學士 藤井健次郎君譯

哲學汎論

全一册 洋裝菊判紙數三百六頁
並製正價金四拾錢郵稅金八錢
特製正價金五拾五錢郵稅金拾錢

高崇なる學術深遠なる理議を平易明瞭に初學者をして了解せしむるは最も至難の業なり本書は獨逸の碩學フォン、キルヒマン氏が普通了解の便を興へんと欲し種々推究の末實在論的系統を採擇し好著を完ふせしもの其系統は特殊の科學に近遊し従つて初學者をして他の哲學系統をも完全に悟りし公平に其長所短所を發見せしむる至便あり今や藤井文學士初學者をして幽玄深遠の理議を明瞭ならしむ眞に斯學の爲め良梯と謂ふべきなり

文學博士 井上圓了君譯述

純正哲學

全二册 洋裝菊判紙數六百頁
並製正價各四拾錢郵稅金八錢
特製正價金五拾五錢郵稅金拾錢

純正哲學は宇宙人生のあらゆる原理原則を鐵定する諸學の王者たり而して上卷に於ては基ら智の學即ち認識論を究明し下卷は哲學の一大部面たる情の學及び意の學につき研明する所あり美とは何んぞや道徳とは如何なるものぞといふ美學並に倫理學に於て猶且つ講究し足らざる難關を開きこれが根本義を提唱して千古の疑問を決せんと擬せるもの其理實に深奥にして而かも其文實に平易一たび之を讀過すれば宇宙の難問人生の疑團立所に氷解せん以て我苦悶を去るべく以て他に平和を興ふべし

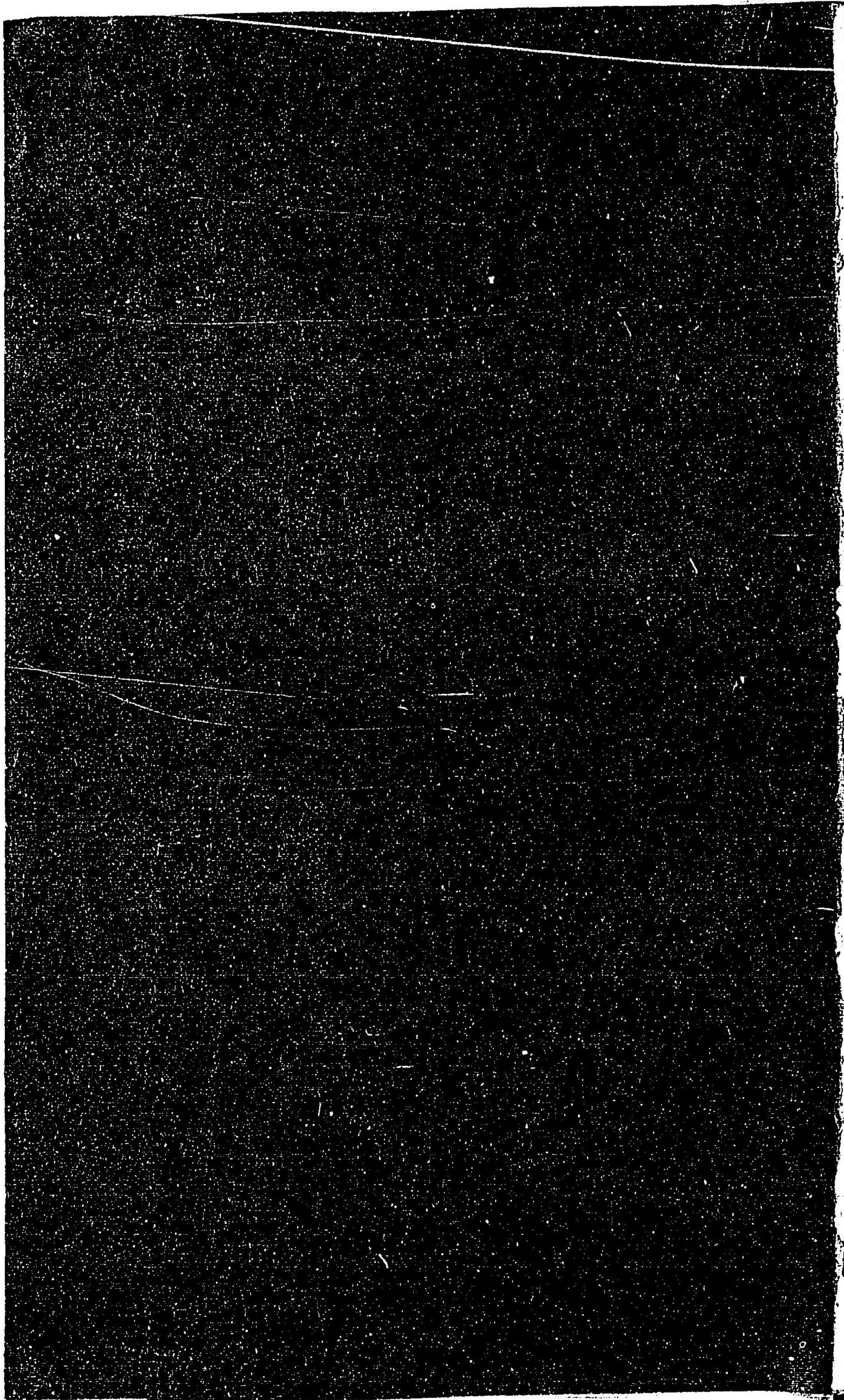
文學士 淀野耀淳君編

認識論

全一册 洋裝菊判紙數二百五十六頁
並製正價金四拾錢 郵稅金八錢
特製正價金五拾五錢 郵稅金拾錢

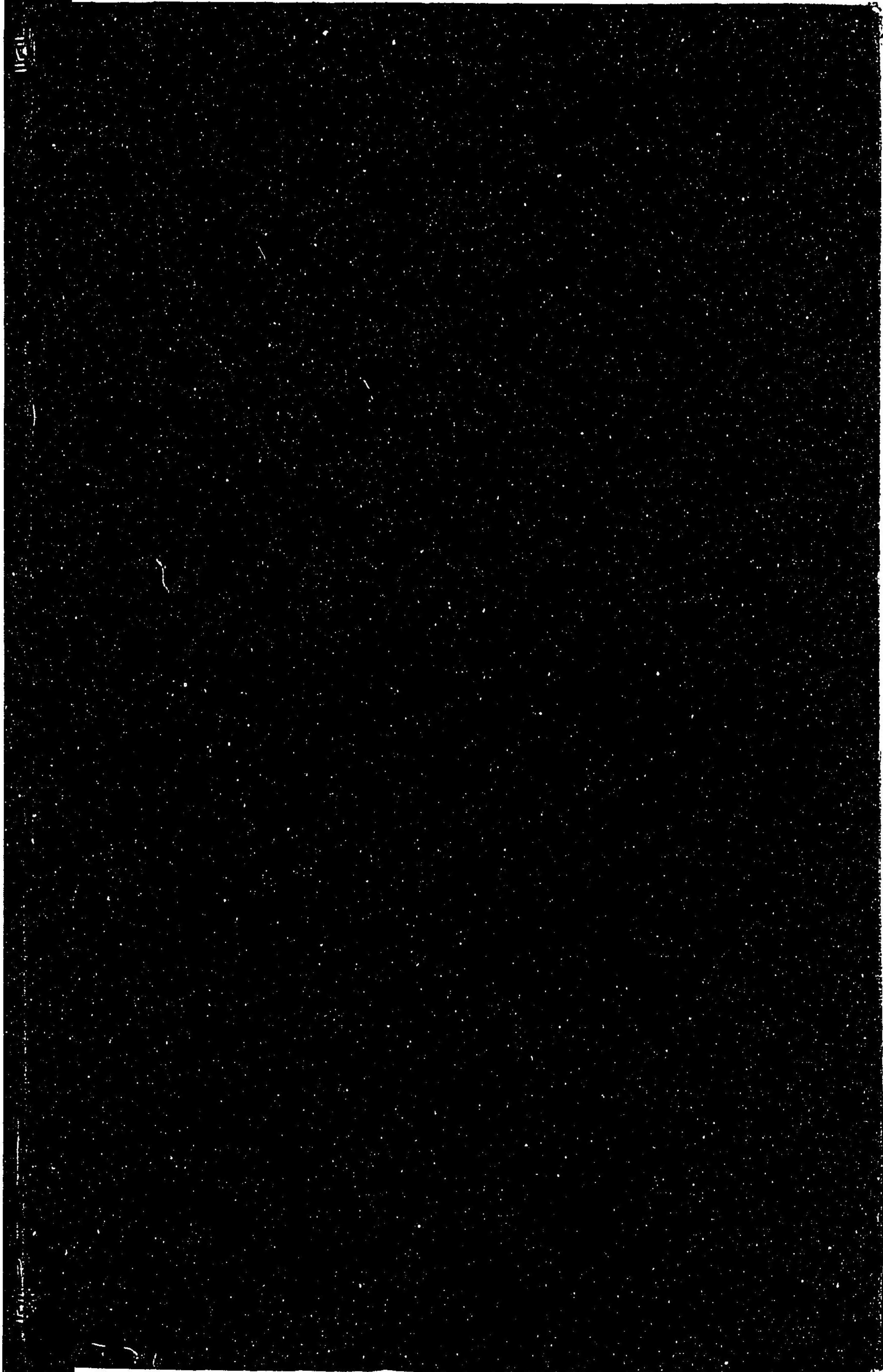
認識論は哲學中の最も根本的研究にして實に純正哲學の依つて立つ所なり然るに從來本論の參考書極めて少なく殊に之を體系的に敘述したるものは殆ど稀なり是れ斯學の研究に興味を有する者の常に遺憾とする所なりき本書は純正の科學的哲學に依り成し得る限り認識論を體系的に敘述せんと試みたるものにして緒論本論數編に分ち更に結論に於て認識の確度及び限界に就て反覆詳論し遂に認識と信仰の問題に就て解説するに終る要するに本書は局部的の敘述に偏せず又た皮相的の概論に陥らず秩序を立て體系を附して認識論を解説したり

東京市本區橋本町三丁目四番 博文館 發行元



4

78
3





084832-000-8

78-3

文芸論

田中 伊藤次/著

M41

DBA-0180

